

# オランダ留学便り



古在豊樹

# オランダ留学便り

古在豊樹

# 目次

まえがき 7

1975年

- 11月 7日 日本の皆様、お元気ですか 21
- 11月 2日 初めての外国オランダへ 21
- 11月 3日 スキポール空港でパスポート入り財布を盗られる23 / 安ホテルに泊まる 24 / 深夜の訪問者 25
- 11月 4日 ハーグの日本大使館を探す26 / 旅行者用小切手と航空券の再発行手続きをする 27 / やっとワーゲニンゲンに到着する 28 / 失敗と冒険を大いに笑う 29 / 千金に値する経験をする 30
- 11月 5日 警察署に出頭する 31 / 買い物をする 31 / オランダの家庭をかいま見る 32 / アルバダ家に夕食を招待される 33
- 11月 6日 留学研究生活が始まる 36
- 11月 7日 コンピュータを使い始める 37 / オランダの食事 38 / 本屋さんに寄る 39
- 11月 8日 楽しかったアールスメアへの花市場と園芸展示会見学41 / 温室の環境制御にコンピュータが利用されている42 / 日本人にも創意が欲しい 42 / ポートによる運河めぐりとポルノ雑誌店 43 / クロイさんのさよならパーティー44 / あこがれのドワイト博士と話せた 45 / オランダ人と日本人 46 / 服装のセンスが違う 46 / 英会話能力の限界を感じる 47 / アナリスさん 48 / IAC (国際農業センター) 48
- 11月 9日 洗濯をする 49
- 11月 10日 ドワイト氏の論文を読む49 / 研究パートナーのヤンと話す50 / 人のつながりと広がり 51 / リベリア人と話す 51
- 11月 11日 研究生活が始まる 52 / 韓国人と話す 53 / さらに英会話能力の限界を感じる 53
- 11月 12日 園芸工学研究所(IMAG)を訪問する 54 / 食生活が変わる 56
- 11月 13日 少しずつ知人が増える 57
- 11月 14日 パスポートがもどる 58
- 11月 15日 日本人と遊ぶ 59

- 11月16日 59
- 12月20日 国際討論会での議論に圧倒される59 / 討論会の途中の見学会でルーミス氏に感銘を受ける 61
- 12月23日 クリスマス・パーティー62 / 天真らんまんドウィット教授63
- 12月24日 ゴッホ美術館を訪ねる66 / アムステルダムである安ホテルに出会う 67 / 教会でクリスマスイブを過ごす 68
- 12月25日 クリスマスの夕食招待 69

1976年

- 1月 1日 おおみそかパーティー 69 / 多国籍パーティー 70 / 誤解からダンスするはめになる 71 / 元旦0時のバカ騒ぎ 73 / 再びダンスを 74 / 飲み過ぎと食べ過ぎで吐く 75
- 1月 3日 アンネフランクの家と国立美術館に行く 75
- 1月14日 日本人と日系ブラジル人に出会う 77
- 1月16日 急な見学依頼を何とか切り抜ける 79
- 1月17日 ロシア人の苦労話 80
- 1月19日 農業機械化展示会 81
- 1月21日 温室研究者と出会う82 / わたしの顔写真が雑誌に掲載される84 / 子供が誕生したとき 84 / 子供との国際親善 85 / オランダのストーム 85
- 1月22日 夕食に招かれる 86
- 1月24日 専門外の勉強 86
- 1月31日 待ちにまった温室見学に興奮87 / ベルギーのブリュッセルのホテルに泊まる 90
- 2月 1日 ブリュッセル市内見物 90
- 2月 2日 ニーセン教授に会う 92
- 2月 4日 園芸展示会见学 94
- 2月 5日 95
- 2月 6日 生タマゴをぶつけられる 95
- 2月 8日 再び温室園芸展示会へ 97 / 夜のアムステルダム観光 98

- 2月11日 デイクソホールン博士と会う 100
- 2月12日 ユリアナ女王来る 101
- 2月14日 オランダのパーティーの雰囲気 101 / パーティーでの議論 103
- 2月15日 オランダ人の外国語能力 104
- 2月21日 遠足で花の展示会へ 104
- 2月22日 ユトレヒトのデ・ハール城見学 106
- 2月24日 日本語のわかるオランダ人 106
- 2月25日 引っ越しを手伝う 107
- 2月26日 ヤンの家で夕食 107
- 3月 1日 カーニバルで踊る 108
- 3月 7日 英国にわたる 109
- 3月 8日 園芸試験場を訪ねる 110
- 3月 9日 温室作物研究所を訪ねる 111
- 3月10日 国立農業工学研究所を訪ねる 114
- 3月11日 大英博物館を訪ねる 115 / エフォード園芸試験場を訪ねる 116  
/ ロイヤル・フェスティバル・ホールでオーケストラを聴く 117
- 3月12日 ロンドンの国立美術館に行く 117 / 思いつきでパリに飛ぶ 118  
/ 英国での成果に満足 119 / 予備知識ゼロのパリ 119
- 3月13日 ルーブル美術館で感動する 120 / 印象派絵画に酔う 121 / 疲労  
するが満足する 121
- 3月14日 ブルタニューの森を散策する 122
- 3月17日 ドウイット氏の指導を受ける 123
- 3月18日 討論会を組織する 124 / ドウイット氏が目の色を変える 125 /  
研究とは何かがやっと分かりかける 126
- 3月24日 温室設計の相談にのる 127
- 3月30日 アルバダ夫妻に干拓地帯を案内される 127 / あと1ヶ月のオラ  
ンダ滞在 129
- 4月13日 130
- 4月14日 日本人訪問者への批判 130

- 4月15日 オランダの温室構造 131
- 4月16日 1人でロッテルダム観光131 / ボーイマンズ美術館に満足する  
132 / デルフトを訪ねる 132
- 4月17日 スヘゲニンゲンとマドローダムで遊ぶ133 / マウリッツハイス  
美術館で楽しむ134 / テイラー博物館でミケランジェロの作品  
を見る 134 / キューケンホフの庭園で花を楽しむ 135
- 4月18日 オランダ人は春の到来を楽しむ 135
- 4月19日 思いつきでドイツに行く 136
- 4月20日 温室会社を訪ねる 137 / 温室地帯を散歩する 138 / オランダで  
は髪も身体もよごれにくい? 139
- 4月21日 温室野菜試験場のコンピュータ温室を見る139 / ストライボッ  
シュ氏の顔色が変わる 141 / 温室コンピュータ・メーカーを訪  
ねる 141 / 農家のコンピュータ温室を見学する 143
- 4月22日 アールスメアの花き試験場へ 144
- 4月23日 研究成果をドワイト先生に報告する145 / ドワイト先生に  
反論する 146 / ヤンとの討論 147 / 研究成果の出版を勧められ  
る 147 / ドワイト教授の集中力と真価 148 / ドワイト教授  
に研究のまとめ方を教わる 149
- 4月24日 ドイツへの日帰り旅行を思いつく 149 / フェンロー温室発祥の  
地を訪ねる 150 / 感動で胸が高鳴る 150 / 強行スケジュールに  
疲れ果てる 152 / オランダの開業医 152
- 4月25日 日本人によるお別れピクニック 153
- 4月28日 オランダ人によるお別れパーティー 154
- 4月29日 アルバダ家によるお別れパーティー155 / ドワイト氏の受賞  
祝賀パーティー 155 / アルバダ氏との別れ 157
- 4月30日 ドイツのハノーバー工科大学を訪問する157 / 私の性格と外国  
生活 158

## まえがき

この便りは、筆者が32才の時、1975年11月1日から1976年5月1日までの6ヶ月間、オランダの研究学園都市であるワーゲニンゲンに温室に関する研究の目的で留学している間に書かれました。この便りは、家族、恩師、同僚、友人に留学中の事件や経験を伝える目的で書かれたものであり、通常の個人的な日記とはやや異なります。妻と子供には、この便りに加えて、毎週2、3通は、絵はがきあるいは手紙を書いていた。

初めての外国生活であり、研究、生活、観光などにわたって日々新たな経験をして、留学中は興奮の連続でした。6ヶ月の間に研究論文を数編書き、また小さな専門書の原稿の主要部分を書きました。並行して、ベルギー、フランス、ドイツ、イギリスの研究所を訪ね、また美術館、博物館、公園を訪ねたり、観光をしました。また多くの方々と知り合い、世話になりました。

書かれてから23年も経てから、この「便り」を公表したのは、55才を越えた人間の、若き日への郷愁によるものではないと断定はできませんが、研究者を目指す若者にこの「便り」から何かを感じてもらえればありがたいとの思いが大きな理由です。ご批判、ご批評いただければ幸いです。なお、留学後における4回におよぶ住居の引っ越しの間に、11月17日から12月19日までの「便り」が紛失してしまいました。この間に研究者としていくつかの大きな事件、教訓を得て、それを「便り」に書いていたので、紛失が残念ですが致し方ありません。

「便り」の内容は、誤字、脱字およびオランダ語、英語などの地名と人名の一部をカタカナ表記に修正した他は、手を加えませんでした。「便り」中の登場人物にご迷惑をおかけすることは無いと信じていますが、もしそのようなことがほんの少しでもあれば、心からお詫び申し上げます。

1999年2月10日 古在豊樹

図1 オランダの地図

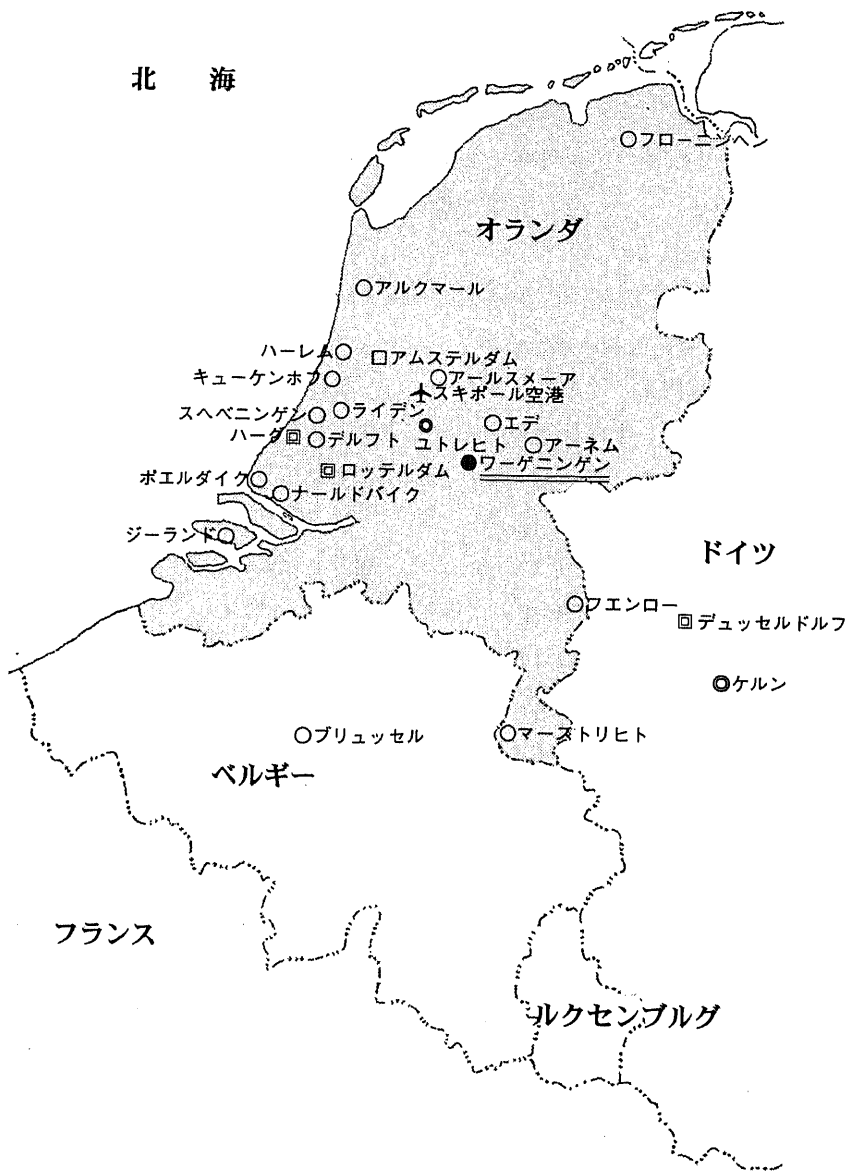
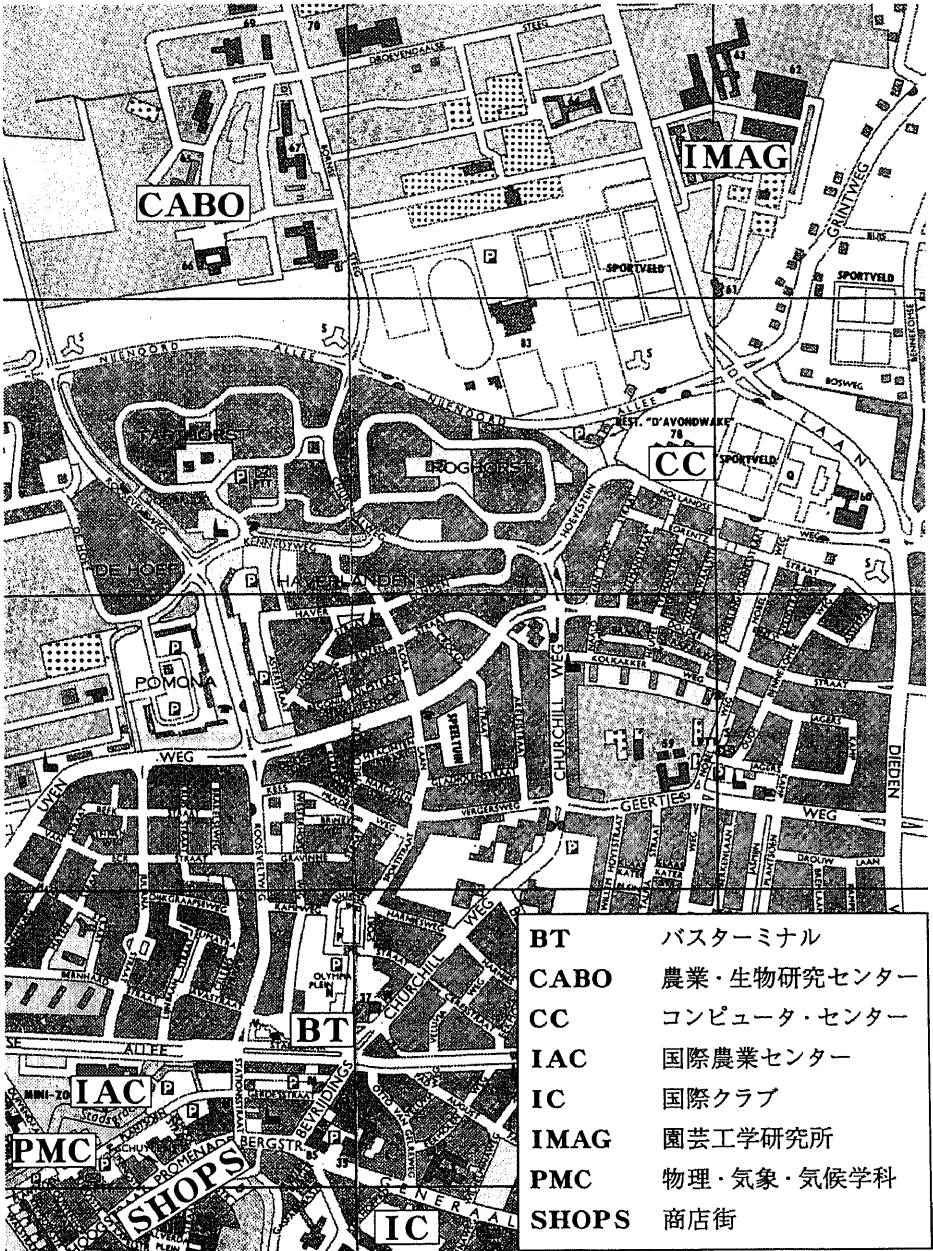




図2 ワーゲニンゲン中心部の地図



11月1日  
大阪府知事による半  
年間のオランダへの  
出張命令書

人事異動通知書(写)			
(現職)	(氏名)		
大阪府大学教員	古 登 登 樹		
(異動内容)			
昭和50年11月1日から昭和51年4月30日まで オランダへ出張を命ずる			
<table border="1" style="margin: auto;"> <tr> <td style="text-align: center;">旅 費</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">70 円支給</td> </tr> </table>		旅 費	70 円支給
旅 費			
70 円支給			
昭和50年10月30日			
大阪府知事 黒 田 丁 一			

11月3日  
パスポート入り財布  
を盗られたスキポー  
ル空港



11月3日

アムステルダム警察  
におけるパスポート  
入り財布の盗難届け

PROCES-VERBAAL  
(nagel. ontbrekende date(s))

Van: Servandighe dienst  
Plaats: Grootstation (Amsterdam)  
Aankomst: 2 november 1975  
Vertrek: 3 november 1975  
Tijd: 09.00 - 09.10

Redenen: 1. Verlies van portefeuille inhoudende bankbiljetten, munten, paspoort, enz.

Verdachte (s): XXXX & Co.  
Wettelijke (M.O.): Rekkenrekestrijd

Plaats: Amsterdam  
Tijd: 25 september 1975

De heer: A. van de Meene, hoofdagent  
aan dienst: Grootstation (Amsterdam)

geboren te Tokio op 25 september 1943  
van beroep: down-assistent  
woning te Osaka Japan

Op dinsdag 2 november 1975, omstreeks 09.00 uur, ben ik op het instappen van de bus gestapt naar Utrecht. Bij het instappen van de bus werd ik door een mij onbekende man spijtig gevraagd. Toen ik in de bus aan controle werd ik of mijn paspoort nog in mijn hand leverde portefeuille uit. Ik besloot toen, dat de hele portefeuille verdwenen was. Ik vermoed, dat de man die mij bij het instappen van de bus spijtig gevraagd, mijn portefeuille uit mijn hand heeft gepikt. Ik wil dese man niet kunnen beschrijven. Deze is nu mijn paspoort, nummer BK 260078, 40 bankbiljetten van 10 & 20 Gld, 5 van 5 & 10 Gld, 40 travelcheques van 10 dollar USA, met nummers 1071, 127, 207 tot 256, 40 travelcheques van 25 dollar USA, nummers 207, 219, 222 tot 264, 10 travelcheques van 100 dollar USA nummers 1000, 788, 789 tot 827 en een reisgids van Nederland nummer GH 585 Amsterdam Tokio via Osaka. De portefeuille nog inhoud te mijn eigendom en ik heb een kennisgeving gestuurd deze weg te brengen met het douanier van het land. De kennisgeving van het gestuurd is ongeveer 09.00 & 10.00. De nummers van de bankbiljetten zijn mij onbekend. Het is deze verklaring van mij is voorgelezen, volhard ik daarbij. En ondertekening deze met u.

A. van de Meene  
Opgesteld op verzoek, Amsterdam 3 november 1975.  
R. van der Meene

bijv.  
aan de bank  
of Politie  
ook

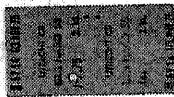
11月3日

アムステルダム中央  
駅近くのホテル・セ  
ントラルの領収書  
(11月3日宿泊。宿賃  
15ギルダー)。下:ユ  
トレヒトからハーグ  
までの電車の切符  
(11月3日の消印)

HOTEL CENTRUM  
WARMOESBOUT 15  
AMSTERDAM - TEL. 243635

3/11-75  
KAMER NO. 9

A. van de Meene  
Wendy



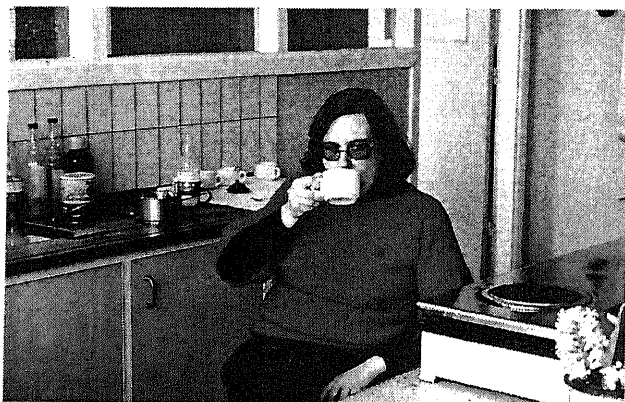
11月4日

アムステルダムから  
ハーグに向かう電車  
の中からもやにかす  
む牧場を望む



11月7日

ティー・タイムに紅  
茶を飲むホニー・  
ファン・ラールさん



1月17日

国際農業センター  
(IAC)の道路向かいに  
並ぶ住居



1月29日

国際農業センター  
(IAC)の8階から見た、  
アイススケート  
を楽しむ人々



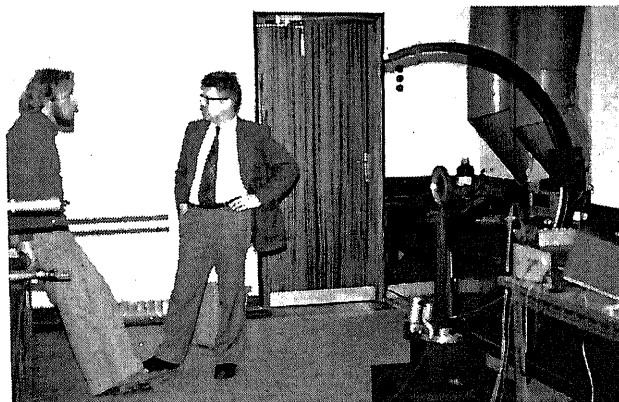
1月31日

日本人研修生の案内  
でアールスメアの  
鉢物草花生産温室を  
見学



2月2日

ベルギーのニーセン  
教授とデルツア教授  
を訪ねて討論する



2月11日  
ディクソホールン氏  
の研究室を訪ねて討  
論する



2月12日  
国際農業センターを  
訪れたユリアナ女王



3月1日  
オランダ南部のマー  
ストリヒトでのカー  
ニバル風景



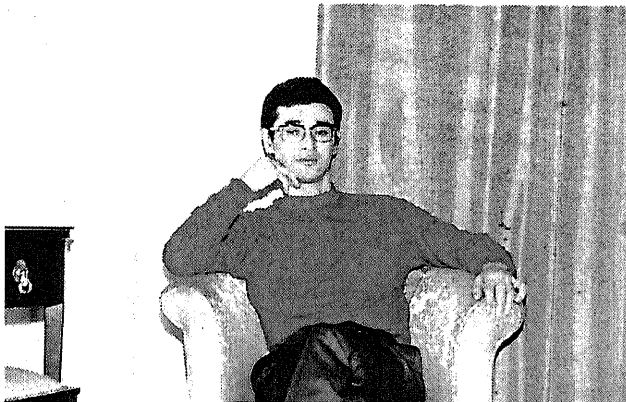
3月1日

オランダ南部のマー  
ストリヒトでのカー  
ニバル風景



3月9日

英国ロンドンのホテ  
ルの部屋で



3月10日

英国の国立農業工学  
研究所の建物。昔の  
貴族の別荘を使用し  
ている。



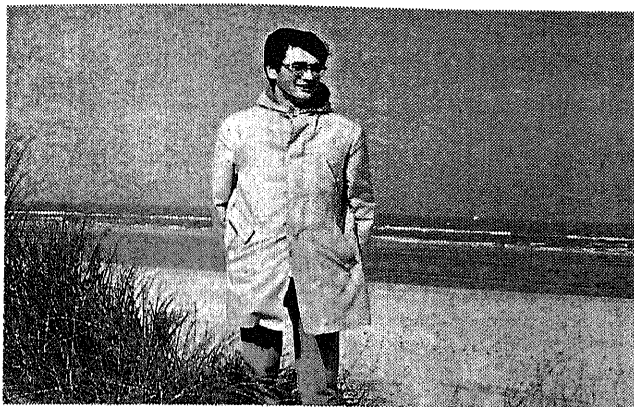
3月30日

干拓地ジールランドへの  
ドライブの途中で  
の砂丘に立つアルバ  
ダ夫妻



3月30日

干拓地ジールランドへの  
ドライブの途中で  
の砂丘に立つ筆者



4月17日

キューケンホフの  
チューリップ畑

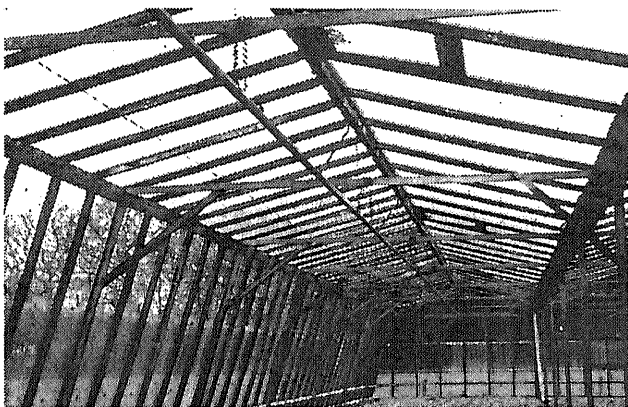




4月17日  
キューケンホフ公園



4月24日  
フェンローに現存した  
フェンロー温室の  
原型



4月25日  
オッテルロー国立森  
林公園でのお別れピ  
クニック



4月25日

オッテルロー国立森  
林公園でのお別れピ  
クニック



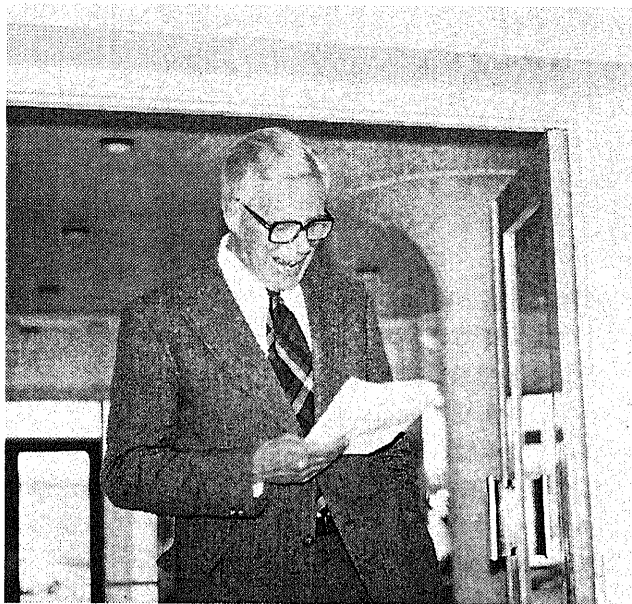
4月26日

ティー・タイムに同僚  
の話に耳を傾けるド  
ウイト先生



4月29日

ドワイト先生の祝  
賀会でユーモアに富  
んだ祝辞を述べる  
ハーストラ所長

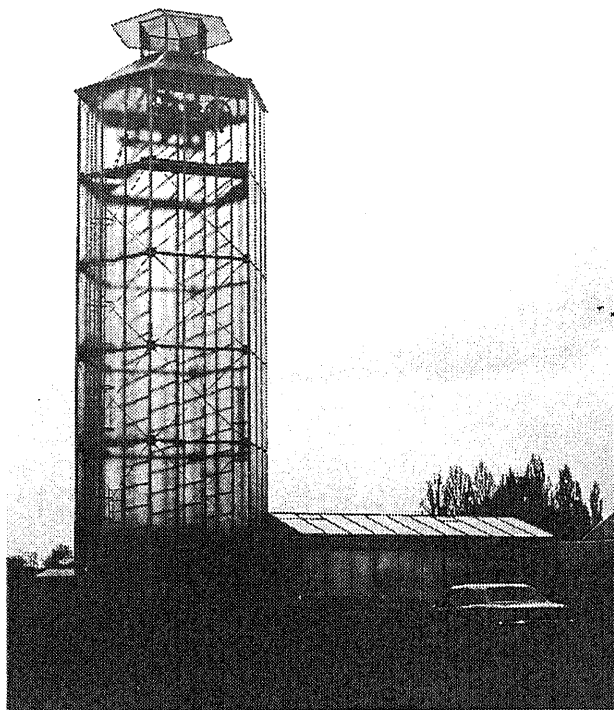


4月29日

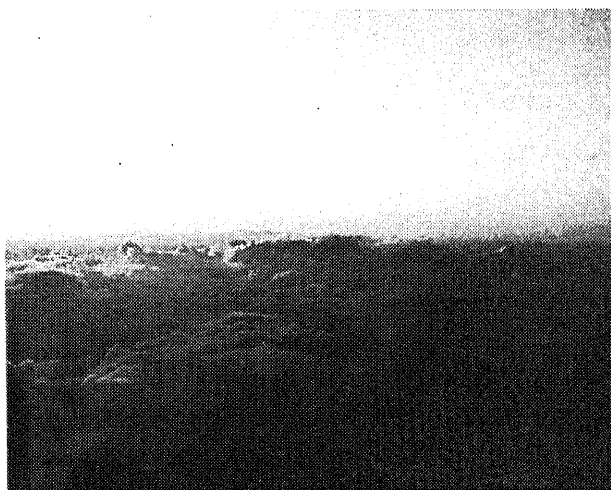
ドワイト先生、勲  
章（襟章）を胸に、奥  
様と記念撮影



4月30日  
ハノーバー工科大学  
に立つタワー温室



5月1日 帰国の  
飛行機の窓から、万  
感の思いを込めて、  
空を眺める。



11月7日（金）

日本の皆様、お元気ですか

日本の皆様、お元気ですか。私はきわめて元気です。私が日本にいるとき、また出発に際して、更には、現在も多大なご支援をいただき、皆様には心から感謝しています。皆様のおかげで、私はオランダで快適な毎日を送っています。

オランダに来てから6日間が過ぎました。日本にいる妻と子供、友人、同僚、先生方が、私にオランダ留学の機会を与えてくれたことに何とか報いたいと強く感じています。とはいえ、おみやげを買って帰るほどの金銭的余裕はないし、おみやげでは私の感謝の気持ちを表せないと感じています。そこで、私のオランダ便りを皆様にお送りして、感謝の気持ちを伝えたいと思います。ただし、毎日忙しいので、時間をかけて正しい文章を考えたり、字をきれいに書く余裕はありません。お許し下さい。誤字、脱字、文法エラーが多いかと思いますが、読み返して文章を直す時間的余裕がありません。また、頭が英語専用になり替わっていて、正しい日本語がとっさには出てこないことも理由の一つです。

この手紙は、ひとまず、愛する妻と子供、大阪府立大学矢吹研究室の矢吹先生、鈴木先生、青木先生、坂口様、千葉大学三原研究室の三原先生、高倉先生、友人の重さんと文子様、東京の鷺宮と国分寺に住んでいる両親に捧げます。ただし、コピー部数に限りがあるので皆様で回し読みして下さい。友人の長谷川氏、上和田氏、金関先生にも見てもらって下さい。その他、この手紙を喜んで読んで下さると判断したら、上記の人以外に読んでもらっても結構です。珍談、奇談から話が始まりますが、びっくりしなくて結構です。また私の真意を理解してくれるようお願いいたします。この手紙あるいはそのコピーを送るのは、堺市の私の自宅、大阪府立大学、千葉大学、鷺宮の両親宅の4か所です。鷺宮で読み終ったこの手紙、またはそのコピーは、大阪府茨木市の山口様宛に送って下さい。

11月2日（日）

初めての外国オランダへ

朝8時35分に家を出る。路子、由武、ゆり、由春及び青木夫妻の見送りを受け

て、堺市新家町交差点にて、矢吹教授及びその次男（とっちゃん）のタクシーに同乗し、大阪空港に向かう。日曜日のせいか、道路はすいていて9時過ぎには空港に到着する。搭乗手続きを済ませた後、3人でコーヒーを飲み、9時40分頃に別れる。大阪に来て以来、矢吹教授に最も親しみと尊敬を感じた。オランダ留学のチャンスを与えてくれた教授に心から感謝したい。しばらくの間みやげ物屋をのぞいたりして、10時30分に東京の羽田空港へ向けて大阪を発つ。

11時35分頃に東京羽田空港着。国際便の搭乗手続きをした後、空港ロビーに行ったが、秀子さんは見当たらなかった。しばらくして、秀子さんと達也君が現れたので、秀子さんはひれかつ定食を、私と達也君は刺身定食を食べる。その後達也君にはミニカーを買い、陽子ちゃんのためには小さなバッグを買ってやる。（由武君とゆりちゃんや由春君にはもっと立派なおみやげを買って帰りますよ。）秀子さんから彼女と菅原さんからのせん別をもらう。食事後、空港ロビーに戻ると、後から来た孝彦夫妻と陽子ちゃんの見送りに会う。せん別とネクタイ2本をもらう。

午後1時過ぎに出国手続きのために、皆に別れをつけ、税関入口に入る。手続きを終え、出発を待つ間に、タバコとウイスキーと絹の財布2個をオランダ人へのおみやげ用に買う。自分のカメラ用のフラッシュも買った。皆と別れて緊張が取れたせいか、我慢していた頭痛がひどくなる。2時になると、搭乗者はバスに乗るようにとのアナウンスがあり、バスで飛行機まで行く。そして機上の人となる。定時（14時25分）に出発。定員は100人以上なのに、乗客は20～30人のみ。ソ連・アエロフロート航空のイリュージョン62という機種である。

モスクワに着くまでは頭痛がひどく、食事も取れなかったが、モスクワで一度着陸し、1時間ばかり空港ロビーで休んでいる間に具合が良くなった。外の空気を吸ったのが良かったのであろう。空港には雪が数cm積もっていた。気温は-1°Cとのことだった。3日続きの歯痛もおさまってきた。頭痛はおそらく歯痛とそれに伴う睡眠不足のせいだったのだろう。モスクワ空港のロビーは立派だったし、機内のサービスも悪くはなかった。もともと私は、サービス過剰は好きではないのでちょうど良かった。「外国にきたな」と感じ始めた。機内で三度目の食事を取り、2～3時間してからやっとオランダのスキポール空港に着く。空港で入国手続きを終え、空港近くのホテルの、出迎えのバスに乗り、現地時間22時頃ホテル着。熟睡。

11月3日（月）

### スキポール空港でパスポート入り財布を盗られる

ホテルで朝食を取った後、ホテル専用のバスで8時50分頃に空港に戻り、9時発のユトレヒト駅行きの空港バスに乗る。バスのステップに足をかけて乗ろうとした時に、後ろに並んでいた女の人に一寸ボールペンを貸してくれと言われて貸す。その時、私の前に並んでバスに乗りかけていた男の人に、振り向きざま、強く押される。まさかとは思ったが、座席に腰掛けて背広の内ポケットに手をやると財布がない。（以下は息詰まるような話だがハッピーエンドだからご心配なくお読み下さい。）あわてて、あちこちのポケットを探したが見当たらない。次いで、カバンとスーツケースを捜したが見当たらない。ああ、あの時スリ盗られたのかなと思いながらも、バスはユトレヒトまで止まらないので、どうしようもない。バスの乗客は私を含めて数人であった。先程のボールペンを貸した女と私を押した男は、逃げて、バスの乗客の中にはいないのである。

ユトレヒト駅に着くとすぐ、財布をなくしたので警察に行きたいが、警察はどこかと通行人に聞いたがオランダ語で答えられて、さっぱり分からない。そこで、近くのホテルに飛び込み、電話の受付係の人に事情を話す。そして、昨夜泊まったホテルに電話を掛けてもらい、私がホテルにパスポート、財布を忘れたのではないことを一応確認した後、タクシーで警察署に行く。

財布にはパスポート、旅行者用小切手（額面40万円）、現金200ドル、帰りの航空券、つまり全財産が入っているの、その旨を証明してくれと警察官に頼んだが、係が異なるので私の所ではパスポートの紛失証明書しか書けないと言う。

そこで今度は東京銀行（小切手の振りだし銀行）のアムステルダム支店に電話を掛けたら、ユトレヒト市の警察はそういうことに馴れていないからアムステルダムの警察に行った方が良いという。ただし、先にハーグの日本大使館に行った方が良いというので、ハーグの日本大使館へ行くことにした。このとき日本円で7万円とオランダのお金約100ギルダー（1万円）を持っていたので、交通費は十分あって、その日の生活費に困ることはなかった。スキポール空港で1万円だけギルダーに替えておいた。

ハーグへ行く前にスーツケースとおみやげの入った袋をユトレヒト駅の一時間前までに預けて、持ち物をショルダーバッグだけにした。急いでいるのでハー

グ駅からタクシーに乗った。ところが、私がメモしておいた日本大使館の住所は古いらしく、そこに行ったら建物の中はからっぽ。運転手が隣の建物へ聞きに行ってくれて、移転先を聞き、やっと大使館に着く。大使館に着いたら、ドアが開かない。呼び鈴を押すと女の人の声がかして、今日は11月3日で文化の日だから休日だ、明朝10時頃に来てくれ、今は日本人は誰もいないと、(もちろん英語で)言う。

仕方なくアムステルダムに引き返し、警察署に行く。そこの警察官は親切で、すぐ事故調書を作ってくれた。パスポートの番号は別の紙に控えてあった。事故調書を持って、東京銀行アムステルダム支店に行く。そこには日本人がいた。オランダに来て初めて日本語が使えた。事情を説明すると、旅行者用小切手の発行番号の控えを私が持っていたので、それならおそらく旅行者用小切手は再発行出来るだろうと言う。一安心である。小切手が再発行出来るかどうかは明日の午後に分かるからその頃電話してくれと言われる。小切手紛失届を書き終えたら夕方5時30分を回っていた。昼食を取っていなかったなので、自動販売機でパンを買い、売店でコココーラを買って空腹を一時的に満たす。それにしてもアムステルダムは美しい町であるという印象を受けた。銀行の人(西さんと神原さん)が近くのホテルオークラその他を電話で当たってくれたが、いずれも満室で駄目。結局自分で捜しますからということで別れる。

それから、タクシーばかりは乗ってられないので市電でアムステルダム中央駅に戻り、近くの観光案内所でホテルの予約をしようとしたがその案内所が見つからない。バスの案内係に聞くと、観光案内所は夕方には閉じてしまうとのことである。結局、近くのホテルを一軒ずつ聞いて回ることにした。大きなホテルは皆駄目なようなので、小さな安っぽいホテルを回ることにした。

#### 安ホテルに泊まる

4軒目のホテルに入ってびっくりした。ホテルと書いてあるからドアを開けたら、中はバーなのである。ホテルではないのですかと聞くとホテルだと言う。シングル部屋が空いているかと聞くと、空いているというのでそれではいくらかと聞くと50ギルダー(5千円)と言うので、それでは頼むという「OK」といい、宿泊者記入票に記入する。それが終わると、その人が盛んにフィフティーン(15)、プリーズと言うが、何のことか分からず、聞き直すと、ホテル代は前払いだという。私がフィフティーン(15)ギルダーをフィフティ(50)ギルダーと聞き間違えていたのである。この瞬間「しまった」と思った。いくら安い方が良くと言っても1泊が1500円は安すぎる。しかしもうどうし



ようもない。思いきって15ギルダー払って部屋の鍵を受け取る。

部屋を開けると畳約2枚分の広さで、そこに通常のベッドの半分の幅しかないベッドと安っぽい木製の椅子が1つ、それに灰皿、水道の蛇口、それですべてだった。東京の山谷、あるいは大阪の釜ヶ崎のホテルがこんなのだろうと思ひながら、あきらめる。まだ夜8時半頃だったが、疲れ切っていたのですぐベッドに横になる。ベッドのスプリングが軟らかすぎてベッドに乗ると腰が30cm位沈んでしまう。それでも、すぐ寝ついた。夜12時頃に目が覚める。窓の外で、誰かがけんかをし、他の人は酒を飲んで騒ぎ、ともかくうるさい。窓からのぞくと半分くらいは黒人である。

### 深夜の訪問者

うつらうつらして結局また寝入ってしまった。しばらくして誰かが私の部屋のドアをノックする音に目を覚ました。暗かったが目をこらして見ると、ドアのノブがかすかに動いて、外からドアを開けようとしているのが分かる。時計を見たら午前4時前である。もちろん、私の知人であるはずがないから、そおっとドアの近くに身構えて、もし入って来ようとしたらドアを押さえる用意をする。すべて無言のままである。声を出すのはまずいと思ったからだ。

すると、1分後位に隣のドアをノックし始めた。かなり強くである。しかし、隣の人も何も答えない。すると、あきらめて帰る足音がした。だが、すぐ戻って来て、今度は隣の部屋のドアを激しく（おそらく、靴を脱いでその靴で）ノックし始めた。すると、部屋の中から男の人の声で「イエス」と答えるのが聞こえ、部屋の外から女の人が「ジョー」と叫ぶ声が聞こえた。30秒後位に隣のドアを開ける音が聞こえた。どうやらその女と男は知り合いらしい。そして私の部屋をノックしたのは部屋を間違えたいらしいのである。“ジョー”とは男の名前であろう。ややあって、その女が激しく泣き出した。何かを訴えているのだが英語ではないので何を言っているかは分からない。しかし状況から、女の人が何か辛い目にあってそれを泣いて訴えて、男が時々なぐさめの声をかけているようだ。安宿だから隣の声はつつ抜けである。

20分間位、女は間欠的に泣きじゃくっていたが、そのうち、それがやんで、男のしのび笑いが始まり、ややあって女もくすくす笑い出した。どうやらセックスを始めたいらしい。やっと安心して再び寝た。次に目が覚めたらまだ朝の6時だったが、長居は無用なので、着替えて、昨夜買っておいた菓子パンとバナナ1本を食べて6時半に宿を出る。

11月4日 (火)

### ハーグの日本大使館を探す

ホテルを出て、ブラブラ歩きながらアムステルダム中央駅に着き、そこから電車に乗ってハーグの日本大使館に向かう。時間的にはまだ早すぎるがハーグの町並みでも見物してから大使館に行こうと思ったのである。とにかく、あの安宿に長居は無用である。アムステルダムからハーグへ向かう景色は素晴らしいの一言につきた。日本では決して見られない幻想的な情景である。一面の牧草地に牛、羊、馬が群れており、地上2m位までだけに濃いもやがかかっている。

写真を1枚撮った。その牧草畑の中にフェンロータイプの連棟温室だけでなく、古い型の温室やら、単棟、2連棟の温室もある。つくづくオランダに来て良かったと思う。この温室とこの牧草地を見ただけでも、オランダに来た意義があったと感じた。今度、近いうちに改めてゆっくりこの辺を見ようと心に誓う。そんなことに心を奪われていたら、電車が止まった。「あっ、いけない、もうハーグに着いたのか」と思って急いで降りたら、どうも昨日来たハーグの駅の印象と異なる。急いで近くの人に「ここはハーグですか？」と聞くと「ノー」と答えたので、また急いで電車に飛び乗った。電車の中でハーグの駅は次ですかと聞くと、いや、今停車した駅がハーグだと言う。では次の駅はどこですかと聞くとロッテルダムだという。仕方がないのでロッテルダムまで行って、またハーグへ引き返した。時間は十分あるので別にあわてなかった。ハーグからロッテルダムへ行く途中の景色も実に美しかった。木々の紅葉、牛の群れ、まっすぐにのびている運河……。昨日は忘れていた美しさを感じる心が取り戻せたような気がする。

これで、到着後3日目にして、ハーグ、ユトレヒト、ロッテルダム、アムステルダムとオランダの主要都市の大部分は回ったことになる。再び、ハーグに戻った。昨日は急いでいたのでタクシーで行ったが、今日は10時までに行けばいいので、まだ1時間以上の余裕がある。そこで市電に乗って行くことにした。案内係に何番線に乗るかを聞いて、8番線に乗った。車内の中学生とおぼしき女の子に日本大使館に行くには何という駅で降りたらいいかと聞くと、運転手にたずねてくれて、そこに来たら教えてやるという。こんな中学生が実に上手な英語を話す。うらやましい限りだ。何となくうれしくなった。心はずむ思いである。町並みも実に美しい。

さて、その市電は5分も走らないうちに止まってしまった。運転手がオランダ語で何か言っている。先ほどの中学生に聞くと、前の市電が事故を起こしたと言う。ぞろぞろ乗客が降りだして、市電内に残ったのは私と中学生とその他数人になってしまった。しばらくして後ろの車両（市電は2両連結）から小学生が数人移動してきた。20分位待ったが、市電は動かない。すると中学生は小学生に何やら言った後、私に「私は市電を降りてバスで学校に行くが、この小学生が市電で大使館の方に行くので、後は彼らに聞いてくれ」と言うので、中学生と別れる。

また、10分ほど待ったが、まだ動かない。小学生は運転手に何やらオランダ語で聞いた後、私達もバスで行こうと言うので市電を降りる。この小学生の英語はあまり上手でない。バスを降りて小学生と10分位あちこち探した後に大使館を見つける。その小学生に、持ち合わせの日本の5円玉と10円玉を1枚ずつやって握手して別れる。とても親切な国民である。5円玉と10円玉をもらったことをとても喜んでくれた。大使館を探している間も周囲の景色の美しさに心を奪われた。古城あり、古びた教会あり、紅葉した樹々、れんが造りの道路、十分に広い庭をとった家々……。

大使館でのパスポート再発行依頼の手続きはすぐに終わった。2~3週間以内にパスポートは再発行されるから、連絡するとのことである。一件落着。テレックス代17ギルダー（1,700円）を払えば10日以内にパスポートを再発行することが可能だと言われたが、オランダから出国しなければ別にパスポートは必要ないだろうというので、17ギルダーを節約した。

#### 旅行者用小切手と航空券の再発行手続きをする

次は旅行者用小切手の再発行である。昼過ぎまでにアムステルダムの東京銀行に行かなければならないのでタクシーを電話で呼んでもらうと、どういう訳か2~3分以内にタクシーが来る。アムステルダム中央駅に戻って東京銀行に電話すると、東京にテレックスを打ったら旅行者用小切手を再発行してよいと言われたという。銀行に着くとすぐに再発行してくれた。お礼を言って銀行を出る。

パスポート、小切手が終わったので、次は航空券の再発行手続きである。私のアエロフロート航空会社の航空券はJAL（日本航空）を通じて買ったのでJALのアムステルダム支店に行ったら、「ソ連のアエロフロート航空会社の券ではどうしようもない。安い飛行機運賃で済ませようとしてJAL航空券を買わなかった罰である。航空券の再発行は出来ない。」と日本人の社員に言われた。事情

を了解したらしい隣のオランダの女の人が、アエロフロート航空会社のアムステルダム支店はこの近くだから一応行ってみたら、と耳打ちしてくれたので、道順を聞いてそこへ行く。すぐ見つかった。

事情を話すと、航空券の番号を覚えているかと言うので、覚えていないが帰りの便は1976年5月1日のSU585便だということは覚えていたのでその旨を告げ、私の名前も言ったら、すぐ調べてくれて、確かにあなたはその便を予約していると言ってくれた。そして確認のために、日本の大阪に照会してから再発行の手続きをすと言うので、ワーゲニンゲンで宿泊することになる住所を伝えておいた。この時点で、盗られた財布に入っていたもので未だ戻ることになっていないのは、現金200ドルだけになった。出発前に住友海上保険の盗難保険に加入していたので、失った現金200ドルも何とかなるかもしれない、と思う。あとでゆっくり‘保険契約書’を読んでみよう。

アエロフロート航空会社のアムステルダム支店は市の中心にあり、そこに行く途中で、オランダ観光案内書に書いてあった多くのものを見かけた。街頭でオルゴールを奏でてチップをもらう芸人、「生にしん」の酢漬け、きゅうりのピクルスの街頭売りなどである。生にしんときゅうりのピクルスを1ギルダー払って食べる。なかなかいける。日本の「しめさば」、あるいは、「こはだ」の酢漬けみたいである。

次いで、近くの市場をちょっと見て回る。ゆっくり見たかったがなるべく早くワーゲニンゲンに行かなければならないので、アムステルダム中央駅に向かった。ワーゲニンゲンのIAC (International Agricultural Center:国際農業センター)の事務局長であるチップさん(Mr.Tip)にはパスポートをなくしたので、そちらに着くのは夕方遅くなるかもしれないと電話で伝えておいたが、あまり待たせては悪い。

#### やっとワーゲニンゲンに到着する

エデ・ワーゲニンゲン(Ede-Wageningen)という駅で降り、そこからバスに乗り、終点のワーゲニンゲン・バス・ターミナルで降りる。この時、私が大きなスーツケースとかばんを持っていたので、高校生くらいの女の子が「May I help you? (お手伝いしましょうか)」と言ってくれた。「Thank you. (ありがとう)」と言うと、私の自転車が近くに置いてあるのでそれを持ってくるから待って下さい、その自転車でああなたのスーツケースを運んであげましようと言う。ありがたいことである。その女の子にも別れ際に日本の50円玉と5円玉をあげる。すると、このコインは私のアルバムに貼って、日本人からの贈り物

として大切にしますと言ってくれた。皆、親切である。午後4時半頃であった。

IACに着き、早速 チップさんに会い、事情を説明する。合わせて、私が入国ビザを持っていない旨を告げる。すると彼は、「これは私が今まで出会った中で最悪のケースだ。」と言った。とにかく、ビザがなければ不法滞在になるので、明日この近くの警察に出頭しようと言われた。その後、チップさんは、私の受入れ研究者であるアルバダ氏 (Dr. Alberda) に電話してくれたが、会議中でこちらには来られないと言う。その後、事務室の会計係に行き、今月分の奨学金4万円と半年間分の本代として4万円、計8万円相当をギルダーでもらった。

その事務室で偶然居合わせたクロイさん (Miss. Croy) を紹介された。彼女は温室の環境調節を勉強していて、私と同じIBS (作物・草地研究所) に所属するとのことである。ドイツ人でまだ20歳すぎくらいだが、流暢な英語で早口に話すので半分くらいしか聞き取れなかった。部屋でひと休みしているとアルバダ氏から電話が掛かり、IACの私の部屋まで来てくれた。パスポートの件で同情され、10分程度話したが、疲れているだろうから早く寝なさいと言われてすぐ別れた。明日、夕食に招待してくれるという。

IACの1階にあるレストランで夕食を6時半に取った。セルフサービスのカフェテリア方式であるが、粗食に慣れている私には立派な料理で、とても良かった。食事をしていると、前に日本人とおぼしき人が来て座ったので、日本人ですかと聞くと、いや韓国人だ、だが日本人ならあそこに2人座っているよと言うので見ると、確かに日本人らしい。食事後、挨拶に行く。

### 失敗と冒険を大いに笑う

東北の大学の坂本さんと九州の大学の山口さんで、ほぼ同年代だった。しばらくして、もう1人若い日本人が来て、松浦です、東京大学農学部の環境調節工学研究室を昭和46年に卒業しましたと言う。出発前にオランダに松浦という人がいるらしいと岡田君に聞いてはいたが、びっくりした。その後、小林夫妻という方が来た。彼らはここにいるのは2日間だけで明日はドイツに帰ると言う。ドイツのカールス・ルーエに留学していて、たまたまここに来たらしい。そこで、私がこの2日間の体験談の概略を皆に話して、皆で大笑いした。私も大いに笑った。

本当に有意義な2日間だった。一刻一刻にこれだけの意義を感じたことはかつてなかった。すべてが新鮮で、充実していた。たとえこれで旅行者用小切手が再発行されなくても、オランダに来た意義は充分あったと思う。マンネリ化した生活からの完全な脱却である。多くを学んだ。実際、この2日間は不思議なこ

とに、楽しかった。本当に愉快であった。自分でも説明が付かない。途方に暮れるよりは冒険心の方がずっと強かった。

IACに日本人がこんなにいるとは知らなかったので、何だかちよつとがっかりしたような気がした。日本語はもうしばらく使わないだろうと思っていた矢先だったからである。でも何かの時はお互いに助け合えるだろう。坂本・山口氏は2人とも薬学の研究者で有機化学の研究所にいてと言っていた。

夜8時過ぎに自分の部屋に戻り、日本から持ってきた梅干しを食べる。部屋は日本のビジネスホテルのシングルルームよりやや大きい。ベッド、机、洗面所、トイレ、シャワー（風呂はなし）、本棚、衣装棚、その他棚2つである。これから半年間、この部屋で寝泊まりすることになる。荷物を多少片付けた後にベッドに入り、チップさんからもらったIACの案内書を読みながら寝入る。目を閉じると頭の中で英語が飛び交っている。

#### 千金に値する経験をする

この2日間で何人と話しただろう。とにかく、電話の掛け方、電車の乗り方、交通信号の見方、電車が何番のプラットフォームから発車するか、電車やバスの切符の買い方、銀行、大使館等の住所と電話番号等すべて知らないことばかりであった。平均して20分に1回は誰かに何かを聞いていたことになるだろうから、この2日間で100人位の人と話をしたことになる。貴重な体験である。アムステルダムに半年間くらい住んでいてもこれだけ多種の人と話した人はいないかもしれない。

一つ気付いたことがある。始めはものをたずねるのに年輩の人ばかりを選んだ。老人の方が親切に教えてくれるだろうと思ったからである。確かにその通りだが、残念ながら彼らの多くは英語がうまくなく、要領を得ない。そこで次第に若い人に聞き始めた。若い人は一般に英語がうまい。そして男も女も要領よく教えてくれる。男にしても女にしても、通りを所狭しと歩いているのは、大阪で会えば思わず振り返るような美男子、美女である。そこでつい聞くのを遠慮していたが、そうも言っていられない。正確な情報はやはり若い人からの方が得やすいようである。かくして通常ならスキポール空港からIACまで2時間足らずで到着するところを、私は50時間位かかって到着した。

部屋に入って、盗難保険の契約書を読むと、どうやら失ったお金を返してくれそうである。住友生命保険の代理店がアムステルダムにあるので、今度行った時に寄ってみようと思う。うまくいけば、失ったものはすべて戻り、得たものは非常に大きいことになる。万歳！

財布を盗られたのは一応、「事故」である。私の落ち度といえば、背広の内ポケットの「ボタン」を掛けていなかったこと位である。しかし、あの場合、あれだけのプロフェッショナルなスリでは、ボタンを掛けていても駄目だっただろう。大切なのはその後の処理である。これは大体において正しかったと思う。処理の順序もパスポート、旅行者用小切手、航空券、現金と大事な順に処理した。誰にでも臆せず何でも聞いたのが良かった。親切に教えてくれたオランダの人々に感謝する。財布を盗んだ2人組にも今となっては感謝したい位である。先ほど書いた「山口さんと坂本さん」はオランダに来て40日になるが、スキポール空港からIACに直行し、それ以来、ワーゲニンゲンからまだ一歩も外に出ていないという。何事もないのと何事かがあってベストを尽くすのとではどちらが良いかは即断できない。

11月5日（水）

#### 警察署に出頭する

朝9時にチップさんの部屋に行く。ちょうどコーヒータイムだったので、コーヒーをご馳走になる。こちらでは決まった時間になるとコーヒーを飲むようだ。事務系の部屋には係の人がコーヒーワゴンにポットとカップをのせて運び、希望を聞いて回りながら、コーヒーまたは紅茶を注いでいく。

ワーゲニンゲンの警察署はIACのすぐ近くだった。警察官はチップさんと知り合いらしく、話はフランクに進められた。そして、オランダ語で書かれた何かの誓約書にサインをしろと言われ、パスポートと航空券が再発行された時点でまた来いと言われた。握手して別れる。

#### 買い物をする

午後はスーストさん(Mr.Isac Soest)にワーゲニンゲンの町の中を車で案内してもらうことになった。2時に彼のオフィスに行くと、まずコーヒーを勧められ、一服する。彼は、あなたのコートは軽すぎる（生地が薄い）、それではワーゲニンゲンの冬は越せない、私がついていってやるからもっと厚い生地のコートを買うことを強く勧める、と言った。更にマフラーと手袋も必要だろう、それに中古の自転車も必要だろう、安くて質の良い品を売っている店を教えてやると言う。

そういうわけで、まずIACのすぐ近くのショッピング街に行く。IACから5分

もかからない所である。とても小ぎれいな店が2~300m続いて、その雰囲気の良いことといたら、東京の銀座や京都の八条町とか大阪の心斎橋に相当する。雰囲気にゆとりがある。最初に洋服屋に連れていってもらった。売場が50m×50m程の大きな店である。そこでコートとマフラーを買った。全部で180ギルダーであった。私がコートとマフラーを選ぶのに1分もかからないので驚いていた（私の洋服選びは常に30秒以内で終了する）。

次に、スーパーマーケットに寄って、7ギルダーの手袋を買った。その2階で文房具を売っていたので、便せん、封筒、ノートを買う。とにかく良い町である。歩いている少年少女、子供がかわいい。顔もかわいいのだが、服装がアカ抜けている。10才前後の子供が実にセンスの良い服を着ている。子供の時からの育ち方が日本人とは異なるのだろう。ところが、大人、特に20~30才の男女の服は実にラフである。ネクタイをしている人はほとんど見かけない。とても良い。ヒゲズラ、ジーパン、ズック靴の青年が多い。

買い物が進んだので、私が世話になるアルバダ氏の作物・草地研究所 (IBS) に連れていってもらう。スーストさんは事務員なので研究のことには何も触れず、IBSの中にも入らず、外からちょっと眺めただけだった。次にはワーゲニンゲンの町をぐるりと案内してやると言う。車中で、土地および家の値段の話が出たので、日本の大阪や東京では土地の値段が住宅街でも10万円/m<sup>2</sup>位はすると言うとびっくりしていた。ワーゲニンゲンでは一番良いところでも1万円/m<sup>2</sup>だという。

土地の話がきっかけとなって、彼は自分の身の上話をしはじめた。彼は最初、学校の先生だったが、やや難聴気味になり、生活上の不便はないが遠くの生徒の声が聞きにくくなったので先生をやめ、IACに勤めはじめた。彼の奥さんは学校の先生をしている。彼の母は80才で同居しているが10日程前に階段を踏み外して、肩の骨とろっ骨を折り、今は入院している。彼の父が今彼の住んでいる家をいくらで買い、その時植えた木が今どれくらい大きになっているかなどについて話してくれた。

#### オランダの家庭をかいま見る

私が彼の話質問を交えながら熱心に聞いたせいか、それなら一寸だけ彼の家を外から眺めても良いと言うので、是非見たいと言った。彼の家は前後に40坪ほどの庭のある7~8部屋ある立派な家だった。庭の物置、洗濯用の小屋、自分の趣味用の小屋は自分で作ったのだという。彼はステレオ、カメラ、木工が趣味だという。彼の家は何と立派なことかと私がまたほめたせいか、では、一



寸家の中に入ってみようかということになった。女房は学校の先生をしているので部屋を汚しているが、どうか気にしないでくれと言う。是非見たいと答えた。

玄関を入るとすぐ10m×4mの大きな居間と台所があった。黒猫が2匹いた。子供がいないので子供代わりだという。居間には立派なステレオ装置が置いてある。4スピーカーの本格派である。ピック・アップは特別製で、レコードの最後に来ると、定位置に戻って停止するのではなく、指定した位置まで戻って何回でも演奏を繰り返すのだという。ピック・アップのウデは回転運動でなく、平行移動して元に戻る仕掛けになっている。バッハのレコードをかけてくれたが、その音が素晴らしい。ステレオの音がこんなに良いとは知らなかった。コンサートホールの臨場感にかなり近いと感謝の言葉を述べて、ステレオ・メーカーの会社名を聞いたらオランダのB & O (Bang & Olufsen) 社だという。日本のアカイやソニーも音質が良くて安い、B & O社のアンプとスピーカーは値段は高いが最高の質を持っているという。このアンプを買うことに決めるのに2年間かけたという。あらゆるカタログを集め、一覧表を作り、性能と値段を比較し、良さそうなものを選んで、今度はそれを実際にステレオの専門店に行って聞いて比較したのだという。アンプだけで20万円という。スピーカーもB & O社だったが、これは贈られたものだからと言って、値段は言わなかった。

こんな良い音のステレオは初めて知ったと重ねて言ったら、80才の母が退院して元気になったら、もう一度家にレコードを聴きに来てくれという。4時30分になったので、彼の家を出た。とても楽しかった。帰りはカメラの話である。彼はミノルタ製のカメラを持っているそうで、今はそのズームレンズが欲しいのだが、価格が本体よりも高いのでまだ買えないのだという。2階に自分の暗室を持っていると言っていた。彼にお礼を言って別れた。

別れてすぐ、IACの裏のショッピング街にまた行って、コップ1つと竹製の茶こし、電気のプラグ（差込）を買う。オランダでは電圧が200Vなのは知っていたが、プラグの形がまったく違うとは思わなかった。T型でも3本足でもなく、2本足でピン巾が広く、ピンの断面が円形である。日本のプラグを持っていき、これとオランダの差込とのコネクターはないかと聞くと、ないというので仕方なくプラグを新たに3個買う。スクリュー・ドライバーも買った。電源コードを切って付け替えるほかない。

アルバダ家に夕食を招待される

6時に部屋に戻って、1階の食堂に行こうとして、アルバダ氏に招待されてい

るのを思い出した。まったく忘れていたのでひやりとした。危ないところだ。早速ワイシャツに着替えて、ネクタイをし、用意ができたところにちょうど電話が掛かってきた。アルバダ氏の車で彼の家に行く。真紅のピカピカの車なので、新しい車じゃないですかと言うと、買ってまだ2週間しか経っていないという。フランスのルノー社製とか言っていた。

彼の家では、例の人なつつこい笑顔のアルバダ氏の奥さんと彼の次男とが迎えてくれた。次男は今兵役中だが、兵役基地が近いので家から通っているという。ただし、自宅から軍隊に通うのはまれな例で、兵隊中の5%にすぎないという。

オランダ料理を食べながら、アルバダ夫妻の日本での思い出話に花が咲く。日本での初めての朝食で生卵が出され、どうしてよいかわからず途方に暮れたと言っていた。息子さんは余り英語が得意でないらしく、すぐオランダ語になってしまう。すると、しばらくオランダ語で話が続く。この言語状況は、オランダに来てから度々経験した。私がいても、オランダ人どうしの会話はオランダ語であるのが普通だ。奥さんが時々、さあ皆英語で話しましょうと言うが、しばらくすると、私に話す時はもちろん英語だが、息子やご主人に話す時にはオランダ語になってしまう。それは当然で、日本でも事情は同じである。奥さんは、日本で同じような状況の時、何を話しているのか皆目見当が付かないで、ずいぶん神経が疲れたらしい。しかし、私はオランダ人同志のオランダ語での会話がほとんど苦にならない。別に私の悪口を言っているのではなからうし、母国語で話すのが一番楽であることは誰でも同じだからである。彼らがその時に何を話しているかは全く気にしないことにしている。

ただし、困るのはオランダ語から急に英語に変わる瞬間である。それが私自身に対する質問であった時には特に困る。というのは、彼らがオランダ語で話している時、私はほかのことを日本語で考えているからである。オランダ語で話しているのをいくら聞き取ろうと思っても無理だし、そんなことをしては疲れるだけだからである。ところが、その場合、頭脳のスイッチは日本語の方に開いているから、そこに英語が入ってきてもそれは雑音としか聞こえないのである。その時は、大体とんちんかんな答えをしたり、文法的に間違っている英語を話してしまう。1分ほどして頭のスイッチが英語側に入るとうまくいく。高倉氏も前にそんなことを言っていた。これはお互いに仕方のないことだから、どうしようもない。互いに相手を理解し合うだけのことである。とはいえ、私は日本で外人と接するときには日本語を使うことを最大限の努力をして避けてきたつもりである。でも、どちらが良いかは一概に言えない。

話が横道にそれたが、この一夜も実に楽しかった。持ってきた絹の財布とらくがん（米と砂糖の和菓子）をプレゼントしたら喜んでくれた。話がまたカメラの話になった。彼らが日本で買ったミノルタの最高級カメラのマニュアルが日本語なので使い方分からない所があるという。そのカタログを持って来てもらったが、私にも分からなかった。カメラ好きの同僚の鈴木さんなら即答できるだろうにと思いながら、マニュアルを預かる。

話が日本のことになると、息子さんには通じなくなり、通じなくなると息子さんはオランダ語で話し始めるので、話題を息子さんの方に努めて向ける。彼は軍隊でも技術関係の仕事をしているので、銃はかつがないと言っていた。オランダでは若い人はキリストを信じる人がどんどん減って、教会に行く人が少なくなっているとも言っていた。昼間のスーストさんの話を持ち出し、B & O社のステレオのことを話したら、この家のステレオもB & O社のものだが15年も前のものだと言っていた。彼はB & O社のステレオは高価なだけで、質は日本のアカイやソニーと変わらないと激しく主張した。どうもカメラと電気製品（ステレオ）は日本の評判が高いらしい。

息子さんが私に貸すための自転車を直ちに部屋を出たのをきっかけに、アルバダ氏はオランダの干拓の歴史を話し始めた。8時半を回っていたし、奥様が疲れているらしく、先ほどから何度か生あくびをしているので、もう帰らなければと言った。するとどうしてだと聞くので、仕方なくIACに門限があるかもしれないと言うが、そんなものはないと言うので返答に窮してしまった。結局また干拓の話の続きが始まり、とうとう16 mmフィルムの映写機も持ち出してきた。干拓のやり方がフィルムに収めてあるから見せたいと言う。私の研究の専門分野が農業工学であることを考えての厚意であることを感じたので、ありがたく見せてもらった。16 mmフィルムは無声なのでアルバダ氏が内容の説明をしてくれた。映写機の音がうるさく、時々聞き取れなかったが実に興味深かった。この干拓事業は忍耐強い国民性を必要とするなど感じた。

夜10時に別れの言葉を述べ、早速借りた自転車で乗ってアルバダ家を去る。アルバダ氏がIACまで一緒に来てくれた。IAC到着後2日間で2軒の家を訪れることができたのは誠に幸運である。皆親切に精一杯やってくれる。アルバダ氏は本当に忙しいのに、最善を尽くしてくれている。

部屋に戻ってこの手紙を書き始め、就寝は1時頃になってしまった。大阪の家庭のこと、刀根山で入院中の重さんのこと、矢吹研究室の矢吹先生、鈴木、青木、坂口、そして長谷川の各氏等のことが頭を走り始める。皆楽しくやっているだろうか。3人の子供の世話で女房も大変だろうなと気になる。松浦氏はオ

ランダ行きを知らされたのは7日前で、坂本さんは1ヶ月前、しかも最初の子供が産まれて2週間後に羽田を発ったとのことである。別に私だけが特別なケースではなさそうである。

11月6日（木）

#### 留学研究生活が始まる

朝9時にIACからIBSまで自転車で行く。10分位で到着する。道順は昨日ーストさんに教わっていたので大体分かった。早速アルバダ氏に研究所内を案内してもらい、数人に紹介してもらったが、名前が聞き取れず閉口した。二～三度聞き直しても数分後には忘れてしまう。研究所長のハーストラ (Dr.Gaastra) 博士にもちょっとだけ会った。立派な体格をした紳士である。

IBSは4つの建物からなり、各建物は約40 m×10 mである。実をいうと、IBSは11月1日付で組織が改編され、今はCABO（農業・生物研究センター）と名称変更されたとのことだ。以下ではCABOを使うことにしよう。人工気象植物育成室（ファイトトロン）、図書室、実験室等を一通り見た後、一昨日IACで会ったクロイさんの所に連れていかれた。アルバダ氏は10時から会議に出なければならぬので、あとの案内はクロイさんに頼んだとのことである。彼女はシミュレーション用言語CSMPを使ったコンピュータシミュレーションをやっているらしい。専門は植物学で、温室にはそれ程の関心はないとのことだった。

彼女が作成したCSMPのプログラムの概略を説明してもらった後、2階にある作物の光合成量および蒸散量を測定するための実験室に連れていってもらった。レタスの光合成を測っていた。50×30×40 cm程度の大きさのチャンバーが4つあり、レタス4個体を同時に別々に測れるようになっている。その詳細を高倉氏が『農業及園芸』誌で紹介した記事を読んでいたので測定システムの内容は大体理解できた。

彼女は来週の水曜日にはドイツに帰るので、それまでに研究レポートを書き上げねばならず、忙しいらしい。昼近くになって、これからレポートをタイプしに行かねばならないということなので、礼を言って別れた。正午まで、1人で建物の内外を見物してIACに戻る。午後はハウドリアン (Mr.Goudriaan) 氏が案内してくれることになっていたが、時刻を正確に聞いていなかったので、一応13時すぎにCABOに戻った。すると彼は14時頃来るということなので、それまでぶらぶらと所内を見物する。

14時すぎにハウドリアン氏が来た。頭の切れそうな、親切そうな長身やせ形の髭をたくわえた男である。互いに研究上の自己紹介をして、こちらで私がすることになる仕事等についても討議した。非常に頭の良い男で、質問がびたりと的を得ている。それに親切だ。彼の上司であるドワイト(de Wit)教授と彼の共著『Simulation of ecological processes (生態プロセスのシミュレーション)』の翻訳をしたい希望を持っている旨伝えたら、すぐ出版社に電話してくれた。15時30分頃まで議論し、その後、計算センターに連れていってもらった。計算センターは大きな建物の6階にあり、想像していたよりも小さなセンターだった。東京大学の大型計算機センターとは比較にならないほど小さい。コンピュータのオペレーティングシステムは、Dec 10システムであり、しょっちゅう故障するらしい。計算結果の返却(ターンアラウンドタイム)は1日に1回だけだそうだ。16時40分頃、IACに戻った。

こちらでは朝10時と午後3時にコーヒータイムが15分ぐらいある。午後のコーヒータイムの時に私のパスポート紛失事件の話が出て、説明させられた。そこでも、オランダ人どうしはついオランダ語になってしまう。クロイさんはオランダ語が話せる。コーヒータイムの後、クロイさんは「皆がオランダ語で話すので途方に暮れたろう、私も最初はオランダ語が分からず困った。しかし、彼らは皆親切だから気を悪くしないでくれ。」と言ってくれた。クロイさんも同じ経験を持っているからだろう。私は「僕はあまり気にならないから大丈夫だ。気を使ってくれてありがとう。」と答えた。

夕食前、IACのレクリエーションホールで皆とピンポンをやった。私は例によって、どんな玉がきても思いつき強くスマッシュを打ち込むので、相手の東南アジア人が苦笑していた。昨日、寝るのが遅かったので眠い。

## 11月7日(金)

### コンピュータを使い始める

朝9時前にCABOに行き、ドワイト教授に会う。20分間ほど、彼と、CABOで何を研究するかについて議論した。その結果、とにかく最初の2~3週間はコンピュータ・シミュレーション用言語であるCSMPの使い方に慣れると言われた。彼らの著書を翻訳出版する話も出た。私がCSMP言語を使ったことがないのに、あの本を翻訳したいというのには驚いていた。

ドワイト氏にホニーさん(Miss.Gonnie van Laar)を紹介された。彼女から

CSMPとコンピュータ・ターミナルの利用法を習ってくれという。彼女は私にDEC 10オペレーティング・システムの概要を10分ほどかけて説明してくれた後、マニュアルの読むべきページを指定してくれた。そのマニュアルを読むと、そのソフトウェア体系は私が東大で利用したDEC PDP8/Eコンピュータ・ソフトウェアシステムと基本的には同じだったので大筋はすぐ理解できた。命令（コマンド）の種類が違うだけである。

11時頃、ホニーさんに、マニュアルに書いてあることは大体理解できたから、もう実際に使ってみたいと言ったら、すぐOKしてくれて、コンピュータ・ターミナル室に連れて行ってくれた。ターミナル室は同じ建物の2階にある。

ところが、使い始めて5分もしないうちに、テレタイプ（キーボード）がおかしくなって印字しなくなった。コンピュータのシステムダウンらしい。このシステムは1年ほど前に新しく入り、よくダウンし、この前は3週間動かなかったという。あきらめて、30分後にまたトライすることにして部屋に戻った。30分後にまた寄ってみたが、まだダメなのであきらめてIACに昼食をとりに戻る。

帰る前に、明日の夕方、家でここの理論生態研究部の人たちが皆集まるパーティーをやるから参加しないかとホニーさんに言われたので、喜んで参加させてもらうと言った。ただし、明日（土曜日）は朝からIACの長期滞在者の希望者が参加する、アムステルダムとアールスメア花市場へのエクスカージョン（見学会）があるので忙しい。

夜、毎日この手紙を書くのに時間がかかり、寝不足気味でちょっと頭痛がする。明日からは日記をもっと簡単にしよう。午後からまたホニーさんにコンピュータ・ターミナルの使い方を30分程習う。そうしたら、またシステムダウンだ。

### オランダの食事

食べ物には余り興味がないので、今まで書かなかったけれど、今日はIACの食堂の食事について少し記そう。食事はカフェテリア方式で、日本式に言えば「バイキング料理」に近い。置いてあるものを自分で好きなだけ次々に取っていく方式だ。例を述べてみよう。

〈朝〉

1. ハム数種類、上等なものばかり。日本で買えば300円/100g位のものだと思う。私は大体2~3枚とる。
2. パン数種類、黒パン、白パン、ブドウパン、クロワッサンに近い卵形のパン

ン、固い菓子状のパン、その他2~3種類。私は大体黒パンのスライスを2枚食べる。

3.飲み物 コーヒー、紅茶、ジュース、ミルク、水を好きなだけ。

4.ジャム・バター・チーズ。ジャムはイチゴ、ブドウ、リンゴ、オレンジ等10種類くらいがパン1枚分ずつの小さなパックになっている。これらは、もちろん、好きなだけ。バターは2~3種類。チーズはスライス状。

5.野菜類 ほんの少し。

昼、夜はもっと立派である。

基本的に昼食は朝食と同じものの他に果物及びおかずが1~2種類足される。

今日はビーフシチューに似たものだった。

夜は昼食と同じようなものの他に、肉（ポークかビーフかチキン）、豆の煮たもの、ポテト等がつく。肉とポテトの一人前が多すぎるのには閉口する。これだけの食事を日本のレストランでしたら、2500円~3000円/日はかかるだろう。

私は日本ではミルクを一切飲まなかった。飲むとしてもコーヒー牛乳だけであつた。まずいし、飲むと下痢するからである。ところが、こちらへ来てからミルクを飲むのが楽しくなった。味が日本のものと異なる。自分の味覚が日本のミルクを受け付けなかったらしい。食事で困るのは、「漬け物」がないこと位である。この国にはキュウリのピクルスがあるが、IACの食堂では出してくれない。日本から「梅干し」を少し持ってきたので、食後時々それを食べる。「ライス」はこちらに来てからまだ一度も口にしていない。しかし、まだ、どうしてもライスや漬け物が食べたいとは感じていない。

こちらに来て明らかに「便」の色が変わった。黒っぽくなった。肉食（動物性タンパク）のせいであろう。私は日本では野菜をたくさん食べ、肉はあまり食べないようにしていたので特にそうなのだろう。野菜類が不足気味だ。近いうちに八百屋で少し買ってくることにしよう。少し疲れた。あさつての日曜日はゆっくり休もう。

### 本屋さんに寄る

午後1時すぎにCABOに行くと、ホニーさんが、もう一度コンピュータ・ターミナル室に行って試してみよう、と言うのですぐに行つた。今度はうまくいった。ところが30分もするとまた動かなくなつてしまった。これでは正常のコンピュータとは言えない。ただし、操作法などの概略は充分飲み込めた。これな

ら使用法にはすぐ慣れるだろう。

その後、TECOと呼ばれるプログラミング・エディターのマニュアルを読み始めたが、ちっとも頭に入らない。と言うのは、となりの席でクロイさんが、電話であちこちにドイツ語、オランダ語、英語を自在に駆使して話をしているからである。言うのを忘れたが、CABOでは今朝からクロイさんと同室している。とてもよく気が付く性質で何くれとなく世話をしてくれる。性格は多少内気なところがあるらしく、そのため、きっと、ここに来た当初自分も相当まごついたのだろう。彼女はドイツから来た大学院生である。

夕方4時過ぎにはCABOを出て、IACに一度戻った後、便せんとコピー用のカーボンペーパーを買いに外出した。そのついでに、この前スースト氏に教えられた本屋に寄った。想像以上に立派な本屋である。農業関係の本がびっしりと並び、農学書に関しては紀ノ国屋や丸善の比ではない。坂本氏の話によると、農業関係の本の在庫数では世界一の本屋だそうである。余り時間的余裕がなかったので、ゆっくり見られなかったが、いくつか良い本が見つかった。Dr.Seeman著 "Climate under glass" (温室気候), 1974(WMO No.373), Technical Note No.131, World Meteorological Organization 発行 (18.6ギルダー) を買う。わずか40ページの研究レポートだがよくまとまっているようだ。日本人の書いた論文が引用文献として複数挙がっている。他に欲しい本が3冊ばかりあったが、高価なので、もう少し内容を吟味してから買うことにした。どうも野菜が不足気味なので、帰り際にトマトを買った。夕食後、坂本、山口氏と談笑する。夜8時に別れ、部屋に帰る。

昨日、帰り際、CABOのスタッフが書いた論文の別刷りをハウドリアン氏に20編ほどもらった。この調子で別刷りや本を集めると、帰国時の荷物が多くなるだろう。20編のうちの2編を来週中に読む計画だ。その前にコンピュータのマニュアル (全部で厚さ300ページ程) を読まねばならない。英語だと日本語のマニュアルを読むよりは十分時間がかかる。

マニュアルを読んでいて、矢吹研究室の小型コンピュータTOSBAC 40Cのことが気になりだした。高木氏は毎日大学に来ているだろうか。何かわからないことがないだろうか。青木氏もコンピュータをいじりはじめただろうか等々。コンピュータはともかく、植物育成風洞の方が故障がちで彼等は困っているかも知れない。それに引きかえ、こちらでは、コンピュータは駄目だが植物育成室 (グロースチェンバー) は実に立派だ。腕の良いテクニシャン (技師) がいるからだ。実験装置は設計図をわたせばテクニシャンが製作してくれるそうだ。先日書いた光合成と蒸散の測定装置は、テクニシャンが作ったとのことだ



が、実に良くできている。工作の不器用な私には実にうらやましい。今年の4月から出発前の10月初めまで、人工気象植物育成風洞の故障と制御特性の悪さに悩まされ続けた私には、特にそれがうらやましかった。

11月8日（土）

楽しかったアールスメアへの花市場と園芸展示会見学

今日も朝から晩まで楽しく、実りの多い1日だった。朝から夕方までIACの遠足（エクスカッション）である。見学希望者がバス3台に分乗し、IACを朝8時に出発し、まず、アールスメアの花市場に行った。この花市場のせり（オークション）は世界一の規模である。このオークションについては日本で何度も雑誌記事で読んでいたし、写真を見ていたので特に驚かなかった。しかし、他の見学者は、その規模の大きさ、花の美しさと種類の豊富さとコンピュータによる自動化装置に驚いていた。この花市場の敷地は220,000m<sup>2</sup>であり、そのうち、建物が90,000m<sup>2</sup>を占める。

私が驚いたのは、同じ建物の反対側で開催されていた、専門家向けの花の展示会場である。展示会場の面積が広く、数十社以上が花と園芸機器（温室環境コントロール装置、ポットの自動鉢植え機、自動包装機、人工土壌各種）を展示し、係員が説明してくれる。この展示場を見るために2時間の予定を見学プログラム上で取ってあったが、2時間では展示の1/4も見られなかった。花の展示場は、本当に駆け足で通り過ぎただけだ。それでも花は美しい。花のデコレーション（飾り付け）のセンスが日本とは異なる。実に興奮した。こんなに時間が惜しいと思ったことは最近ない。パスポートを落とした時より、興奮した。

園芸機器の展示場はすばらしかった。英語のカタログがあればカタログを持って帰ってあとでゆっくり読めばよいのだろうが、カタログのほとんどがオランダ語なので、おもしろそうな機器については係員から英語で機械の開発目的、特徴、コスト、使用法等についていちいち聞いて回らなければならない。彼らは親切に説明してくれる。

ここでは農家向けに温度の自記計、pHメータ（水素イオン濃度計）、水耕液肥成分分析装置、照度計、その他多くの測定器（土壌水分計、風速、風向計）などを展示している。温室の複合環境制御機器も多種類展示されている。この種の機器は日本でもいくつかはあるが、ここの機器に比べればおもちゃのようなもので比較にならない。最近では、この種の機器ではほとんどがLSI（大規

模集積回路)、またはプログラマブル・マイクロプロセッサを利用しているとのことである。この複合制御機器が前記の各種測定器とつなげられている。そして、温室環境制御操作のきめがこまかい。内外温度差によって窓開閉の角度と方向を変えたり、換気とCO<sub>2</sub>施用の選択を論理回路で実行させるなどの、複雑な操作をしている。残念なのは英語のカタログが無いことである。名刺を係員にわたして、詳しい資料を後で送ってくれるように頼んだ。

#### 温室の環境制御にコンピュータが利用されている

温室環境制御用のコンピュータの展示には驚いた。残念なことにこれもオランダ語の半べらのカタログ1枚きりで、そのタイトルに「Automatische Klimaatbeheersing (温室自動気候制御)」と書いてある。説明係にしつこく聞いたが、英語がうまくなく、しかも専門知識を持っていないから、要領を得ない。あなたの説明ではよく理解できないから、コンピュータにもっと詳しい人と交代して欲しいと言うと、その人は今昼食に行つてあと1時間しないと帰つてこないという。この温室用コンピュータは実用化しているのかと聞くと、この近くのフィールフェンス(Y. Y. Fierviens)氏の温室で3週間前から使い始めたのがただ一つの納入例だけだという。その人の住所を聞いたが、わからないと言う。後ろ髪を引かれる思いで、あきらめた。もう時間が無い。もし出来たらまた来るが、詳しい資料があったら送ってほしいと言って名刺をわたした。是非、もう一度この展示場に来たい。さらに、フィールフェンス氏の温室を見たい。温室コンピュータの会社の名は、ファンデルバーグ社(Van der Burg b.v.)で、ロッテルダムとハーグの間にあるブライスバイク(Bleiswijk)に所在するという。コンピュータ本体は他の会社のもので、その会社名は判らないという。Gevekeという名札がコンピュータの上に置いてあったので、それがコンピュータの機種名か会社名かもしれない。

#### 日本人にも創意が欲しい

見学途中にコーヒータイムがあったが、時間が惜しかったのでコーヒーは飲まなかった。強く感じたのは、日本人の物まね根性である。国の政策、歴史を考えれば、園芸技術に関して、日本の方がオランダより遅れていても仕方がない。しかし、この展示場を見て、日本の最近の園芸技術のほとんどの原型がここにあるのを感じて、研究者の1人として恥ずかしくなった。これでは我々は単なる「通訳」「翻訳者」でしかない。学ぶべきものは多いに学んだ方がよい。だけど、何かそこに創意と努力が欲しい。紹介だけではいけない。独創性が必

要である。外国に学ぶだけでなく、日本を直視することが必要だ。今に必ず、日本の技術をこの展示場でオランダ人に見せてやりたい。それでこそ本当の両国親善であろう。

この花市場のすぐそばに、大きな温室群がある。聞くとそれは生産用商業温室であるという。そこに行きたいと思ったが、今回は「遠足」だから、単独行動を取る訳にはいかないので、あきらめ、素早く昼食を摂る。この遠足はすべて食事を含めて無料である。

#### ボートによる運河めぐりとボルノ雑誌店

午後3時過ぎからは、美術館とショッピングとボート乗り（運河めぐり）の3班に分かれた。参加者全部で150人位のほとんどがショッピングを選び、私の選んだ運河めぐりは10人不足だった。運河めぐりは結論的にはおもしろくなかった。東京の隅田川を東京湾に向けて遊覧船で見て回ったようなものである。この運河めぐりの本当の目的は運河沿いにある古い建物の見物なのである。運河沿いの建物は17世紀頃建てられたものが多く、昔の面影が強く残っている。ただし、私はパスポート事件でオランダのあちこちを歩き回ったので、このような建物は珍しくなくなってしまったのだ。それに、遊覧船はドイツ人が多く乗っていたので、ガイドが主にドイツ語で説明し、時々付け足し気味に英語とオランダ語で説明するので説明が良く分からなかった。1時間の運河めぐりの大半は、「花市場と展示会場」でもらった「カタログ」を見て過ごした。

夕方6時にアムステルダム中央駅近くのダム広場に集合した。集合地点のすぐ近くに、いわゆるボルノ雑誌を売っている店があったので、皆で一寸入ってみた。この種の店はアムステルダムにはいくらでもある。ただし、日本人が日本で期待しているような感じはこの種の店には全くない。

何はともあれ、午前中のアールスメーアの花市場には満足した。オランダ行きを援助して下さった皆様に本当に感謝したい。しかし、やはり、日本に残してきた妻子のこと、入院中の重さんのことがしきりに頭の中を駆けめぐる。やはり、一番心配なのは家族が病気になっていないかということである。たとえ病気でなくとも、妻は赤ん坊を含めて子供3人の世話でてんでこ舞いであろう。何もできなくて本当に申し訳ない。子供はきっと父親がいなくて多少精神的に不安定になっているだろう。私が帰るまで何とか無事に過ごせるよう祈っている。もし、大変なら東京から誰かに助けに来てもらった方が良いかもしれない。

## クロイさんのさよならパーティー

7時半にIACに戻った。私と研究室で同室しているクロイさんが来週ドイツに帰るので、今夜8時からホニーさんの家で「さよならパーティー」があるので大急ぎで食事をして行った。それでも20分ばかり遅れた。8時から始まるパーティーには軽食しか出ないそうである。行く時に羽田空港で買った免税のウィスキーを1本持って行った。クロイさんは、ドイツからわざわざやってきたポール (Paul) という名のボーイフレンドを連れてきて、皆に紹介していた。彼は英語を話さないの、お互いに英語とドイツ語で一方的な挨拶をした。集まったのは15人で、ドワイト教授の研究部門の人、またはそこで以前に働いていた人である。ドワイト教授夫妻、ハウドリアン氏、フリルス氏 (Frils)、ペニング・ド・フリース氏 (Penning de Vries) などである。最初にコーヒーが出て、コーヒーを2杯飲んだところで、ワインが出た。パーティーではドイツ語とオランダ語と英語が入り混じる。大学出の人は大体その3カ国語をしゃべれるらしい。他の人でもドイツ語と英語をしゃべれる人は多い。

実に楽しい雰囲気である。ホニーさんの家は大きなアパートの中の1LDKで、居間がととても広い。隣に座った年配の女性に聞くと、彼女はここに1人で住んでいて、この部屋の家賃は大体月4万円位だそうだ。オランダではかなり高い家賃らしい。

フリルス氏に今度製作するファイトトロン (人工気象植物育成室) の計画を聞き、ディスカッションした。アフリカの植物の光合成を測定したいので、気温35℃、相対湿度20~50%の部屋が欲しいという。私は湿り空気線図を書き、相対湿度20%はちょっと得られないよと言ったら、今度改めて相談に来ると言った。彼は30才にならない位のまだ若い人である。

クロイさんは、自分がパーティーの主役なのに、食物やワインをサービスして回って、ホステス (バーのホステスではないよ) のように、何くれとなく気を使っている。隣の席に彼女が座った時、「あなたを見ていると日本の女性を思い出す。というのは、あなたはヨーロッパ人としては珍しく、デリケートな心の持ち主で、日本的だ。あなたのパーソナリティは平均的ドイツ人よりも心が優しいのだろう。」と言ったら、ありがとう、と言っていた。

ところが、そのクロイさんがパーティーの後半では、もちろん皆と同じ部屋で、ポールと抱き合って、盛んにキスしている。ところが、他の人はそれをまったく気にしていない。目のやり場に困っているのは私だけである。やはりクロイさんは日本女性とはかなり異なるようだ。

あこがれのドワイト博士と話せた

しばらくして、ドワイト博士が私の隣のいすに来て座った。農学・生態学の分野では知らない人がいないほど世界的に有名な人である。2、3日前ちょっと話したことがあるので、気軽に話げできた。とても気さくな人で、人がよい。私は、まずドワイト氏がなぜ10年以上も前にコンピュータ・シミュレーション用言語であるDYNAMOやCSMPを使い始めたのか、当時としては、工学関係を含めてもそれらを使っている人は世界的にいなかったろうと質問した。すると、「確かにほとんどの人はDYNAMOやCSMPが何であるかを知らなかった。農学分野でそれを知っていたのは私だけだ。しかし、私は当時の分析的な農学を統合的な農学の方角に変更するためにいかなる方法論を用いるかを目を皿のようにして探していたのだ。そして私の選挙は間違っていないかった。」と言っていた。

そこで、確かにあなたの研究はすばらしいが、あなたの方法を今後も続けて良いのだろうか。あなたの作った作物の光合成、蒸散、呼吸を含めた植物生長モデル (BACLOS) は今では少し複雑になりすぎるのではないかと意見を述べた。

そうしたら、まさにその通りだ。今はシミュレーションプログラムが複雑すぎて、しかもそれらは分業してつくられているので、BACLOSと言う植物成長モデルを記述したプログラム全体を理解している人はいなくなってしまった。今、我々はこの仕事をまとめているので、それが終わったら少し研究方角を変えたいと言った。

では、次のステップとして重要な研究課題は何ですか、と重ねて質問すると、それはBACLOSの農学への実際的な応用だという。実際的に農業に應用するにはBACLOSは複雑すぎるのではないかと言うと、その時は多少単純化すると言った。

そこで、それは確かに大事なことだが、もう一つ、あなたの進む道としては植物の形態発生、形態形成の数理モデル化の問題があるのではないかと意見を述べた。すると、正にその通りだ。私も3~4年前からそれを感じているのだが、それを研究できる若い研究者がいなくて困っているのだ。私は日本のMr.Horie (堀江氏) に期待しているのだが、と言っていた。

実に親しいディスカッションだった。ドワイト氏と私は大体同じ意見を持っていた。彼は話している途中、「オー」と言うのが癖で、15~30秒ごとに「オー」が入る。

このパーティーが夜11時を過ぎても終わらず、12時を過ぎても終わる気配が

ない。12時半になって、フリルスが帰る時、私も一緒に席を立ち、ホニーさんに「とても楽しかった。招待してくれて大変ありがとうございます。」とお礼を言って帰った。

### オランダ人と日本人

これはあんまり大きな声では言えないが、と言ってドワイト氏がこんな話をしてきた。最近、数年前からここにくる日本人はだんだん英語がうまくなってきたので助かる。昔は日本人が来るとお手上げだった、と。

オランダでの初対面の人に、「私は日本から来た」と言うと、3割くらいの人々が「本当か?」と言う。顔立ちが日本人らしくないと言うのである。今日会った若い人には「あなたの国籍は日本だろうが、純粋な日本人ではないだろう。私にはどうしても日本人とは思えない。」と言われた。ただし、「私は日本人だ。」と言うと、「そうだろうと思った。」と言う人もいて色々である。

ハウドリアン氏には、あなたのパーソナリティ（個性）は日本的でない。普通の日本人は「イエス」「ノー」をはっきり言わないが、君は話し方が非常に直接的だと言われた。これには二つの理由がある。一つは英語が下手だからである。質問の大意をつかんで、それに対してまず「イエス」か「ノー」を言って、それから何をしゃべるかを考えるからである。もう一つは、私の性格に直情的な面があるからであろう。この性格は日本では欠点とみなされる。日本では複雑な人間関係と自分自身の神経の細かさのために隠されているが、外国ではそれらをあまり気にしなくて済むから私には楽である。日本ではよく「肩が凝る」のだが、こちらへ来てから疲れはするけれども、「肩凝り」がなくなった。また、私はもともとすぐ机に腰掛けたり、食べながら歩いたり、極めて行儀が悪い。ところが、こちらでは、それは普通の動作である。平気で人前で足を机の上ののせたりする。

### 服装のセンスが違う

服装もきわめてラフである。この研究部門で仕事中心ときちんとした服装をしているのは、ホニーさん位のものである。彼女はインテリ女性研究者で、背が高く、大柄で、いつも黒っぽいしゃれた服を着ている。

クロイさんなどはいつも素肌に丈が短いセーター一枚を着ているだけで、かがむと背中中の肌が15~20 cmの幅にわたって見えるが、本人も他人も気にしていない。私はもともと自分の服装も他人の服装にも構わない。この点についても「あなたは平均的日本人よりも少し礼儀正しくないね。」とからかわれた。

服装と言えば、日本出発直前に弟の秀実が送ってくれたセーター、ズボン、シャツ、下着などには助かっている。日本でこんな柄物のズボンやシャツを着たことがなかったのでどうかと思っていたが、こちらに来て着てみると、こちらの雰囲気にはぴたりなのだ。やはり、専門家の選んだ服はセンスが違うと思った。地味で何でも無い色なのだが、それが良いのである。

こちらに来てネクタイをしめたのは一度だけ、スーツ（背広上下）はまだ一度も手を通していない。どこに行くにも普段着である。昨夜のパーティーでネクタイをしているのは1人だけだった。そして、その人は入ってきた時、皆に冷やかされていた。実際、キザに見えるのである。ただし、45才以上の年配の人は別で、職場での彼らのネクタイ姿は別に珍しくない。

### 英会話能力の限界を感じる

今まで、自分は英語で話が通じるようなニュアンスで書いてきたが、実際は、会話の6割程度しか聞き取れていない。また自分の話したいことの5割程度しか表現できていない。残りはフィーリングによる理解である。したがって、重要そうなことで、自分が聞き取れなかったことはその旨伝えて、もう一度はっきり言ってもらうことが重要だ。それをしないとトンチンカンな答えをしてしまう。実際、今でも私はよくトンチンカンな答えをすることがある。

英語で一番困るのは、単語、特に地名・人名等の固有名詞のアクセントである。アクセントに関しては愉快的な体験がいくつかある。私はIACに着いた次の日にアルバダ博士から自転車を借りた。その自転車でIACから毎日CABOに通っている。この町では自転車は必需品で、新たにIACに来た人には「もう自転車は手に入れたか？」が一つの挨拶になっている。私もそれをIACに着いた翌日に何回か尋ねられ、そのたびに「はい。アルバダ氏から借りています。」と答えていた。ところが皆キョトンとしている。私は皆がアルバダ氏を知らないはずないから、当然話が通じているものと思っていた。2日目にクロイさんにも同じことを聞かれたので、同じ答えをするとそのアルバダというのはレセプションデスク（受付）で働いている人の名ですか、と聞かれた。「とんでもない。ドクター・アルバダですよ。知っているでしょう？」と言うと知らないと言う。二、三度言い直すと「オー、アールバダ（アにアクセント）!! イエース。」と言った。アールバダのアに強いアクセントがあり、残りのルバダは非常に早口で言うのだ。私はどちらかという「アルバーダでバにアクセントを置いていた。昨夜、ドワイト氏と話している時も私のマックリー（Ma'Cree、人名）の発音が悪く、二、三度言い直さねばならなかった。

アナリスさん

アナリス(Annieles)さんのことを書くのを忘れていた。彼女はIACの受付係である。IACの受付は、ちょうど、ホテルのフロント・デスクのようになっており、案内、部屋の鍵の授受等をやっている。日本に来る前に、岡田君に受付係にアナリスという女の子がいて、親切で何でも教えてくれるから、困ったことがあったら聞くと良いと言われていた。しかし、受付係は数人が交替でやっているし、彼女の人相を聞いていなかったのも、最初、誰がアナリスさんか分からなかった。そこで、誰ということではなく、分からないことは、そのときどきの案内係に聞いていた。私は見知らぬ女性に名前を聞くのはちょっと抵抗を感じるの、様子を見ていたのである。そのうちに、たぶんあの子だろうと予想がついたので、名前を聞いてみるとやはりアナリスだった。ボーイッシュな短い毛をしたスマートな人で確かに親切そうである。しかも、非常にテキパキしている。

そこで岡田君の話をする、彼女は私がここに来るのをすでに知っていた。何も知らない、分からないことがあったら教えて欲しいと言って、大阪で150円で買った縦横2cmの七福神の人形とらくがん(砂糖菓子)、および1円玉、5円玉、50円玉を日本からのおみやげだと言って渡した。その後、何度か種々のことを聞きに行ったが、いつもテキパキと要領よく教えてくれる。岡田君に紹介してもらっている人が他にも何人かいるが連絡を取る暇がない。

#### IAC (国際農業センター)

今日は少し私が宿泊しているIACについて書いておこう。IACのあるワーゲニンゲンの町は、オランダにおける農学研究の中心で、いわゆる研究学園都市である。人口3万人近くと聞いた。IACの建物は1972年に建てられ、国際会議の会場などにもなっているが、主に数ヶ月間の研修のために世界各国(特にアフリカと東南アジア)から集まってくる若い人(研修生)の宿泊所兼研修施設になっている。私などのように研究所に直接所属している人は少ない。9階建ての建物で、シングルが120位、ツインの部屋が30位あり、各部屋にはベッド、机、シャワー等々が付いている。9階にはバーがある。IACの近くには各種運動施設、娯楽場などもある。IAC内では黒人、有色人種が7割くらいで、白人は少ない。世界40カ国位から集まっているようだ。私の部屋は8階で、部屋の窓からの夜景がきれいである。1階の娯楽室にはピンポン台が置いてある。この前からちよくちよくやっているが、私はすぐスマッシュを強く打ち込むので、皆に“Don't be excited.”(興奮するな)とヤジられる。



11月9日(日)

### 洗濯をする

ワーゲニンゲンに到着してから初めての日曜日である。昨夜のパーティーから部屋に戻って寝たのは午前1時半頃だったのに、朝6時くらいに目が覚めた。そこで、前日の日記を書く。9時過ぎに朝食をして、その後、部屋を片付けた。部屋はホテルと同様に毎日メイドさんが掃除をしてくれる。タオルは週2回、ベッドのシーツは週1回きれいなものと変えてくれる。しかし、自分の着ているものはもちろんダメ。私は洗濯が嫌いで、日本では毎日取り替えていた下着やシャツも日本を出てからはなるべく着替えないようにしていたが、とうとうストックが無くなり、仕方なく昼食後洗濯をした。2階に洗濯機があるが、日本で通常使う洗濯機よりも小さく、一度に多くは洗濯できない。それに色々な人が使うのでなかなか空かない。仕方なく、部屋で手もみで洗濯した。洗濯をするのが、今の私にとっては一番いやな仕事である。シャツは週1回部屋に取りに来てくれるクリーニング屋に出すつもりでいたが、お金がもったいないので止めることにした。洗濯後、夕食前まで昼寝した。夕食後、ピンポンを少しした。

11月10日(月)

### ドワイト氏の論文を読む

昨日は昼寝もしたし、夜も早く寝たので今朝は5時半頃起きて、朝食前に、ドワイト氏の総説論文「植物生産」("Plant Production" Misc., Papers Landb. Hogesch. Wageningen, 1968. No.3, 25-50.)に目を通した。ざっと目を通しただけなので、まだよくは解らないが、立派な論文のようだ。この前のパーティーでの私との会話で、彼は「私は常に農業に役立つための科学の総合的結合を目指している農学者だ。私は作物生理・生態学者ではない。」と強調していた。

この著作はその観点から書かれている総合農学的論文である。農学の歴史を、ナポレオン時代の“Carl von Wulffen aus Pietzpuhl”の“Das Statische Gesets”から説きおこし、ついでVon Thunen(フォン・チューネン)氏の“Isolierter Staat”, Keynen(カイネン)氏の“General Theory of Employment, Interest, and Money(雇用、利子および金の一般理論)”, Liebig(リービッヒ)氏の“Low of Minimum(最小律)”さらにはRobert Mayer氏、Boysen Jensen

(ポイセン・イエンセン) 氏の研究を総括し、その上に自分の研究成果を位置付け、今後の農学の進むべき道、世界の食糧問題を論じている。彼は現在の食糧問題は社会的な問題であると言明している。立派な哲学を含んだ論文であると思う。

日本でも「新農学会」の設立が噂され、新しい農学を求める動きが出ている。確かにうなずける動きだと思う。その感覚は正しい。しかし、それを哲学に高め、農学に位置づけ、それを自分の研究に直接に結びつけられる人は少ない。ドワイト氏はそれが可能な1人だと思う。日本人の中にも、日本の農学の伝統をしっかり見据えて、新しい科学技術を導入し、独自の研究を発展させる人がもっと出てこなければならない。

CABOでは、午前中は机に座って本やマニュアルを読む。アルバダ氏からは、できるだけ早い機会に、ドワイト氏、ハーストラ所長、アルバダ氏および私でディスカッションして、私がここで何を研究するか決めるから、それまでしばらく待ってくれ、その間は好きなことをやってくれと言われている。そこで今はドワイト氏に言われた通りに、CSMPの利用法を主に習っている。ただし、もうここに来て1週間が過ぎたので、そろそろ何をやるかを大体決めたいと思っている。しかし、ハーストラ氏は研究所長なのでモウレッツに忙しいらしいのだ。アルバダ氏も最初の2、3日はずいぶん時間を割いてくれていたが、やはり相当忙しいらしい。まあそれほど慌てる必要はないかもしれない。もう少し待とう。

#### 研究パートナーのヤンと話す

夕方、ハウドリアン氏(ファースト・ネームはヤンという)が来た。この頃は、私も彼をヤン(Jan)と呼ぶようになった。ヤンは、私がこの前渡しておいた私の論文別刷り、および下書き原稿に目を通してくれていて、その意見を言いに来たのだ。彼は仕事がとても早いようだ。そして意見も実を的を得ている。29才だそうだが、私よりはるかに頭が良く、彼の意見は大変参考になる。良い友を得た。彼はオランダ人だが、英語・ドイツ語はもちろん、ロシア語もかなり話すことができるらしい。

オランダ語と英語は文法と冠詞の使い方などがほとんど同じで、英語は彼にとってほとんど苦にならないと言っていた。実際、ロビーや談話室にあるテレビを見てみると、西部劇やアメリカで作られたテレビ映画などはオランダ語の字幕付きだが、音声はほとんど英語である。これではオランダ国民は自然に英語に慣れるはずだ。

## 人のつながりと広がり

昼食時に人の良さそうな人と隣り合わせたので、「どこから来たのですか?」と聞くとポーランドからだという。私は日本から来たと言うと、彼は、日本の長塚氏、岩田氏（農業技術研究所）、相馬氏（宇都宮大）を良く知っている。長塚氏とは数年前このワーゲニンゲンで2年間一緒に勉強したし、岩田氏とは2~3年前モスクワの国際会議で2時間以上の長いディスカッションをしたという。私は、土壌物理学研究者の岩田、相馬両氏の名前を知っていたので、その旨告げると喜んでくれた。そして、あなたも土壌物理学者だろうとたずねると、そうだという。彼は、Prof. P. Kowalik (Tech. Univ. of Godansk, Inst. of Hydrotechnics) だという。そういえば、どこかで聞いた名のような気がする。Kowalik氏は、以前は、soil mappingの研究をしていたが、今は、土壌中の水移動の数学的背景を明らかにするためのコンピュータ・シミュレーションによる研究が主だという。それを畑の蒸発散の推定に利用したいと言うので、ではあなたの水移動モデルには植物が含まれているのかと尋ねた。すると、「正にそうだ。我々は土中から植物の根へ、そして茎を通り、葉が大気を通ずる水移動のモデルを、新しいアイデアでプログラムを作ったところで、それを実験結果と比較するためにここに来たのだ。」と言う。そんな仕事をしているなら、ドワイト氏を知っているだろう、と言うと、知っているどころか、彼はドワイト氏の弟子だと言う。彼はワーゲニンゲンに来るのは4回目で、1回目は2年間で、その時ドワイト氏に習ったという。2回目は半年間で、3回目は3ヶ月、こんどの4回目は2週間だけで、来週の月曜には帰ると言う。私は今ドワイト氏のところで勉強しているのだと言うと、大変喜んでくれて、それでは私が帰るまでに私の論文別刷りをあなたにあげようと言ってくれた。私も彼に、名前、所属、専攻などを紹介し、再会を約束して別れる。まだ40才前後のようだった。

## リベリア人と話す

夕食後、前から顔見知りの黒人と話した。彼はアフリカのリベリアから来た人で、皮膚の色は完全な黒である。一寸見たのでは、髪の毛と皮膚の境目がわからない。私が日本から来たと言うと、「私は前々から日本に行きたくてしょうがないのだ。だが、遠いのでお金がかかって行けない。私の友人が東京のリベリア大使館の秘書をしているので、“つて”はあるのだが。」と言う。東京に来て、機械工業を見て回りたいと言うのだ。短期間の滞在でもきっと有益でリベリアの建国に役立つだろうと言っていた。かなり真剣らしい。彼は農務省

の役人だ。私は5月に日本に帰るから、機会があったら訪ねてくれと言って、住所、氏名を教えた。そしたら、すぐには日本に行けそうにないが、私は日本のセイコーの時計が欲しくてたまらないので、5月か6月に金をあなたの所に送るから、時計を送り返してくれと言う。「まあ、できることなら何でもします。では、日本に帰ったら、あなたの手紙を待っています。」と言って別れた。アフリカに限らず、オランダでも、日本のカメラ、時計、音響機器は抜群の人気があるらしい。

11月11日 (火)

#### 研究生生活が始まる

朝6時に起きて、昨日の日記を書く。思いつくままに雑に書いているだけだが、結構な時間を取られる。他方、段々、事件がなくなってきて、日常的な決まり切った生活になり、書くことがなくなってきた。

明日、午後、クロイさんが帰国する。もう帰国の用意は済んで、何もやることがないと言うので少し話をした。彼女の家は西ドイツのケルンで、ここから電車で2時間くらいしかかからないという。週末にはいつもケルンまで帰っていたらしい。彼女は、堀江氏がこの研究所に居たときに、堀江氏から日本のことを聞いていたらしく、日本の結婚式、お見合いなどのことを知っていた。宗教の話や、私の家庭の話、私には子供が3人もいること、大学院生の時は妻に働いてもらって養われていたことなどを話した。日本語の話も少しした。

アルバダ博士にしばらく会っていなかったので、昼食に戻る前に部屋に一寸寄り、挨拶し、IMAG (園芸工学研究所) のハイナ(Heijna)氏に会いたいので、紹介して欲しいと頼んでおいた。IMAG (イマツハと発音している) は温室工学関係の研究所でCABOのすぐ近くにある。ハイナ氏は岡田君が紹介してくれた人である。午後、IACからCABOに行ったらしくすると、アルバダ氏から電話があり、ハイナ氏と連絡が取れ、明日の午前中、いつでもいいからIMAGに行ってくれと言ってくれた。明日も楽しい日を送れそうだ。アルバダ氏から、彼の論文の別刷りを10種類ほどもらった。その後は、ヤンとディスカッションしたり、CSMPの使用法を覚えたりした。

ヤンは作物群落内の光分布のことを研究したことがあるらしく、光環境のことについても詳しい。1973年にパリで開かれた国際会議 (人類に貢献する太陽) “The sun in the service of mankind” において、作物群落内の光環境に関する

る数値的研究 “A calculation model and descriptive formulas for the extinction and reflection of radiation in leaf canopies” を発表しており、その論文のコピーをもらった。彼は今29才だから、発表は27才の時である。

### 韓国人と話す

夕食時に、この前のエクスカージョンで隣り合って座って、知人になった韓国のパクさん (Mr.Park) と話していて、重大な思い違いに気が付いた。11月8日にアールスメアで見た花の展示会は1年でたった3日間の催し物で、もう終わってしまったらしい。私達があの展示会を見ることができたのは幸運だったらしい。大変な損をした。3日間だけと知っていれば、午後の運河めぐりなどやめておくべきだった。後悔している。きっとバスのガイドさんがそのことを説明したのだろうが聞き取れなかったらしい。そのうちに、もう一度あの展示会を見に行こうと思っていたのに。

パクさんは温室に興味を持っていて、私が温室のことを研究していると知って、色々質問してくる。彼の専門は「かんがい・排水」だが、温室のことをオランダで勉強しておきたいと言っていた。そして、今度の14日 (金) に彼の属している畑地排水国際研修コース (International Course on Land Drainage) の実習ツアーで温室の見学が組まれているので一緒に行かないかと誘われた。さっそく、明日、アルバダ氏に聞いて了解してくれば参加すると答えた。場所はハーグの近くで、温室のことを説明してくれる人が現地で待っているという。この見学ツアーの参加者は今のところ、たった2人だそう。私が参加するならば、研修コースの責任者であるデオルフ (De Wolf) 氏に電話で了解を取っておいてくれと、パクさんに言われた。

### さらに英会話能力の限界を感じる

今日あたりから私の英語力にはっきりと限界を感じはじめた。今までは、来たばかりで、日常的な会話ばかりだったので何も感じなかったが、午後にヤンと話していて、私の言いたいことが英語でどうしても表せない。込み入ったこと、複雑な論理はとても英語で表せない。短い文章は無意識のうちに英語で出てくるが、内容が複雑になってくると、日本語でまず考え、それを英語に直そうとする。すると口がモグモグ動くだけで英語にならない。仕方がないから、日本語で考えたことを、より簡単に言い直して英語にする。すると、その論理の弱さをヤンにつかれる。まあ、初めから英語のうまい人もいないから、そうあせることもあるまい。半年もすれば、もう少し何とかなるだろう。

クロイさんは、自分が何語をしゃべっているかを余り意識していないようである。英語、独語、オランダ語を無意識のうちに使い分けているようだ。彼女は、明日、ドイツに帰るので明日からはCABOの私の今使用している部屋は私の専用になる。残念な気もするが、正直、ほっとする気もする。彼女の英語はスピードが早すぎて（早口なので）疲れる。夕食後、またピンポンをやる。日本を出発して10日が過ぎようとしている。IACの生活も大体様子が分かってきた。少しずつ仕事も始めたい。

11月12日（水）

#### 園芸工学研究所 (IMAG) を訪問する

朝6時に起きて、昨日ヤンからもらった論文別刷りを読む。彼は数学が得意なようで、私には理解できない個所が多い。朝9時に、昨日、アルバダ氏に紹介してもらったIMAGのハイナ氏を訪ねる。彼はアルバダ氏の名前は知っているが、顔は知らないと言っていた。お互い自己紹介している間に、ストファー (Stoffers) 氏が入ってきた。しばらく話しているうちに、ストファー氏がそれでは研究所内を案内しましょうと言ってくれた。最初に見せてくれたのは、直径2.5m程の大きな積分球である。積分球の上に模型の温室を置き、遠くから光をあてて、温室の床面における全方向からの光量を測定するのだという。光を感じるセンサーは模型温室の床面に設置されている。光源としては探照灯（サーチライト）を使うらしい。まだ光源部分は未完成だが、今年中あるいは来年早々には完成の予定だという。どうしてこんな大がかりな装置を作ったまで、全方向の光を測定する必要があるのか疑問がないではないが、おもしろい装置だ。光源は天井に沿って動くようにするという。積分球は回転可能になっている。こんな装置を考えるのはきっと彼が物理学専攻だからではないかと思う。

次いで、彼は私をアドリー (Adrie van der Kieboon) の部屋に連れていってくれた。アドリーの名は岡田君から聞いていた。帰ったら、益己 (岡田) によろしくと言っていた。ヒゲをたくわえた非常に気のおよさそうな男で、親しみがもてる。彼とストファー氏は、彼らが今やっている暖房費節約に関する研究を説明してくれた。フェンロー型の温室の気温、暖房用温水の温度、暖房用パイプの表面温度など200ヶ所の温度を測ることによって、二重保温カーテンの効果をカーテンの位置、種類等を変えながら検討するのだという。彼らは200点の温度計測が可能なデータ収録装置を持っている。そして、去年DECのディスク付き

ミニコンピュータPDP11を買ったので、今度はそのコンピュータにデータ収録装置を接続するつもりだと言っていた。

日本でも石油の値上がりのため、温室の暖房費の節約が切実な問題となっており、Dr. Mihara (三原義秋先生) がそれに関してよい研究をしているので、そのうちその研究成果のいくつかを紹介したいと言っておいた。ストファー氏らの研究はいかにも物理屋らしい雰囲気がある。二重保温カーテンの実験は、最初は乾燥した植物のない温室で行い、それが終わったら、温室内に大きな(1m×2m)の吸水紙をつるして、植物の蒸散を模擬し、その吸水紙の吸水量から蒸散量を推定するのだと言っていた。

もう一つ、温室内の植物の熱伝導係数を決定するための実験装置を見た。実験室には上下10cm間隔くらいに、放射をカットするためにアルミ箔で包んだ豆電球を3000~5000個も並べ(20×30×5;上下方向に5段)、その豆電球を点灯した状態で、温度の垂直分布を測定し、上下方向の顕熱移動を測定するのだという。かなり物理実験的である。

その他、波長別のフィルムの放射透過率、反射率の測定装置等を見せてもらった。そこで、耳新しいことを聞いた。ガラス板に、ある種の酸化スズ化合物(彼はその名を知らなかった)を塗ると日射透過率は75%に低下するが、長波射出率が0.2に低下するという。そこで彼はこれが商業的に利用できるかどうかを検討していると言っていた。

ストファー氏とアドリーは非常に親日的だ。きっと岡田氏の功績だと思う。ストファー氏は名刺のファイルを取り出してきて、今までにIMAGを訪ねた日本人からもらった名刺を見せてくれた。千葉大・三原先生、九大・坂上先生、大阪府大・織田弥三郎先生等々、そしてついには岡田君がカタカナで書いた「ストファー」の紙切れまで見せてくれた。そして私も日本に行ってみたい、オランダ政府は実験装置には金を出す、旅費には金を出さないのが困ると言っていた。ところが研究費もこのインフレで余り出さなくなったがね……と愚痴っていた。ハイナ氏は岡田氏が残っていたコンピュータ・プログラムがうまく動かないと言っていた。アドリーはとても人が良さそうなので、IMAGには度々訪れることができそうだ。皆に再会を約して昼前に別れる。

IACへの帰りにオランダ語の辞書を1冊買う。やはりオランダ語を全く知らない困ることがある。その辞書を使って早速調べたところによると、IMAG (Instituut voor Mechanisatie, Arbeid en Gebouwen) は、構造物の機械化および労働に関する研究所、ということになるらしい。牧畜、果樹、園芸一般に関して広く研究しているらしい。

昼食時に、先日話をしたポーランド人 (Dr. Kowalik) に会ったら、私を彼の部屋に連れていってくれ、論文別刷りにサインしたものをくれた。「私は土壤物理のことをよく知らないが、よく読んでみたい。それに私の友人で土壤物理を研究しているのが何人かいるので、帰国したらその人たちにあなたの仕事を紹介したい」と言ったら喜んでくれた。読んで何か意見があったら今週中に伝えてくれ、来週の月曜にはもうポーランドに帰らねばならないと言っていた。しかし、本当のことを言うと、毎日10編以上の別刷りをあちこちからもらっているの、とても読みきれものではない。

### 食生活が変わる

こちらに来てから、食生活がだいぶ変わった。一番大きな変化は動物タンパクを摂る量の増加であり、生野菜を食べる量の減少である。第二の変化は摂取カロリー量の絶対的な増加である。私は日本では朝食はほとんど摂らない方で、食べてもご飯を軽く1杯、またはパン1片にジュース、漬物、野菜くらいで、ハム・卵などの動物タンパクを摂ることはほとんどなかった。ところがこちらに来て、最初の日はハム3枚、ミルク、パン2枚、バター等、2日目はハム4枚、その他同じ、等々で、今日はとうとうハム5~6枚、パン4枚、バター (2×2×2 cm) 2個、ミルクの食事を摂った。朝食に野菜が出ることはない。昼食にも野菜はほとんど出ない。夕食には少し出るが、ほんのちょっとである。やはりオランダは酪農の国なのだろうか。

私は好みと、健康上の理由に加えて、農学徒として食糧問題を強く意識しているので、肉類はできる限り食べないように努力していた。その代わり、生野菜を多く食べていた。それがここに来てから全く逆転してしまった。野菜を食べたかったら店で買って来るほかない。今は摂取カロリーにして日本に居る時の約1.5倍、家畜の育成に必要な熱量を含めたオリジナル・カロリーに換算すれば、約10倍を消費していることになる。

食生活でもう一つ変わったのはコーヒーを飲む回数である。私はコーヒーが余り好きではなく、コーヒーよりは紅茶を好み、紅茶でも1日1~2回なら良いが、3回はちょっと多すぎる。やはり緑茶や水が良い。ところが、こちらに来てから、たとえば今日はIMAGに行ったこともあって、午前中にコーヒーを4回飲んだ。午後にコーヒー1回、紅茶1回である。昼食前、コーヒーのため少しだけ胃がもたれた感じがした。私はコーヒーに砂糖を入れないので、砂糖の取り過ぎにはならないが、とにかく、人を訪ねれば必ずコーヒー、お礼を言ってそのコーヒーを飲み干せば、またおかわりといった具合でつい飲み過ぎてしまう。



今日の夕方CABOからIACに帰る途中に本屋に寄った。そして、Soil Information System (土壌情報システム) という名の本を買った。IACに帰ったら私が日本から送った小包が届いていた。何故だか分からないが、追加料金だとか言って27ギルダーを取られた。どうもこのところ出費がかさむ。毎日30~50ギルダーずつ消えていってしまう。

11月13日 (木)

少しづつ知人が増える

このごろ、IACで私の存在もだんだん知られるようになってきた。私が日本人であると知って日本語で挨拶してくる人もいる。今日はセイロンから来た人と知り合いになった。韓国の人はもちろん、東南アジアの人でも「おはよう」「こんにちは」「ありがとう」などの言葉は知っている人が多いようだ。私のことを「ミスター・ジャパン」とか「ミスター・マウント・フジ (富士山)」とか言って気軽に話しかけてくる。IACではどういう訳か、エレベーターで一緒になったら、誰とでも「ハロー」「グッドモーニング」「ハイ」とか言って挨拶する。そして次に会ったら前からの知り合いのような顔をして話しかけてくる。特にアフリカから来た人は陽気で気さくだ。

昼食時、日本からIACに昨日来たという山崎という人にあった。神戸製鋼の人で船のプロペラの作り方を研究しにNBSという研究所に1年間留学する予定だという。

今日の昼食時にはポーランドの婦人研究者と一緒にになった。40才過ぎの人の良さそうなおばちゃん風で、ポーランドでは園芸作物研究所の病理学研究室で病害を起こす線虫 (ネマトダ) について研究している。ポーランドでは女性の研究者がとても多いそうだ。彼女は最初は近くのオランダ人の家に寄宿していたという。そしてオランダ人の国民性はポーランドのそれとだいぶ異なるので最初はだいぶ面食らったと言っていた。

今日は夕食後、少し仕事をしたり、手紙を書いたりしようと思っていたが、部屋に戻る時に韓国のパクさんに話しかけられた。彼は帰国後温室に関係した仕事もしたいということで、色々温室のことを聞きに来る。彼は温室に関しては基礎知識がないので、何から何まで説明しなければならず、話していると少しくたびれる。こちらの説明が下手なせいもあるが、なかなかこちらの言うことが通じずに困った。これも国際親善と思って、なるべくにこやかに話をし

ていたが、3時間も話していたので疲れた。しかし、彼は元気旺盛で、ロビーで話していたのに、彼の部屋に行って、もっと話したいと言う。彼とは明日も、ハーグ近郊のナールドバイク (Naaldwijk) の温室作物研究試験場に、他のトルコ人1人と共に一緒になるので、彼と話は明日にしようと言って別れた。やはり韓国から来ている人、アフリカから来ている人などは、何ごとにも熱心で、建国に自分自身を何とか役立てたいという熱意が感じられる。

11月14日 (金)

パスポートがもどる

きょうも朝から忙しい1日だった。昨夕、日本大使館から電話があり、アムステルダム中央駅で私のパスポートが見つかったので、ユトレヒト駅の遺失物係にすぐ受け取りに行くようにとの伝言があったので、今朝、早速遺失物係に電話を掛け、午前中にそちらに行く旨を伝える。遺失物係で品物を見せてもらうと、現金以外は財布ごとすべて無事であった。早速、東京銀行、日本大使館、アエロフロート等にその旨電話で連絡する。

午後はそのままハーグ近郊、ナールドバイクの温室作物研究試験場 (Glasshouse Crops Research and Experimental Station) に見学に行った。韓国人の Mr. Park ともう1人のトルコ人とはユトレヒト駅で落ち合った。ここのコンピュータ環境制御温室には期待していたのだが、見るべきものがなく少しがっかりした。この研究所は半官半民だそうで、実用的な研究だけをしていると言っていた。水質の問題、育苗中の人工照明、肥料、灌漑法等を主な研究テーマにしていた。案内してくれたのは Miss van der Sar という若い女の子で、肥料、病害等の話ばかりで、私が環境制御のことを質問しても余り答えてくれず、困った。そして私が植物を何も植えていない温室の中に入って熱心に制御装置等を見ていると、彼女は、植物の入っていない温室をどうして見ているのか理解に苦しんでいるようで、不機嫌になってしまった。又機会があったらしかるべき人に案内を頼んで、ゆっくり見てみたい。

帰り際に、年配の男の人が研究室から飛び出してきて、あなたは日本人か、もしそうならこの文献を訳して欲しいと言われた。それは、果物、野菜中の鉛の含有量を二つの化学的分析法で測定した例に関する物だった。概要を教えると喜んでいた。

11月15日 (土)

#### 日本人と遊ぶ

今日は土曜日なので休日である。午前中はゆっくり休んだ。午後は坂本、山口、松浦氏等と福井先生（京都大学助教授、東南アジア研究センター）の家を訪ねた。今年3月こちらに来て、来年7月までここに居られるそうだ。専門は土壌化学及び土壌地理学とのことだ。実は、今夕、近くの学生会館で'International Foodmarket (国際食べ物市)'というのが大学職員組合の主催で開かれ、それに日本でも店を出すので、その手伝いということで伺ったのだ。しかし、実際は余り手伝わずに話をしていただけだった。この食べ物市には20ヶ国の店が開いて盛況だった。日本店はうどん、お茶、クッキー（抹茶付き）を出したが、人気が高く、1時間足らずで皆売り切れてしまった。ただし、3分の1くらいの人はお茶に砂糖を入れて飲んでいて。そのままでは苦いらしい。

食べ物市が終わった後、皆で、ワーゲニンゲンの中華料理店で食事を摂り、その後、又、福井先生の家に行って、12時頃まで談笑した。こちらでは、土曜日の夜は12時頃まで他人の家に居ても良いらしい。

11月16日 (日)

少し疲れが出た。夕方までほとんど部屋に閉じこもって、手紙を書いたり、本を読んだり、昼寝をしたりする。夕食前に少しピンポンをやる。夕食後、しばらく本を読んでいると、Mr. Parkが私の部屋を訪ねてきて、2時間ほど、話をした。彼は自分の将来に色々計画があるらしく、熱心にそれを話していた。

12月20日 (土)

#### 国際討論会での議論に圧倒される

12月15日 (月) から12月19日 (金) までの5日間、IACの会議場において、国際討論会「農業および生物学におけるモデルの評価」(The Workshop "Evaluation of models in agriculture and biology") が開催された。参加者は全部で27人だけで、名の知られた人としては、オーストラリアのベネット (Bennett)、米国の

カーリー (Bruce Curry) とルーミス (R.S.Loomis)、デンマークのエッカート (Eckardt)、英国のソーンリー (J.H.M.Thornley)、オランダのドウィット (de Wit) の各氏がいる。英国のモンティース (Monteith) が、他の仕事上の理由で直前に参加を取り止めたのがとても残念である。

この討論会はドウィット氏が発起人となり、ペニングドフリース (Penning de Vries)が企画したもので、その主旨は、「ダイナミック・シミュレーション・モデルの評価に関する可能性と方法の徹底的な討論」にある。この討論会における各セッションの議長と、討論の導入的課題提供をする人および議事録を作るリポーターが決められたが、実質的にはまったくの自由討論である。第6セッションの議長は日本の農技研の堀江氏がつとめ、議長としてみごとに討論を進行させ、皆の喝采を浴びた。討論の詳細な説明は省くことにして、以下には個人的かつ断片的な感想を記したい。この討論会の議事録は、来年中には、しかるべき国際誌に掲載されることになっている。

今回のような、徹底的な学問的討論会は国際的にも珍しいものと思う。私としては貴重な体験をした。このような感想は、私だけでなく、他の人も持ったようである。議事の進行の主導権は、実質的にはドウィット氏とルーミス氏が持っていたようだが、他の人もよく発言し、日本では考えられないような激しい議論が沸騰した。相手が血相を変えて話しているにも関わらず、それをさえぎって反論したり、大声で怒鳴ったり、日本的常識では理解できないほどだ。しかし、最後は喧嘩別れということは絶対にない。最後は互いに冗談を言い合って和解する。私は、日本では、議論にすぐ興奮し、真っ赤になってかみつく方だが、この討論会では私などは問題にならない程、激しい議論をする人がたくさんいた。そして、議論の内容はそれだけ確実に深まった。

モデリングの目的、効果に関する意見は大別すると二つになる。一つはドウィット、ルーミス等の栽培学者 (Agronomist) の意見である。彼らは、モデルは科学的知識を深めるための、また実験の補助手段のための、即ち、どんな実験をしたらよいかを指摘するための道具であると考えている。彼らは自分たちを科学者として位置づけて、物理的または生理生態学的に意味のないモデルは無意味だと考えている。

他の一つは、ベーカーに代表される農業工学者 (Agricultural Engineer) の意見である。彼らは、モデルは実社会に役立てばよいので、モデルの物理学的・生理生態学的な意味は必ずしも明確でなくても構わないとする。数学者にもこのような考え方をする人が多かった。そしてこの2派はしばしば本当に激しい討論をした。

ルミス氏は討論会でドワイト氏と共に常にオピニオンリーダーの役を果たしていた。思慮深い、説得力のある学者らしい態度には過半の人が肯いていたが、面白いことに他のアメリカ人であるベーカー (Baker)、カーリーおよびパート (Peart) がルミスに対して盛んに反論していた。

ルミス氏は世界の食糧問題に関して、ドワイト氏と同じく、現在および将来の食糧問題は自然科学というよりは社会科学、政治の問題だと言っていた。栽培学としては世界の食糧不足は完全に解決できる、しかし本当の解決は社会機構の改革なくしては実現しないと語っていた。

この討論会で私が一番悩まされたのは米語 (アメリカ人の英語) である。発音がモゴモゴしてクリアでないのに加えて、討論中にスラング (俗語) を巧みに使って皆を笑わせている。ところがこちらはスラングが皆目分からず、冗談を言われてもその意味が分からない。皆が笑っているからきっと面白いのだろうということで、私も訳も分からずつきあって笑う次第である。それに1日6時間の討論なので、午後になると疲れて英語が頭を素通りしていく。

英語には本当に何種類もあるものだ。英国人、オランダ人、イスラエル人、デンマーク人の英語は分かりやすいが、米国人、オーストラリア人の英語はどうも分からない時が多かった。

もう少し英語が達者ならば、私もここでこういう意見を言いたいのだがと1人で悔しがっていた。チクショーである。次の機会には是非堂々と英語で意見を述べてみたい。

#### 討論会の途中の見学会でルミス氏に感銘を受ける

討論会の3日目である12月17日 (水) には、観光バスを借り切って、皆でオランダの干拓地に「エクスカーション (遠足)」をした。家族を連れてこの見学会に参加した討論会の参加者もいた。行きのバスでは、英国の温室作物研究所 (Glasshouse Crops Research Institute) のソーンリー氏と一緒にになり、楽しい時を過ごした。彼は、物理学者だったのが途中で作物生理学者に転向したという人である。今度の討論会には、物理学者だった人が4人、応用数学者が4人ほどいる。ソーンリー氏と私には「温室」という共通の話題があったので話がはずんだ。

帰りのバスでは米国カリフォルニア大学 (デービス校) のルミス氏と座席を隣り合わせた。彼は世界第一級の栽培学者で、人間的にも非常に立派な人で感銘を受けた。彼とはこの時以外にも、討論会中、3~4回話をした。

彼は私にこんなことを話した。彼はいま、「さとうきび」の研究をしている

関係で、研究用さとうきびの栽培をさとうきび栽培の名人といわれる日系米人に依頼している。カルフォルニアには中国系米人と日系米人が沢山住んでいて、中国系米人は商業で、日系米人は農業で活躍しているという。

ルーミス氏がその「さとうきび畑」を訪ねた際、その日本人が、何も無いがお茶でも飲んでいってくれ、と言うので彼の家に立ち寄った。彼の身なりは誠に粗末という他なし、これ以上の貧乏人があろうかと感じるほどだった。ところが、家に入ってみると、彼の娘が長くのばした爪にマニキュアをつけ、立派なピアノでピアノを弾いている。音楽大学のピアノ科を卒業した音楽家で、今はかなりの収入を得ているという。他に3人の息子がいて、そのうち2人はすでに博士の学位をとり、現在、大学の教官をしている物理学者と工学者で、3番目の息子は博士課程大学院生として研究生活を送っているという。ルーミス氏はこの両親の生き方に深く感動したという。このような態度を子供に対してとれるアメリカ人の両親は決していないだろうということだ。

ルーミス氏は昨年5月に日米エネルギー合同委員会の招待で、他の米人科学者3人と共に日本に1週間ほど滞在したという。東京で「中山」さんという人が議長をした公開討論会に参加したという。そういえば、そのような公開討論会の新聞記事を読んだ記憶がある。たしか、朝日講堂かどこかで、一般の人も参加できるような形で討論会が行われたはずだ。討論会の後、サシミやタコを食べて、休日には埼玉県の「秩父」へハイキングに行ったという。そこで、風景の話が出て、ルーミス氏がオランダと日本の風景は「すべてがスモール・スケール（規模が小さい）という点で」よく似ているという。そういえばそうかもしれない。少なくともアメリカの風景と比較すれば、オランダと日本の風景は共に小規模という点で共通したものがあろう。しかし、私はそういう風な考え方をしたことがなかった。オランダの風景と日本のそれとは異なると考えていた。見方の違いというものは人によって実に大きい。

12月23日（火）

クリスマス・パーティー

多くの人達の厚意で、楽しいクリスマス週間を過ごすことができた。以下にその概略をお伝えしたいと思う。

まず、12月23日（火）の夕方5時過ぎから、ヤンの家で、ドワイト氏が教授をしている理論生産生態学科の職員ほぼ全員、およびアメリカ人のミレン

(Millen) 夫妻、日本の堀江氏それに私が招待されて、パーティーがあった。全部で25人前後である。ヤンは29才の助手だが、月給は2400ギルダー（約22万円）で立派な家に住んでいる。月賦で毎月650ギルダー（6万円）ずつローンを支払って、何年か後には自分の家になるとのことである。大きなリビングルームの他にホビールーム（趣味を楽しむ部屋、彼の場合には立派な大工道具一式の揃った工作室）がある。

このパーティーでは「スイス・チーズ・フォンデュ(fondu)」を楽しんだ。大きな鍋にチーズを入れて溶かし、ワインを加える。そしてフランスパンをちぎって鍋の中につっこみ、チーズの沁みたパンを食べるという至極簡単な料理である。フォンデュとはフランス語で「溶かす」という意味だそうで、最近オランダではこれがはやっているということだ。大きな鍋を囲んで、皆でパンをチーズの鍋につけて食べるので、日本のすき焼きや鍋物をつついているような感じになる。

パーティーといっても別にどうという訳でもなく、勝手に食べ始めて勝手に隣の人と話して勝手に飲んで、各人が適当な時刻に勝手に帰るとい感じで、日本のパーティーとは少し異なる。

オランダに来てからこの種のパーティーにはもう何度も招待されているし、今回は日本の堀江氏も一緒だったので気楽に楽しめた。とはいっても、やはり何かをするといくつかの新たな体験、発見がある。今回の発見は以外にも堀江氏に関してである。

彼は大変な人気者なのだ。少なくとも、誰もが彼に親しみを感じているようである。彼が何かを話すと皆がよく笑う。話の内容は別にどうということはない（日本人から見れば）ないように思えるが、とても愉快なのだ。私がこちらで一番困ったのは、ここではいわゆる“日本式冗談”が通じないことだった。日本語でつまらぬ話をしてお互いに大声で笑うのは日常よくあることだが、それを英語でどう話したら良いのかほとんど困っていた。気軽に話すにしても、どの程度気軽に話してよいのかその程度がなかなかつかめなかったのが、今回、堀江氏のふるまいを見て、その辺の呼吸が多少つかめたようで、とても参考になった。

彼はよく、ドワイト氏のものまねをして皆を笑わせていた。

### 天真らんまんドワイト教授

ドワイト氏は個性的な人で、まったく得難い人材である。彼はとても知的な反面、子供みtainふるまいをよくする。彼は議論をしていると、突然奇声

を発して立ち上がり、部屋の中をぐるぐる歩き回って、時には部屋の外に出ていってしまう。そしてどうしたのかなと思っていると、数分で戻ってきて、また議論を続けるのである。部屋の外で考えをまとめているらしいのだが、最初は私も一寸びっくりした。そして興奮してくると、大声で同じことをわめいている。アメリカ人に聞くと「彼の英語は文法的にはデタラメに近いことがあるが、少なくとも彼の考えていることはとてもよくわかる」ということである。いつも早口でしゃべる。

話を聞いているときは、イスから落ちそうなほど反り返った姿勢でいるかと思うと、急に机にうつぶしたりで変化に富んでいる。しかし、とにかく、一生懸命何かを考えているらしいということがわかるので相手には悪く思われようだ。

彼はパイプの愛好者で、いつもパイプを二つ持っている。このパイプにタバコをつめて吸う訳だが、議論に夢中になると、せっかくつめたタバコを、もう吸ってしまったと思うのか、あるいはまだつめていないと思ってか、ほじくり出し、また新しいタバコとつめかえてしまう。しかもそれが議論に夢中になると度々なのだ。どうしてこの人が現在の世界の農学分野での第一人者なのかと思いたくなるぐらいである。他方、私が一番感心するのは彼の笑顔が実に美しいということだ。50才を過ぎた人で、いや20才を過ぎた人でも、彼ほど純粋な笑顔を持っている人は数少ないであろう。赤ん坊の笑い顔と同じで汚れないのだ。天衣無縫、天真らんまんの人の代表であろう。

ヤンには2才の子供がいるのだが、このパーティーでドワイト氏とその子供がすっかり仲良くなってしまい、8時半を過ぎてその子供が寝る時間になっても、ドワイト氏から離れたがらない。そして、「このおじちゃんと一緒なら寝る」ということになり、とうとうドワイト氏が子供と寝室に行き、寝つかせてきた。やはり、ドワイト氏の性格が純粋でそれがすぐに子供に通じるのであろう。

その他、ドワイト氏については色々な面白い話を聞いた。ホニーさんが話したところによると、彼は靴をはいているのが好きではなく、議論が長くなると靴を脱いで、素足で歩き回るそうだ。ところが、議論で興奮すると、帰るときに靴をはくのを忘れて、素足で部屋から出ていき、そのまま車を運転して帰宅し、それでも気付かないで、奥さんに家で「靴はどうしたのですか?」と聞かれてはじめて、靴をはいて帰るのを忘れたことに気が付くことがときどきあるとのことである。

それをヤンに確かめると、実話だという。ヤンとドワイト氏は昨年イスラ



エルに行き、そこでモスク（回教の寺院）を訪ねた時、モスクの中には素足でないと入れないので、靴を脱いで入ったのだが、その時も帰りに靴をはいて帰るのを忘れて、ホテルに帰り、そのボーイに「あなたの靴はどうしたのですか」と言われてはじめて気が付き、あわててモスクまで靴を取りに戻ったそうだ。その時、モスクの下足番のおじさんに「私は10年間、下足番をやっているが、白人で靴をはくのを忘れて帰ったのはあなたが初めてだ。以前、アフリカの奥地から来た黒人に1人そういうのがいたがね。」と言われたそうだ。

堀江氏の話によると、彼の車の運転は相当に乱暴らしい。ドワイト氏は道路を曲がるとき、ほとんどスピードをゆるめないのので、同乗者はどこかにしがみついていないと、振り回されるとのことだ。しかも、彼は時々、運転中に何かを考え出すと、自分が車を運転していることを忘れる時があるという。そして、信号を無視したり、ハンドルから手を離してペンと手帳を取ろうとしたりするという。私が彼の運転する車に同乗させてもらった時は、幸か不幸か、それほど乱暴な運転ではなかった。

彼は農学の分野では、世界でもっとも早くコンピュータを使い始めた人なのだが、堀江氏の話によると、彼の作ったコンピュータ・プログラムはまるでデータラメで、結果がちゃんと出てきたことはいまだかつてないとのことである。ところが、彼の部下のドヨング (de Jonge) 氏がコンピュータ・プログラミングの名人で、彼がドワイト氏のプログラムを完成させていたそうである。ドヨング氏とは私もよく話をするが、まことにスローテンポの人間で、仕事はべらぼうに遅いが、内容は驚くほど正確な人だ。他方、ドワイト氏は仕事はべらぼうに早いがまことにそそっかしいので、2人のコンビネーションが良かったのだろう。ドヨング氏はあまりにもスローテンポの人間で、奥さんに逃げられたそうである。彼にプログラムのことを一寸質問すると、その答を得るのに1~2時間はたっぷりかかる。

ドワイト氏の奥さんにも何度も会ったが、この奥さんもなかなかの人である。どちらかというドヨング氏のタイプで落ち着き払った人間で、そそっかしいドワイト氏をウラからしっかりと支えている感じで、動作は誠に端正である。人間関係というのは、コンビネーションの妙というのが実に大事なのではないかと感じる。ドヨング氏およびあの奥さんがいなければ、ドワイト氏があればほど自由奔放に自己の才能を発揮し、農学研究の世界的第一人者にはなれなかったのではないだろうかと思いたくなる。

ドワイト氏の頭脳はきわめて明晰で、実に論理的に物を考えるので、彼と議論して彼を説得するのは難しい。しかも、彼はかなり頑固なところがあり、

私が見ればどうでもよいようなことでも、なかなか自説を曲げないことがある。そして、「多分、私は頑固者と思われているであろうが、それでも私は考えを変えない。」としばしば言っている。それでも、彼は誰からも親しまれているし、学問的にも第一級なのであるから、まったく、人格、人柄というべきであろう。

彼はどうも1ヶ月に1、2回も服装を変えていないようだ。断言はできないが、彼のネクタイは私がオランダに来て以来、2ヶ月間一度も変わっていないような気がする。しかも、そのネクタイはしばしば「裏返し」になっている。実に愉快な人物だ。彼のエピソードは私が聞いただけでも他にも沢山あり、どれも彼の性格を实によく表している。

ヤンの家でのパーティーは夜中の1時半まで続いたらしいが、私は12時半に帰宅した。

12月24日（水）

ゴッホ美術館を訪ねる

朝方はCABOで仕事をしたが、以前、韓国の洪（ハン）氏に計算機センターの見学につきあうことを約束していたので、10時半過ぎから1時間ほど計算機センターを案内した。

正午にアルバダ氏の家に行き、アルバダ夫妻と堀江氏と私で、アルバダ氏の車（ルノーの新車）でアムステルダムに行った。アルバダ夫妻は、私達をゴッホ美術館に連れていってくれるというのである。実は、私はゴッホ美術館には1週間前に行ってゆっくり見てきたのだが、堀江氏は見えていないというし、何回でも見たいと思っていたので、一緒に連れていってもらった。

出かけるときは雨が降っていたが、アムステルダムに着く頃にはやんでいた。高速道路の路面状態が良いせいか、雨でも車は時速100km以上で走っている。アムステルダム郊外の駐車場に車を置き、そこから電車に乗って、市の中心に向かう。市内は車が混雑しているのでこの方がよいそうである。

最初、堀江氏が買い物をしたいと言うので、デパートに行き、彼の子供へのお土産とアマリリスの球根を買い、ついでスポーツの専門店に行き、テニスのラケットを140ギルダーで買う。このラケットを日本で買えば3万円はするということである。

ゴッホの絵は何度見ても飽きない。先週は1人でただ見て回るだけだったが、

今回はアルバダ夫妻の解説付きだったので、とても理解が深まった。時代の背景や各地方での仕事の特色などを細かに説明してもらったので、すっかりゴッホの「通」になった感じである。

私がオランダに関して一寸不思議なのは、この美術館に限らず他の美術館、あるいは駅や町中の標識や説明がすべてオランダ語で、決して英語では書かれていないことである。これだけ、外国人の多い、しかも英語をよく知っているオランダ国民が多いのに、どうしてなのか。きっと国民性とそれなりの時代的背景があるのだろう。日本では全く逆に、分かりもしない英語がやたらと目に付き、どっちもどっちなのだが……。

美術館を出る時に、アルバダ夫妻から堀江氏と私に、売店で売っていたゴッホの画集を「記念に」と言われ、プレゼントされた。とても立派な、ほとんどが原色の画集で、恐縮する。オランダの生んだ、世界的画家ゴッホへの理解を深めようと思う。

#### アムステルダムであの安ホテルに出会う

美術館を出てから、近くの「骨董屋」を見て回った後、中華料理店で夕食をしようということになり、歩いてダム広場の方へ向かった。ダム広場へ向かう道で、偶然、私がパスポート盗難事件のあおりで、11月3日の夜にアムステルダムで1泊した安ホテル（1泊15ギルダー）の横を通った。堀江氏に「ここが私の泊まったホテルだ」と言うと、「ほんとにかよ、この辺は有名な連れ込み宿街だぞ。」と言う。彼の解釈によると、この種の宿に1人で泊まるということは、女を求めていると解釈されるという。あの夜中に、私の部屋を激しくノックしたのはその種の女だろうという。そして次にとなりの部屋をノックし始めたのは、私をあきらめたからで、隣の部屋で最初大声でわめいていたのは、値段の交渉だったのだろうという。あとき、女の方は最初大声で泣いていたので、本当は彼の解釈通りかどうか知らないが、あり得ないことでもないかもしれない。

11月の3日と4日に私はアムステルダムの町を歩き回ったので、今日歩いた所も、その時歩き回った所と同じ個所がいくつもあって、とても懐かしかった。ただ、あの時はどこを歩いているのかよく分からずに歩き回っていたのだ。苦勞して探し当てた「アエロフロートのアムステルダム支店」や空腹の余り路上で立ち食いした「ムント広場のにしん売り」で買った「生にしん」も見かけた。

レストランを探している途中、おかしな所を通ったので、堀江氏に聞くと、ここが有名な「かざり窓」だと説明してくれた。アルバダ婦人も「ここはspe-

cial place for men (男性のための特別な場所)」だと説明してくれた。アルバダ夫妻が知っていてここを通ったのか、偶然通ったのか知らないが、堀江氏はアルバダ夫人に「あなたはここを通ったのは初めてでしょう」と質問されて、答に窮していた。

街全体の感じは、暗くて、汚くて、陰惨である。この一角に住んでいる人は、中国系、インドネシア系、黒人系が大多数で、他に少し白人のドロップアウトした人があるようだ。店のドアにも「Chinese only」という張り紙があり、中国系の人以外の入店を断っているクラブ風の店をときどき見かける。その近くの中華料理店で食事をして、8時半過ぎにアルバダ氏の家に戻り、一服してから、近くの教会にクリスマスイブを過ごしに行った。

#### 教会でクリスマスイブを過ごす

ホニーが堀江氏と私を教会に招待してくれた。その教会には500人程度の人が入れる、大きい礼拝堂があった。沢山の人がつめかけて、参会者が座りきれず補助イスを使っていた。牧師の説教をはさみながら、教会の合唱団や私達の賛美歌の連続である。歌詞が皆に配られていたので、それを見ながらデタラメの発音とメロディーで私も大声を出して歌った。なにしろ、500人の合唱だからひとりふたりデタラメの歌を歌う人がいても分かりはしないのである。英語で書かれている歌詞が2、3あったのでそれは特に大声で歌った。メロディーを知っていたのは、最後に歌った一つだけだった。

教会でちょっとびっくりしたのは「牧師の説教」である。私は「牧師の説教」などにまったく興味のない方だが、ここの牧師はまるでシェークスピアの役者のようにジェスチャーが大きく、声も大きく良い声で、まったく芝居かオペラを見ているのと同じである。勿論オランダ語だから何を話しているかは分からなかったが、面白かった。聞くと、あの程度のジェスチャーは牧師としては当然で、あの牧師はジャンプしながら話をしなかったからまだおとなしい方だということだ。

11時半頃にミサが終わり、その後ホニーと堀江氏とホニーの友達2人と私でホニーの家に行き、皆でブドウ酒を飲んだ。ただし、私だけはジュースを飲んだ。どうもブドウ酒を飲むと疲れる。午前1時半頃帰宅する。

12月25日 (木)

### クリスマスの夕食招待

今日はクリスマスで祝日である。連日、帰宅が深夜だったので、くたびれて午前中は寝ていた。今日はクリスマスの祝日なので、午後は部屋の整理、ピンポン、洗濯をしたりした。夕方5時頃、堀江氏が私の部屋を訪れ、少し話をした。そして6時過ぎにアルバダ氏の家に行った。クリスマスの夕食に堀江氏と私を招待してくれたのである。典型的クリスマス料理ということで、七面鳥の肉にジャガイモ、ビートベリー、リンゴペースト等を食べた。食事後、アルバダ氏が日本に行ったときに撮ったスライドをプロジェクターで写して見せてくれた。とても良かった。

私は現在、オランダの風景や生活様式に不満を少しも持っていないが、スライドで写される日本の景色や生活を見ると、何か言葉に表せないような「ホー」と気分が楽になるから不思議である。やはり文化が異なるのだろうか。スライドを見た後、私が「ホームシック」になった。明日日本へ帰りたいから至急切符を手配してくれ！」と騒いだので大笑いになった。堀江氏は明日の昼の飛行便で帰国する。12時過ぎに帰宅する。

1976年1月1日 (木)

### おおみそかパーティー

あけましておめでとうございます。

昨年の大晦日が近づくにつれて、やはり正月だけでも家族と一緒に迎えたいものだ強く感じていました。日本の大晦日から正月にかけての町や家庭内の雰囲気にはやはり独特のものがああります。ところがオランダでは、クリスマスが盛大だっただけに、正月は、何か、その「疲れ休み」といった感じで淡々としており、少しも正月らしい雰囲気がなく、正直言って、少しさみしさを感じていました。

それでも、一応、IACでは12月31日の大晦日に“New Years Eve Party”を夜9時からやるから、参加したい人は応募用紙に申し込むこと、その際IAC以外の友人を4人まで招待してもよい。パーティーでの飲み物、食べ物は無料である旨のパンフレットをもらっていました。私は酒がダメな方なので、参加する気に

なれず、申し込まずにいたところ、受付係の人に「あなたはもう申し込んだか、まだ申し込んでいないなら、ここに申込用紙があるから、これに書き込め。」と言われたので、しぶしぶ一応申し込んでおきました。IACには、現在、私を含めて3人の日本人が宿泊しているが、他の2人（坂本氏と小島氏）は正月をスコットランドのアバジーンという所の友人の家で酒を飲みながら過ごすということで、昨日朝早くIACを立ちました。その2人は酒飲みで、酒が大好きです。従って、IACの住人でこのパーティーに参加するのは私ひとりでした。そこで一応、IACには住んでいないが、ワーゲニンゲンの他の場所に下宿している日本人の名前（山崎）を友人として書き込んでおきました。別の日本人（松浦）は他の人のゲストとして来ると聞いていたので、一応、日本人が3人参加する予定でした。

夕食後、少し居眠りをしていたところ、8時半頃、山崎氏が私の部屋を訪ねてきました。パーティーは9時からでしたが、9時半頃に会場に2人で出向きました。会場はIACの1階談話室で、50人強が既に集まっていました。最初は、何か、雰囲気がちぐはぐでなじめなかったのですが、しばらくしてゲームのようなものが始まり、なごやかになってきました。最初は「チェアダンスchair dance」というもので、参加者より一つ少ない数のイスを用意して、座れなかった人は失格という、日本でもよく知られているゲームです。私は思いきって、2回目のゲームの時に参加しました。それで大分気分がほぐれました。

このパーティーの参加者の40%位がアフリカ諸国から、30%位が東南アジア諸国からといった感じです。通常はIACには女性は極めて少ないのですが、クリスマスから正月にかけて、IACに単身で来ている既婚男性で奥さんと呼んでいる人が何組かいるのと、ゲストとして来ているオランダ女性が数人いるので、パーティー出席者の20~30%が女性でした。IACに宿泊している女性はほとんどがアフリカからの人で、その他はコロンビアから1人、ポーランドから1人だけです。

### 多国籍パーティー

ご承知のように、私は無粋、無趣味の男で、生まれてこの方一度もダンスをしたことがありません。フォークダンスさえもしたことがありません。12、3年前に、法政大学で音楽バンドのリーダーをしている森本という友人に彼らが演奏するダンスパーティーに一度友人達と一緒にいったことがありますが、何か雰囲気が不自然でとても踊る気になれませんでした。もちろん、踊り方を知らなかったことも事実です。それ以来、「ダンスはしない」ことにして今まで

やってきました。そして、それは死ぬまでそうであろうと感じていました。

それが、わりと気軽に「チェアーダンス」に参加できたのは、黒人のダンスを見たからです（チェアーダンスでも私にとってはダンスに変わりありません）。彼らのダンスは実に自然で、本当にダンスを楽しんでいるといった感じで、不自然さ、いやらしさがまったくなく、びっくりしました。今まで日本人のダンスだけを見ていたのが、私のダンスに関する先入観を作ってしまったのかもしれない。目の前で黒人のダンスを見て、これなら私も楽しめるという気になったのです。

「チェアーダンス」の次には「ペーパーダンスpaper dance」が始まりました。「ペーパーダンス」とは新聞紙を広げて、床の上に敷き、その上で2人1組でダンスをするのですが、3分毎位に、その新聞紙を次々と半分の大きさにたたんでいかなければなりません。そして、その2人のどちらかが、その新聞紙の外に出てしまったら、その組は失格するというゲームです。したがって、4回目位には新聞紙がノート大の大きさになり、2人がしっかりと抱き合えないと新聞紙の外に足が出てしまうので、いわば、それを楽しむのです。私も誘われましたが、ちょっと抵抗があり、やりませんでした。

#### 誤解からダンスするはめになる

そうこうしている内に、本当のダンスパーティーになってきました。ホールの中央で皆がダンスを踊り、飲み食いはホールの周囲のテーブルでやるといった感じです。私は手持ちぶさたになり、隣り合ったフィリピンの人としゃべったり、料理をバリバリ食べたりしていました。のどが渴いたので、ジュースをもらいにカウンターに行くと、そこのバーテンが何を思ったか、大きなビンをポンと私の前に置きました。そして、「お前は日本人だろう。これは日本酒で、すでに37℃に温めてある（オカンしてある）。これをお前にプレゼントする。」と言うのです。びっくりしましたが、ありがたく頂戴しました。オカンしてあるところに泣かされました。この厚意にはうれしく感じました。ただ、私は日本酒は飲めないの、テーブルで酒を飲んでいる人達に「これは日本の“サケ”というアルコールだ。とてもうまいから、一度飲んでみないか。」と言ってついで回りました。「フクムスメ」という銘酒でした。ひとわりお酒をつぎ終わった頃、何人かがさかんにカメラのフラッシュをたき始めたので、私も部屋にカメラを取りに戻りました。そして再び会場に行くと、ポーランドのボズニャック氏に呼び止められました。彼はIACにいる坂本氏と同じ研究所に留学しているので、前に二、三度話をしたことがあります。ただ、余り英語

がうまくなく、話をするのにとても骨が折れます。彼の奥さんがクリスマス前からIACに来ているのですが、坂本氏から奥さんは英語がまったくダメだと聞いていたので奥さんが来てからは彼には近づいていませんでした。

「ボズニャック氏は酒に強い」と坂本氏から聞いていたので、先ほど「日本酒」を勧めておいたのです。彼が私を呼び止めたのは「あの酒はとでもうまかった。女房ももっと欲しがっているがまだ残っているか。」と私に尋ねるためでした。まだ残っていたので喜んでついでやると、すぐにまた飲んでしまい、またつぐといった感じで、私も彼らの隣に腰掛けて話をしはじめました。だけど、彼の奥さんに紹介されたはいいけれど、本当に英語をほとんど知らないで、すべて旦那の通訳付きです。英語の単語は10~20位しか知らないと言っていました。なにしろ、日本では子供も知っている「ハッピー」「ニュー」「イヤー」(Happy New Year)がまったく通じないのです。しかも、旦那も変な英語をしゃべるので、ほとんど何を言っているのか分かりません。それに、ダンスの音楽がうるさくて、よく聞き取れないのです。

チンプンカンプンの話をしばらくした後、日本酒のビンを彼らのところに置いたまま、席を離れようとして、「ダンスの音楽がうるさくてあなたがたの話がよく聞こえないので、後でまた来る。」と言って席を立とうとすると、奥さんが「ダンス?」と聞き返しました。「ダンス」という言葉を知っていたらしいのです。そこで「そうだ。ダンスの音楽がうるさすぎる。」と答えると、彼女は夫と何か二言、三言ポーランド語でしゃべったかと思うと、やおら立ち上がり、肩にかけていたショールをとって、ホールの中央の方へ歩いていき、私を手招きで呼ぶのです。どうも「私が彼女とダンスをしたくて立ち上がった」と解釈されてしまったようです。

どうしようもありません。彼女は向こうでじれったそうに待っているのです。私が行って「私はダンスを踊れません。」と謝ろうにも英語が通じないのです。「エーイ、ままよ」と彼女の方に行き、にっこりと笑って踊り始めました。もちろんステップの踏み方などはまったく知らないのでデタラメもいところで、音楽に合わせて体を動かしているだけです。ただし、腕をとって抱き合う形ではなく、向かい合って50cm程離れて踊りました。

ダンス用語を知らないので説明できませんが、とにかく、体を動かしながらニコニコしているうちに、一曲終わり、次いでもう一曲踊り、それから席に戻りました。早速、旦那に「私は生まれて初めてダンスというものをしたので、とても下手だったに違いない。奥さんにその点を謝ってくれ。」と伝えました。そしたら、そんなことはない、と慰められました。そして「私の妻は、あ



なたととても気があったと言っている。」と言われました。その間、彼ら2人がガブガブと日本酒を飲み、あつと言う間に、2人で5合ほど飲んでしまいました。かなり酒に強いようです。

他のポーランド人と話をしても感じるが、ポーランド人は大体において感受性が強いとかデリケートというか、悪く言えば気分屋で、表現が大きさ、良く言えば人と対するとき、非常に情感を込めて対応するようだ。

そんなわけで、また、ボズニャック夫妻と話が始まってしまい、旦那とも気が合い始め、彼らは私がオランダから帰る前に、私をポーランドの彼らの家に1週間ほど招待したいと言い出した。

その後、タンザニアの人とも話をした。彼は1970年の大阪万博で大阪に行ったそうである。政府からの派遣者としてタンザニア館で働いたらしい。タンザニアには日本人がいっぱいいると言っていた。鉄道、電気、繊維関係が多いらしい。私も大阪に住んでいると言うととても喜んでくれた。そして、「大阪万博に行って、タンザニア館を見たか？」と言うので、本当は大阪万博には行っていなかったが、酒を飲んでいたせいか「大阪万博でタンザニア館を見て、とても感銘を受けた。」などと言ってしまった。そうしたら喜んで抱きついてきた。

ボズニャックの旦那の方はダンスが苦手らしく、奥さんがしきりに誘うが席から動こうとしない。そして私を見るので、また、踊ることになり、結局ずいぶん踊ってしまった。

### 元旦0時のバカ騒ぎ

そうこうしているうちに、急に騒がしくなり、奇声が飛び交い始めた。時計を見ると丁度12時である。1976年になったのだ。皆「ハッピーニューイヤー！」と言いながら誰かれとなく、握手してキス(ほおをとり合せる感じ)をし合っている。たまたま、隣り合わせた松浦氏が、全員と握手とキスをしなければ失礼になるよと耳打ちしてくれた。

松浦氏は昭和46年、東大農学部 杉研究室卒業で、現在農林水産省の役人だが、去年8月よりワーゲニンゲン農業大学の修士課程に留学している。とても感じの良い、頭の良い青年で、私達は彼をIAC社交界のプリンスと呼んでいる。皆に人気があるのだ。皆の面倒を良くみるし、成績も抜群に良いらしく、評判が良い。

「ハッピーニューイヤー」の握手とキスはものすごく、私に考える暇をまったく与えない。黙ってボサッと立っていると男も女もだれかれとなく、近くの

人が握手を求めてきて、抱き合い、両頬にキスをし合うのである。こうなったらもうどうしようもない。キスされて、仕返さない訳に行かないし、やぶれかぶれだ。もう、こちらからも積極的に握手を求めて回ることにした。それが大変な騒ぎで、大声で何かを叫びながらやるのである。私も結局 50人位と握手とキスをし合ったと思う。コンゴ、インドネシア、セイロン、タンザニア、ギニア、エジプト、ヨルダン……。その間、2、3人とは間違えて、くちびるとくちびるが合ってしまった。

後で聞いたところによると、12時を期して、外ではあちこちで盛大に花火が打ち上げられ、とてもきれいだったらしい。私達は気付かなかった。

一段落して、日本の家族に新年の国際電話をしようと思って、申し込んだが混んでいてだめということであきらめた。

結局、ここでのパーティーは午前2時頃まで続き、次はIACの建物の裏にあるインターナショナルクラブという建物に行って、そこで続きをやることになった。皆が行くので私も行くことにした。実のところ、酒を少し飲んでいたために疲れていたが、まあこれも一生に一度、どんなものか経験しようという気持ちである。

### 再びダンスを

インターナショナルクラブでは、また酒とダンスと談笑である。今度は酒は飲まなかった。立つと少しフラフラするからだ。そこで向かい合った女の人と視線が合い、互いにニッコリすると、自然に踊りだしてしまった。インドネシアの人で毒物学「toxicology」の専門家で博士の学位を持っており、ワーゲニンゲンの研究所で働いているという。今日初めて合った人だが、ずっとある男の人と一緒にだったので、その人の奥さんだとばかり思っていたら、独身だという。親戚に日本人がいると言っていた。

ポーランドの陽気な独身おばちゃん（年は40前後）も、私がイスに座していると、肩をたたいて、踊ろうと言う。もう疲れと酔いでフラフラだったが2曲ばかり踊った。途中、その人の足を一寸踏んでしまったので、謝って、「実はダンスをするのは生まれてこの方、今日が初めてなのだ。下手なのは許してくれ。」と謝ると、手の組み方が違うだとか、支え手の位置が悪いとか教えてくれた。

結局、こんなバカ騒ぎを朝の5時過ぎまでやって、私はIACに引き上げた。他にまだ沢山残っている人がいたが、とても私にはつきあいきれない。あと3時間、朝の8時過ぎまで続くというのだ。

本当に新年の迎え方というのは国によって異なるものだ。日本の正月はやはり「家族」が単位である。あんなバカ騒ぎはしない。こちらではクリスマスが「家族」単位の行事で、New Year's Eveはお祭りのようだ。日本ではクリスマスがお祭りである。

### 飲み過ぎと食べ過ぎで吐く

IACに帰る途中、ボズニャック夫妻に私達の部屋に一寸寄っていけと言われて。断りきれずに行くと、またビールを出された。もうアウトである。実をいうと、しばらく前から吐き気がして、とても食べたり飲んだりできる状態ではない。でも厚意は受けねばならない。結局、コップに一杯ビールを飲み、バナナ1本とみかん2つを食べ、訳のわからぬ話をして午前6時頃、自室に戻った。楽しいとはいつても、やはり、外国人同志とのつき合いには気が疲れる。言葉の問題と、もう一つはエチケットの違いである。こういうことをして失礼にならないか、気を悪くしないか、誤解されないか、ということにやはり気を使う。

自室に戻ってすぐ吐いた。飲み過ぎと食べ過ぎである。そして朝6時半から10時過ぎまで3時間少し寝て、その後この手紙を書き始め、11時頃と12時頃、日本の自宅に新年のあいさつの電話をかけるためにまた国際電話を申し込んだが通じない。

1時半からは日本人の福井氏の家に招待されていたので行った。「お雑煮」をいただいた。まさか「オランダ」でこんなものが食べられるとは思わなかった。その他数の子、豆腐も食べた。

カズノコはハーグでバケツ一杯を30ギルダーで売っているのを、福井氏の友人が持ってきてくれたという。オランダ人はカズノコを食べないので、ほとんどは捨てているが、オランダの日本人のためにカズノコを少量だけ作って売る店がハーグにあるのだという。その他の料理材料は、最近オランダにきた、山口氏の奥さんが日本から持ってきたものである。

1月3日（土）

アンネフランクの家と国立美術館に行く

朝10時頃、かねてから行きたいと思っていた、アムステルダムの国立美術館（ライクスミュージアム）に出掛けた。

アムステルダム中央駅から市電に乗って美術館へ向かう途中、「アンネ・フ

ランクの家」のそばを通ったので、何気なく途中下車して立ち寄ってみた。「アンネの日記」は素晴らしいが「アンネの家」を見てもしょうがない。単なる観光名所の一つに過ぎないだろうという気がして、あまり気乗りしなかったが、そのすぐ隣にある「西教会」もついでに見るなら一寸寄る価値がないでもなかろうと思った。

この先入観は、「アンネの家」に入って、しばらくして完全に打ち碎かれた。この家は、「アンネ・フランク協会」が管理しており、家の中には各種資料が展示されていた。いわゆる「ナチ」によるユダヤ人収容所での行為に関する記録写真には胸を強く打たれた。だが、なぜか、出口付近のドアの「ヒロシマの子供たち」からという貼り紙の下に掛けてあった「千羽鶴」を見た時、涙を抑えることがどうしてもできなかった。高校卒業後の浪人時代、九州の山奥の開拓農家で40日を過ごした帰りに、ヒロシマ原爆記念館に寄った時に受けた「あの衝撃」を思い起こしたからだろう。最後の部屋には「現在の人種差別」に関する資料が展示してあり、そこでアフリカから来たという黒人が「アンネの日記から30年以上もたった今、富と権力の集積はますます大きくなり、アフリカの多くの人が今も差別と飢えのために次々と死んでいくのをあなたがたはどう思うか。」と訴えていた。ナチーヒロシマーアフリカ、この三つの共通点は何か？

国立美術館は規模が大きすぎて、とても半日ですべてを見ることはできない。一通りざっと見た後、おもしろそうな所を重点的に見て、他の所は次の機会に見ることにした。

レンブラントの「夜警」は、9月に何者かによる破損被害にあって現在修復作業中で見られないとのことであつたが、今日はその作業を休んでいるとかで、運良く見る事ができた。その他レンブラントの作品を多く見た。確かにレンブラントは良い。しかし、どうしても何か納得できないところがある。完全すぎる。統一されすぎている。これはゴッホと比較すれば明らかだ。農民と田舎の風景を好んで描いたゴッホに対する、王族、金持ちの肖像画を描いたレンブラントの違いだろう。それに、どうもその前に「アンネ・フランクの家」で受けた感じがまだ残っていて、率直に絵を見る事ができない。

レンブラントを見た後は、東洋美術館で「仏像」を見て時を過ごした。デルフト焼が美しかった。

1日中立ちっぱなしだったので、帰りは少し疲れたが、気持ちの良い疲れだった。

1月14日（水）

日本人と日系ブラジル人に出会う

今週の月曜（12日）から、IACに6人の若い日本人が1週間の予定で宿泊しています（古口光夫、磯野宏一、宮尾正道他3人）。彼らは農林省の外郭団体「国際農友会」の援助でオランダの農家に約1年間研修に来ています。6人とも温室関係の農家で働いており、時々試験場での見学やら研修を受けています。IACに来たのは、隣町のEDE（エデ）で研修を受けるためです。6人のうち4人は自営で、2人は県庁の職員で、全員20代、独身です。夜、彼らと話し合っ、多くの情報を得ました。

私はオランダに来て、温室関係の試験場、研究所、展示会と主だったところはもう一度は見て回りましたが、実際の農家の温室は外からちょっとながめただけで、まだじっくりと見る機会がなく、何とかして、農家の温室を見たいものだとチャンスをうかがっていたところでした。研究所から紹介されて見に行っても、その実態に触れるには一寸不十分なので、民間ベースでコネをさがしていたところだったのです。

彼等6人は研修員として毎日温室農家ではたらいているから、実際の温室作業がどんなものか、問題点は何かをハダで感じている訳です。この機会を逃がしてはならじと早速、是非、君たちが働いている温室を見たいとたのんだところ心よくオーケーしてくれました。4人がアールスメールで働いており、4ヶ所とも見せてくれるというので、おどりがあらんばかりによるこびました。それに、他にも、見ておいて損のない温室は見せてやるというのです。

民間の商業温室（面積3ha）で完全なコンピュータコントロールされているところもあるそうです。その他、多くの情報を得ました。

最近オランダでは二酸化炭素施用は減少傾向にあること、小規模な温室経営者はどんどん倒産していること、経営は合資会社の形態をとることが多く、従業員は100人～200人位のところが多いこと。経営面積は2～5ha位。従業員の多くはモロッコ人、トルコ人、スリランカ人等であること。

彼等は、日本で10日間ほどオランダ語を習い、オランダに来て3週間オランダ語学校に通った後、各農家に入り、今は、オランダ語が大体話せるということです。オランダ語が通じなければ仕事ができない訳です。最初は大分苦労したようですが、皆好青年でバイタリティーに富んだ若者で、大いに刺激をうけると同時に、研究者を通じてでは決して得られない情報を多く入手しました。私

としては貴重なチャンスで、これを機会に何とかオランダの実際の温室経営に関して一つでも多くを知りたい気持ちです。

ところが、今日も、夕食後、彼等と談話室で話していたら、日本人的な顔をした人が、更に6人やってきました。彼等はブラジル人で全員日系2世でした。

(Keiko Kashino, Shigeru Kamimura, Koshizumi Hashi他3人)。全員ほぼ完全な日本語を話します。彼等も、国際農友会の援助でブラジルから来た自営農家の後継ぎで、5人が温室関係、1人がじゃがいも関係の農家で研修しています。そのうちの1人がアールスメアでカーネーションを大規模にやっている農家で研修しているというので早速見せてほしいと頼んだところオーケーで、1月31日(土)に他の温室見学も兼ねて訪れることにしました。いずれも好青年ばかりで、実にゆかいな気持ちになりました。彼等はブラジルの家では日本語を、外ではブラジル語(ほぼポルトガル語と同じ)を使っているが、どちらの言葉でも自分の気持ちは90%位しか表せないということで、2世同志で話しをするときは日本語とブラジル語を混ぜて使うそうです。実際、彼等同志で話すときはそうしていました。

ブラジルの家庭での生活は、ほぼ日本式で、お米のゴハンに、漬け物、味噌汁がそうで、さしみ、スキヤキ等もよく食べ、どうも、現在の日本よりも日本食をよく食べているようです。結婚相手をお見合いで決めるのがかなり多く(70%位)、それが実にうまくいっているということです。彼等の両親は、野菜を作っている人が多く、彼等はそれに加えて、温室で花を冬期栽培したいということでオランダに研修にきています。

ワーゲニンゲンのIAC(国際農業センター、International Agricultural Center)とは良くいったもので、ここに居ると、世界各国の農業関係の研究者、自営者が出入りしているので、居ながらにして各国の農業事情が勉強できるので、たのしくなります。

ブラジルの若者は皆20代の独身男女で、実に明るい性格です。ところが、彼等が、「どうもオランダの食事はまずくていかん、やはりこめのメシと漬け物でお茶づけがたべたい」などと流ちょうな日本語で言うと、奇妙な感じでした。今年の正月はモチが食べられなかったことをさかんに残念がっていました。

ブラジル人6人と日本人6人は今週中、となり町のエデ(EDE)の同じ場所で研修を受けるそうです。ブラジル人の宿舎はIACではなく、EDEにあるので10時半頃帰っていきました。その後、日本人とは11時すぎまで話しました。

彼等は、休みの日にはあちこちを旅行してあるいているようで、皆デンマーク、スウェーデン、スペイン、ギリシャ等へ足をのばしており、その旅行話を

聞いていると実にバイタリティーに富んでいます。いわゆる「貧乏旅行」というやつです。

何はともあれ、1月31日のアールスメアへの温室見学がたのしみです。

## 1月16日（金）

急な見学依頼を何とか切り抜ける

今朝、朝食前に、日本人の研修生に、研修は今日の午前中で終わり、夜には各自の下宿にもどらなければならないが、その前に、ワーゲニンゲンの温室関係の研究所を見学したいと言われた。

早速、IMAGのハイナ氏 (Mr.Heijna) の所へ行き、急で申し訳ないがこういう事情なので案内してもらえる人は居るかとたずねたところ、「だめだ」と言われた。前もって約束をしていないし、それに来週からはじまる展示会の準備で忙しくてとても時間がさけないと言う。突然のお願いだから断られても当然である。でも、何とか彼等に見学させてやりたい。

そこで次にストファー氏 (Mr.Stoffers) をたずねた。彼はとても親切なので、もしかしたら無理を聞いてくれるかもしれない。ストファー氏は、午後は出かける予定があるが、誰か他の人に頼んでやろうと行って、私を連れてあちこち当たってくれたが、次々と断られた。5～6人目にソンドレン氏 (Mr.Sondern) を訪ねて、やっとOKがとれた。午後3時に彼等研究生と研究所 (IMAG) 玄関で待ち合わせてソンドレン氏を訪ねた。彼等6人のうち2人は来なかった。後で聞くと、道に迷ったという。

ソンドレン氏は最初、皆を椅子に座らせて次のようなことを言った。「私は第二次世界大戦でビルマに行き、日本軍と戦った。オランダの兵隊の平均年齢は、39才で、日本のそれは20才だった。私が行ったときは、雨期でとてもつらい戦いで、どちらにも多くの戦死者が出た。私はとても苦しかったが、最後まで頑張った。きっと日本軍もつらかったろう。でも私は今は日本が好きである。私のところへ日本人の訪問者も多い。私は日本との友好を広げたい。」と言って序論を終わった。彼は恐らく60才近く、とても親切な人である。

その後、IMAGの中を一通り見学させてくれた。リンゴの自動収穫機、ポット（鉢）植物の自動定植、運搬装置、通路のない温室、水耕装置でポットの底から植物の根が出ないような科学物質をいれたシートの試験、サボテン類の水耕栽培、マルチング、プラスチックハウス、バラ栽培温室等々を約1時間かけ

て見て回った。彼はプラスチックフィルムの農業及び園芸における利用を研究していて、なかなかの工夫、独創があり、かなり実用的なことをしている。いくつかの文献ももらった。

その後、彼のオフィスにもどり、彼の研究を、写真を見せてもらいながら約1時間、紹介してもらった。とても親切にていねいに説明してくれる。ただし、彼等日本人研修生はオランダ語、私は英語しか分からないので彼が英語で話すと私がうなずき、オランダ語で話すと彼等がうなずくといった具合である。

その日になってからの突然の見学申し込みを快くオーケーしてくれ、しかも2時間も熱心に説明してくれたのには本当に感謝した。無理な申し込みだったが、研修生たちも熱心に聞いていたのできっと何かの役にたててくれると思う。彼等は本当に勉強熱心で頭が下がる。日本の将来は決して捨てたものではない。

1月17日（土）

#### ロシア人の苦勞話

昨日の朝、ストファー氏を訪ねたとき、そこにIACでよく見かける人が客人として先に来ていた。そのときは、何も話をしないで別れたが、今日の昼食時に話しかけてみた。IMAGに居たのだからもしかしたら温室関係の研究者かもしれないと思ったからだ。予想通り、彼は温室の環境制御の研究者で、ソビエトから11月に来たそうだ。専攻は電気工学だったそうで、温室のコンピュータコントロールに興味をもっているという。

彼は次のような苦勞話を1時間ほどかけて話してくれた。彼は、学校教育ではドイツ語を習っただけで、英語はオランダに来るまで習ったことがなかったという。スキポール空港からIACまでは何とか来れたものの、IACでは話がまったく通じず、困りきったらしい。そこでまず、カセットテープに英語を吹き込んだものを入手し、カセットテープレコーダーで英語の練習をしようと思い、テープとレコーダーを探しはじめたが、英語もオランダ語も話せないからそのことをオランダ人に（店の人にも研究者にも）どうしても理解してもらえず結局その2つを入手するのに3週間もかかってしまったという。

それから英語の勉強をはじめたが、最初は、人に話しかけられるのがいやで、IACの食堂でもいつもカウンターで外を見ながら1人で食事をしていたという。12月の中頃からどうやら片言が英語で話せるようになり、最近やっと大体



の話はできるようになってきたという。英語を習い始めて2ヶ月半でこれまで話せるようになったのだからたいしたものである。先日の日本人の若い研修生もそうだったが、必要を痛切に感じれば、外国語というものは半年間くらいで何とか用がたせるようになるものらしい。今でも毎日英語のテープを聞いているという。

現在は、アドリー、ストファー、ハイナ氏等に質問しながら文献を読んでいるという。アドリーやストファー氏が親切なので助かると言っていた。

ただ、最初は英語が話せなかったのも、彼等も家には招待してくれず、いつも1人ぼっちだったという。最近やっと彼等は家に招待してくれるようになったという。

ソ連の現在の温室面積は約8,000 haだという。日本のそれが約20,000 haだから、かなりあることになる。ただ、ソ連では雪が多く、困っていると言っていた。彼はレニングラードの研究所にいるという。私の方も簡単に自己紹介。お互いに今後も温室関係の情報を交換し合おうとあって、別れた。

1月19日(月)

### 農業機械化展示会

朝7時に食事をすませ、アムステルダム町のはずれにあるライ国際展示場(RAI Gebouw)に、農業機械化展示会を1人で見に行った。この展示場は床面積4haで柱が1本もない。オランダでは、昨今、空が明るくなり始めるのは8時半を過ぎてからであるから、真っ暗なうちに出かけたことになる。会場には9時半頃到着した。

まず、会場の前で、5~6人の若者が、サンドウィッチマンのように身体の後後に板をぶらさげて何かを訴えている。早速、その1人に近付いて、君のそのカンバンには何が書いてあるのかと聞くと、「農業の機械化、農産物の工場生産は将来の方向として間違っている。有機農業をもっと真剣に考えるべきだ」と書いてあるのだといていた。大学生かとなぞねると、「そうだ、法律専攻の大学生だ」といった。

この展示会は、温室関係の機械化展でなく、畑地農業の機械化展である。専門的なことは別にして、まず、会場で感じたことは、見学者に、子供(小学生、中学生、高校生、大学生)、女性、それに若い2人連れ、中年の2人連れが多いことである。そして、会場の係員(説明者)が子供や女性に熱心にしかもていね

いに説明しており、聞いている方も熱心である。何か、オランダ国民の農業に対する姿勢あるいは受け取り方、および国民性というものを感じた。日本の農業機械化展ではどうだろうか？

私はじゃがいも、トマト等の選果機、マルチング、フィルム of 自動被覆機、穀物類の乾燥機等を中心に4時間ほど見て回った。

遅い昼食後、会場を出て、かねてから気になっていた東京銀行アムステルダム支店に、先日(昨年11月)旅行者小切手を早速再発行してもらったことと、その後、その小切手が出てきたので、その小切手を返却することをおかねて、お礼を言いにいった。運よく、その時お世話になった西さんに会えたので、重ねてお礼を述べて帰った。

3時頃になってしまったので、ワーゲニンゲンに帰って仕事をするには遅すぎるし、そのまま帰るには早すぎるので、また、国立美術館に寄った。今日は、中世のキリスト教関係の彫刻、やき物、家具調度類等をみたが、朝から、立ちづめ、歩きづめだったので、帰るころには足がだるくなった。

## 1月21日(水)

### 温室研究者と出会う

昼食時にIACにもどるとベルギーのニーセン(Nisen)教授から、以前私が出した手紙の返事がきていて、2月2日に彼の研究室をたずねることになった。高倉さんが送ってくれたインスタントラーメン1箱が届いた。ありがたいことである。

昼食時に長身、白髪の紳士と一緒にになった。IACで見知らぬ人と同席したときは、国と仕事の内容をたずねることにしている。もしかしたら、たのしい、あるいは有益な話を聞けるかも知れないからだ。実際IACの食堂で食事をする人の90%は農学関係の研究者だから共通の話にはことかかない。もし、仕事の話がつまらなかったら自国の話や食物の話をすればよい。

長身の紳士はオランダの人だったが、温室の微気象と温室環境の適応制御を研究しており、今日は農業大学にコンピュータシミュレーションの講義をしにきたという。余りにも私の仕事に似ているのでおどろいた。早速私も自己紹介し、話がはずんだ。名はダイクスホールン(J.J.van Dixhoorn, Dept.of Physics & Meteorology, Section of Measurements, Control & Systems Engineering)で同僚にポット(S.A.Bot)とウディンク・テン・カーテ(A.J.Udink ten Cate)がいて、彼等も同じことを研究しているという。3人ともはじめて聞く名前だ。同じことを

研究しているのにどうしていままで名を知らなかったのか不思議だったがとにかく情報を交換し合った。そして、今夜8時半にまた会ってもっと話をしようということになった。

8時半にIACのホールで待ち合わせて、また話をした。最初私の方が40分ばかり私の仕事を文献や原稿を見せながら紹介し、その後彼の仕事を紹介してもらった。

私が彼等の名前を知らないはずで、彼等は1年程前から研究をはじめたばかりで、3人共もともとは電気工学者であるという。話を聞いているとまだ初歩的な段階のようだ。1人はパブリカ（ピーマン）の地下環境の最適化を、他の1人は、温室環境の微気象モデルを、米国DEC社のコンピュータPDP11の会話型言語で研究しているという。そんなことなら、日本の高倉氏がやっているよといって文献をいくつか教えておいた。そのうちのいくつかはすでに読んだことがあるといっていた。10時半まで色々と話した。近いうちに彼の研究室を案内してくれるという。

彼の話では、オランダは、ミニコンピュータが商業温室で実際にすでに使われているという。完全に作動しているのは1ヶ所だけだが、昨年1年間で1セット約50,000ギルダー（約600万円）のミニコン（8kB～16kBの記憶容量）が20セット、温室の環境コントロールのために売れたという。そして、来月3日からロッテルダム近郊のブライスバイクで開かれる園芸展示会で約30セットのミニコンが温室用に売られるだろうと予想されているという。各ミニコンは大体8区画を独立にコントロールする入出力装置をもっているという。完全に商業化されそうなきおいだ。ただ、オランダと日本では今のところ、温室面積の規模が一般的にはかなり異なる。彼等は早く制御システムを完成させて実用化させたいといっていた。ナールドバイクの試験場のコンピュータコントロール温室は彼等の研究成果を待っているのだという。日本で有名なデルタエックス(x)コントローラーは現在商業的にはほとんど使われておらず、IMAGでも使用をあきらめたといっていた。作物からの蒸散を促進するのはけっこうなのだが、副次的な悪影響が大きすぎて農家は使いたがらないという。

高倉氏の山登り法の説明のついでに、私の行動モデル法の説明も一寸したら、びっくりしたようだった。彼等はそのようなことは考えていなかったらしい。

温室のコンピュータコントロールの問題点はただ一つ。だれもコンピュータに何をさせたら一番よいかを確実に示していないことだ。それでもオランダでは農家がどんどんコンピュータを実際に使ってゆく。経営規模の相違が一つ

あるだろう。他にも違いがあるのだろうか？

最後にオランダの話を少しした。週末は美術館に絵を見に行くことが多いと思ったら、アーネム(Ahnem)とユトレヒト(Utrecht)の市立美術館は知られていないがとても良いものがあると教えてくれた。次々と知人が増えていき、うれしい。

#### わたしの顔写真が雑誌に掲載される

コーヒブレイクの時に、CABOにいる大学院生（給料はもらっているが学位を取るための研究をしている博士課程大学院生）が「古在の顔がワーゲニンゲンの農業大学の雑誌に出ているぞ」といって雑誌の切り抜きを持ってきてくれた。昨年末12月15～19日のワークショップの記事だった。「私の写真が雑誌にのったのはこれが初めてだ。これを日本に送れば、私もオランダで少しは勉強していることもあったことを理解してもらえよう。というのは、私があちこちの名所の絵はがきを日本に送るので多くの人が私はオランダで観光旅行ばかりしていると信じている」と言ったら大笑いになった。この大学院生キース(Kees Spitters)には、先日、日本語の研究論文を英訳してやった。そのせいか、明日、夕食に招待されている。もう結婚していて子供がいるという。

#### 子供が誕生したとき

今朝、Fritz（フリッツ）、W.T.Penning de Vriesに子供が生まれたというので午後のティータイムに一寸したお祝いを仲間でやった。子供が生まれたときは、その男親が同僚あるいは近所の人にBESCHUIT MET MUISSJES（Biscuit with small mice）（直訳すると子ねずみがのったビスケット）を配るのが習慣とかで、それを食べた。直径5cm位のビスケットの上にバターをぬり、それにピンクと白の色をつけた砂糖で焼米をくるんだものをのせた、簡単なものだ。

オランダではお産のその日のうちに病院から自宅に帰る人が50%位だという。そして、産後10日間は保険で家政婦さんを無料で頼めるといふ。また、母親と子供はその日のうちから別室に寝るらしい。日本では1～2才まで、親と一緒に寝るのが普通だと言ったらおどろいていた。

実は、今日は、午前中のコーヒタイムにも、子ねずみがのったビスケットを食べた。ここで働いている女の人に子供が生まれたからである。他のオランダ人も、1日に2回子ねずみビスケットを食べたのは今日がはじめてだと言っていた。

フリッツは来年から2年半の間アフリカのマリという国に研究目的で滞在することになっているので、その子供は幼児期をアフリカで過ごすことになる。以前彼の奥さんと話したとき、これは大きなアドベンチャーであると言っていた。新生児の名はFreek と付けたという。Freekに幸あれ。

### 子供との国際親善

夕食後7時すぎに談話室で話していると、「ミスターコザイ、受付に来てください」というアナウンスがあった。行ってみると50才位の男と10才前後のかわいい女の子が私を待っていた。どういう訳か知らないが、その親がいうには、「学校でどこの国の言葉でも良いから、外国語を10語位ノートに書いてきなさい」という宿題が出て、その女の子が日本語を知りたいというので、きっとIACに日本人がいると思って訪ねてきた」という。さっそく、よろこんで「山、川、中、大、日本、東京」等のやさしい漢字と「私はオランダが好きです」という文章を一つノートに書いてあげ、意味と発音を教えてやった。するとその親子はとてもよろこんでいた。そして帰りに記念にといってお土産のボールペンをくれた。「国際親善にも色々あらーな」である。

### オランダのストーム

今日で4日続きの強風（オランダ人はストームといっている）である。風速秒速30~40mで小雨まじりである。これでは風車がよく回る訳である。自転車をこいでいてもハンドルをとられそうになる。

でも、強風も小雨もあまり気にならない。というのは、冬至を1ヶ月すぎて、段々日が長くなり、空が明るくなってきてくれているからである。冬至前後の1ヶ月間は本当に暗うつな天気だった。12月なかばから1月中旬までの約1ヶ月間、青空を見たことがなかった。オランダでは、冬至（12月23日）には、正午でも太陽高度は15度（大阪では32度）であり、日本の冬至における午後3時頃の太陽高度に相当する。つまり、オランダでは、冬期、日本の冬の曇天時における午後3時の明るさ以上に明るくなることはないのである。言い換えれば、オランダでは冬には、夕方と夜のみがあり、昼間というものはない。これは人々の精神をかなり圧迫する。しかも気温の昼夜の差がとても少ない。12月には最低温度が-7℃~-10℃になったが、1月になってからは氷が張らなくなった。ところが日中の最高気温は5℃前後でそれ以上あがることはない。

そんなに暗い天気なのに、オランダ人はどういう訳か部屋の中を暗いままにしておくのが好きで、なかなか電灯をつけない。まことに忍耐強い国民であ

る。この国民性だからこそ、あれだけの干拓地を何世紀もかかって作り上げるのも可能であったろう。

1月22日（木）

#### 夕食に招かれる

夕刻、キース(Kees Spitters) 宅を訪ねて夕食をごちそうになった。彼は園芸作物の育種が専門だが、冬期はドワイト氏の指導で作物の種間競争を理論的に検討している。彼は大学（5年制）を出て3年目で、月給約1800ギルダで、博士論文を書くための研究のみをしている。

給料をもらっていることをのぞけば、日本の博士課程の大学院生とほぼ同じ立場にある。学生の指導をしている助手（たとえば、ヤン）とは地位が異なり月給も少ない。ヤンの月給は2400ギルダである。

彼は園芸作物のことはもちろん温室のことにも詳しく、色々と知ることができた。そして、彼は私に、是非、温室会社（農家の栽培温室ではなく、温室を作って売っている会社）も見に行くように勧めてくれた。温室関係のオランダ語の本も貸してくれた。

彼は奥さんと1才3ヶ月になる子供がいる。私がお土産代わりに英語で書かれた日本料理の本とコケシを持っていったので、料理、食物の話が大分話題となった。日本料理の「見た目の美しさ」には少しおどろいていたようだ。その他、政治の話、教育制度の話、大学、学生運動の話など、なかなかゆかいな夜を過ごした。

1月24日（土）

#### 専門外の勉強

昨夜は8時過ぎより、12時頃まで福井氏の家で坂本氏と訪ねた。農業の話、オランダの話、大学教育の話などをする。帰り際、「土地利用法」に関する彼の書いた原稿をわたされ、読んで意見を聞かせてくれと言われた。更に、1月初旬の日本の新聞を借りた。

昨日の夕方やっと風が弱くなった。昨日は、みぞれとあられと強風で大変な天気だった。今朝起きてみるとうっすらと雪が積もっていた。

今日は午後からIACで外国人学生サービスが主催する「オランダ農業の諸側面の紹介「Aspects of Dutch Agriculture」というプログラムに参加した。参加者は100人位でオランダの各地から外国人が集まってきた。日本人参加者は私1人であった。このプログラムの一部としていくつかの研究所を訪問した。ワーゲニンゲンに住んでいても自分の専門に関係ない研究所には行く機会があまりないのでちょうどよかった。明日は、午後からスライドを使つてのオランダ農業の紹介が2時間半程ある。夜は、この参加者のために、8時半から人形劇があり、10時から午前3時までパーティがあるが、私は仕事がかたまっているのと少し疲れているので参加しないことにした。

1月31日(土)

#### 待ちにまった温室見学に興奮

現在、夕刻7時すぎである。私は今、ユトレヒトからベルギーのブリュッセルへの車中にある。今日は楽しい1日を過ごした。

今朝は8時過ぎにIACを出てアールスメーアに向つた。かねてから約束してあった、オランダのアールスメーアの温室農家で働きながら研修している日本人の若者達に温室を見せてもらうためである。

あちこちの温室を見て回るには自動車があると都合がよいので、先日、IACにいる日本人の坂本氏に車を運転してくれないかと頼むとOKしてくれた。ところが、その後、私が温室見学をすることを知った他の日本人(松浦、小島、福井および福井氏の子供2人)も一緒に行きたいと言い出したので、計7人、車3台で出発した。アールスメーアで案内してくれる日本人が待っているの、その人達をのせるために、私が松浦氏にも車の運転を頼んだ。日本人で車を持っていないのは私と小島氏だけである。

実は私は、昨夜から、アールスメーアの実際の農家の温室をじっくり見られるというので少々興奮気味で、今朝は朝5時に目を覚ましてしまった。小学生が遠足のときの朝に早く目が覚めるのと同じである。

ワーゲニンゲンからアールスメーアまでは車で1時間と少し位の旅である。私は松浦氏の運転する車に同乗した。彼は実に気のよいスマートな28才の若者であるし、人の頼みを快く引き受けてくれる。ほぼ10時に、待ち合わせたアールスメーア市役所の横にあるホテル・ファン・デア・ホースト(Van der Phorst)のコーヒーハウスに着いた。そのホテルには5人の研修生が待っていてくれた。も

う1人の研修生磯野広一氏はカゼで寝込んで来られないということだった。それにもう1人、ブラジルの研修生が働いている所のカーネーション温室（切り花では品質、量、規模とも世界一の温室だという）を案内してくれるはずだったが、今日は土曜日で、その温室には誰も来ないので、勝手に案内されては困るといわれたということで来なかった。残念であった。

午前中は第一に佐々木三郎氏の働いているFa-gebr.Man（Man氏兄弟の会社）（住所 Oosteindenweg 15）でシダとシクラメンを見た。建設後10年以上は経ている温室で、暖房は天然ガスを利用した温湯暖房である。マン氏の温室は3カ所に分かれているということで、ここは約4500m<sup>2</sup>程度であった。この辺の暖房はほとんどが天然ガスを利用し、値段は1m<sup>2</sup>当たり約8～10セント（10円～13円）で重油、軽油等の値段の約1/3だという。

シダ類の胞子をまいて、出芽させ、それを二度ばかり移植して草丈5cmばかりに育て、それを世界各国に輸出するという。シダの苗が見渡す限りで圧倒される思いである。その他、ペゴニアの苗を平均1週間に6万本出荷しているという。

アールスメアはこれで3回目だが、実際の農家は今回がはじめてである。私は予備知識がある程度あるので特に驚くことはなかったが、温室のことをよく知らない松浦、小島、福井氏等はその規模の大きさと花のきれいなことにただただおどろいていた。栽培技術、環境調節技術の詳細については写真フィルムに収めたので、ここでは省略しよう。

2番目にはタス(Tas) 兄弟株式会社に行った。ここは中島氏が研修しているところで規模は比較的小さく、シクラメン専門で、年に300万粒の種子を採り、種子および苗を出荷する。ここでは社長が案内してくれた。社長といっても前社長（父親）が早死したとかで20才で温室経営をはじめた人で、現在は31才だ。特におどろくべきようなことはないが、それでも栽培上のこまかいことに実によく気を配っている。オランダ人らしいケチ精神（合理性）があちこちにあらわれている。たとえば、かん水用の水は雨水を集めて使っている。育苗箱はほとんど発泡スチロール製のものだが、木箱も少し使っており、木箱が腐って使えなくなるまでは今の木箱を使うのだという。父親の代から何十年もかかって自分で育種選抜を根気よく繰り返し、ほかでは播種から苗として出荷するまで13ヶ月位かかるのにここでは11ヶ月で出荷でき、しかも、ほかよりやや低温でよいという。

シクラメンは高温ではいけないので、どんな厳寒期でも天窓をほんの少しだけ開けて絶えず空気を動かしている。他の温室でも温室内空気のかくはん用の



ファンをずい分見た。

遅い昼食後、今度は渡辺富士雄氏の働いているEVECEENS社を訪ねた。ここはアールスメーアの育苗関係の温室では規模が2~3番目ということで、従業員が120人という。休けい室、娯楽室の完備した立派な「会社」である。温室自体も近代的だ。この会社の温室は全部で6.5 haで、それが8カ所に分散しているという。私達はそのうちの2カ所を見た。

プリムラ、セントポーリア、シクラメン等が1棟約800m<sup>2</sup>で11連棟の温室で咲いており、見渡す限り、花、花、花である、温室のことを知らない人もそのきれいなことにおどろいていた。シクラメンの匂いがどうにかなりそうに強烈である。ここではシクラメンだけで年間1000万粒採種し、その中300万粒を自家消費し、700万粒を出荷しているという。現在51品種のシクラメンを栽培しており、育種もしているという。温室内には運搬用トロックのレールがあり、その他、省力のための努力が払われている。ポット、運搬箱等がすべて規格化されているのが強みである。

二酸化炭酸ガス施用装置を設置してあるが、ここ2~3年は使用していないということだった。不使用の理由を帰国までに解明したい。

私が1日中夢中になって温室内外をなめるように見回し、質問を絶えずし、写真をパチパチ撮り、動き回っていたので皆からキチガイ呼ばわりされた。キチガイと言われようと何と言われようと私は温室研究者であり、温室についてはすべてを知りたいのである。何回でもまたここに来てみたい。できることなら2週間位住み込みで実際に働いてみたい位である。

若社長タス氏はアールスメーア市議会の労働党議員で週2日間は議員としての活動をしているといていた。そして、熱心に彼の人生論を30分近く話してくれた。

オランダでは、人家はもちろんだが、温室でも温床でも機械でもほとんど保険に入っている。温室のガラスがわれても保険で払ってくれる。

花の値段も最低価格を保証してくれる。花、野菜の試験場、研究所は大体半官半民で、生産者が毎年決まった額を研究支援費として払っているので試験場は栽培者本位の研究をしてくれる。

今日の見学で一番の収穫は、アールスメーアの温室で1年間近く働いた日本人青年の生の体験談を聞いたことであろう。一寸したこまかいことでも、そこで働いている人でなければ決して分からないことが多くあった。日本に帰ってから、出来たら連絡をとりたいと思う。

EVELEENS社には大学、農林省のえらい先生、農協団体がよく見学に来る

が、まったく皮相的な見学で、研修生はアタマにくると言っていた。仕方がない面もある。というのはやはり語学の問題があるからだ。日本から来る人の多くはオランダ語、英語、ドイツ語、フランス語のいずれもよく理解できないから、温室見学に来て、どうせ理解できない案内者の説明を聞いていても仕方がないというので、勝手に温室内を歩き回り写真をパチパチ撮ってばかりということになる。案内者は自分の説明を聞いてくれる人はいないし、しかも勝手にあちこち歩き回られてはアタマにくる。そこでその怒りが日本人研修生にぶつけられるということになる。

### ベルギーのブリュッセルのホテルに泊まる

ここまで書いた時に、列車がブリュッセルに着いた。ホテルは前もって駅の近くのアルパートホテルに予約しておいたので真っすぐそこに向かう。非常に立派なホテルだ。古びたホテルだが格式、調度品等は「こっとう品」的でとても落ち着いている。風呂に入って寝ることにしよう。

このホテルは、観光案内書に出ていたホテルだが、最初ワーゲニンゲンから自分で電話したときはどうしても通じず、受付係の人に頼んだ。そうしたら番号が間違っていると言って、掛け直してくれた。ところが私が電話に出ると相手はフランス語しか話さない。そこでまた受付係の人に変わってもらったら、相手は銀行だった。もう一度番号を調べ直して電話をかけ直してもらった。

## 2月1日(日)

### ブリュッセル市内見物

朝10時前にブリュッセル市内見物の観光バスに乗り、サンミシェル教会、独立記念塔、グラン・プラス(王宮広場)、小便小僧、王宮、レース編み工場、裁判所等を一巡する。観光バスでは見方が通り一遍になってしまうので、正午過ぎに、古美術館の裏にある「アンティーク(こっとう品)」の野外市場のところでバスから降りてもらい、後は1人で見て回ることにした。

こっとう品を見て歩くのはオランダに来てからふえた楽しみの一つだ。その後、ルーベンスの絵を見るために古美術館に行く。絵というものは、複製で見ても駄目だということを、ルーベンスの絵を見てつくづく感じた。画集で見たのとは受ける感じが根本的に異なる。ルーベンスの絵は、宗教画にしては珍しくダイナミックで、しかも明かるい。また威圧感を感じさせず、近づいていき

たくなる親しみを感じる。3m×4mあるいはそれ以上もあるルーベンスの大作をいくつも、しかも、ほとんど人がいない部屋で、心ゆくまで見ていられる幸福をつくづく感じた。ところがルーベンスが描いた肖像画はどれもいただけない。いやいやと、またやたらとリアリスティックに描いているようだ。

この古美術館で、偶然、ヨーロッパ近代シンボリズム画家展をやっていたので、そちらもついでに見た。ここでゴッホの絵を見られるとは思わなかった。得した気分である。

その後、少しうす暗く、うすら寒くなったブリュッセルの町を、先程一度見たグラン・プラスへ戻った。もう一度ゆっくり見たいと思ったからだ。地図を持っていなかったの道に迷い、何度も道をたずねた。古い町なので道が曲がりくねっていて、なかなか思うように目的地に着いてくれない。ところが、だれに道をたずねても返ってくるのはフランス語ばかりだ。10人位の人に聞いて英語で答えてくれたのは1人だけである。フランス語でペラペラやられるとシャンソンを聞いているようで耳当りはよいが、まったく理解できない。それでも最後にはにっこり笑って「メルシー（ありがとう）」と言わなければならぬのがつらい。町には雪がいたるところに残っていて、道を歩いていると寒くて鼻水がたれてくる。でも、最後には何とか目的地に着いた。グラン・プラスは「小さなパリ」といわれ、中世からのベルギー繁栄の面影を印象的に物語る建造物に取り囲まれた広場である。ここでは小鳥の野外市場が開かれていた。

オランダのロッテルダムから列車でわずか2時間の距離にあるブリュッセルなのに、人々はフランス語を話し、人々の服装、態度ががらりと変わり、町並み、食物もがらりと変わっている。パンはほとんどが「フランスパン」である。

歩き疲れたので一度ホテルに戻り、しばらく休憩したのち、夕食を摂りに町にでる。その後またしばらく町をブラブラする。このホテル (Hotel Albert) ではバスつきシングルを予約しておいたのだが、ホテルの都合でツインの部屋をシングルと同料金で泊めてくれたので部屋が広く、くつろげる。古いホテルらしく、家具調度類はとてもしっかりしている。IACのホテルはシャワーだけなので、ここで3ヶ月ぶりにゆっくりと湯舟につかって身体を温めることができた。

2月2日（月）

### ニーセン教授に会う

朝8時30分にホテルを出て、ブリュッセル北駅に向かう。ホテルを出るとき、フロントの人が「ドウモアリガトウゴザイマシタ」と日本語で言ったのに、思わず英語で「こちらこそ、とても感じのよいホテルだったよ」と言い返してしまった。

8時50分のルクセンブルグ行き列車に乗車し、9時24分にジャンブルー(Goumbloax) 駅に着く。最初、駅まで迎えに来てくれていた人がニーセン(Nisen)教授かと思っていたら、何を話しかけてもフランス語で答えてくる。変な人だと思っていたら大学の運転手であった。ニーセン教授とは5年ほど前から文通や文献交換を何度もしていたのだが、顔をまったく知らなかったのである。

ニーセン教授は私を早速自室に招き入れてくれて、年代順に彼の仕事の概要を紹介してくれた。私は大体彼の仕事をすでに知っていたので別に驚かなかったが、考えさせられたのは人と人とのつながりである。

彼は20年前にワゲニンゲンの園芸工学研究所 (IMAG) にしばらく滞在しており、そこでIMAGのストファー氏と一緒に温室内の光環境のことに研究していたと言う。そのときの指導者が、IMAGの現在の副所長であるハーミング (Germing) 博士である。それがきっかけでニーセン教授は温室内の光環境の研究に没頭しはじめ、次に西ドイツのハノーバー工科大学でシュルツ (Shultz) 氏と一緒に仕事をしている。シュルツ氏も温室内の光環境を長い間研究していた人である。

つまり、ヨーロッパ大陸で温室の光環境を研究している第一人者達は皆、人間的つながりがあることになる。道理で何かしら共通点があると感じられたはずだ。私はそれら有益な情報ををまったく知らずに1人で研究していたことになる。

私は日本語と英語を少ししか理解しないのに、ニーセン教授はフランス語で、ストファー氏はオランダ語で、シュルツ氏はドイツ語で論文を発表するのだからいやになってしまう。

ニーセン教授が、ドニユー (R. Dogniaux) 氏と共著で最近 (1975年) 出版した「Traite de l'eclairage naturel des serres et abris pour vegetuax」は、野菜温室内の光環境その他に関する詳細な記述をした専門書である。この本はベルギーの王立気象学研究所から発行され、気象学者、物理学者、栽培学者を集めた温室内

自然光に関する国内の委員会の成果をまとめたものである。ニーセン教授は「Mr. Kozaiの論文を三つ程引用させてもらっているから」といってサイン入りその本をプレゼントしてくれた。

彼は、オランダとベルギーの気象条件、経済条件を比較し、オランダで普及しているフェンロー型およびその他の連棟型温室が決してベルギーでは最善ではないことを力説して、ベルギー独自の温室形態構造を開発せねばならないことを熱心に説いた。まったく同感である。ベルギーはオランダより冬期の風が強いこと、積雪が多いこと、暖房費が高いことが主たる相違点だと言っていた。

約1時間話した後、ニーセン教授と、彼の共同研究者デルツア (Deltour) 教授を訪ねた。彼は物理学科の教授で、コンピュータによる温室光透過計算および物理測定関係を担当している。まだ若く、ヒゲをたくわえた血の気の多そうな人である。彼は拡散ガラス等の拡散の程度を計測する手製の3次元ゴニオフォトメーターを実演してみせてくれた。光源としてはレーザーを使っている。物理屋らしいまとめかたである。30分ばかりくわしく説明してくれた。

大変興味深かったと丁重にお礼を言うと、お前は、私がこんなに説明したのに何も意見はないのか、おれはお前と討論するために待っていたのだと言われた。「それでは」と思って、日頃感じている彼等2人の仕事の進め方について、および「拡散ガラス利用」の短所について私の意見を述べたところ、2人共ムキになって反論してきた。せまい実験室の中で、3人で大声でわめきちらしながらしばらく議論した。

結局、「曇りの日の多いベルギーでは拡散ガラスの使用は不利であること、棟高の高い単棟温室での拡散ガラスの使用は不利であること、および拡散ガラスは入射角が大きい直射日光に対して透過率が低いこと」の3点からなる私の見解を彼らは認めた。そこで、「とは言うものの、冬期、晴れの日が多い日本では、あなたがたの研究はとても役に立つよ」と助け船を出すと、「そうだ、私達は日本の人達のために研究しているのだ」と言って大笑いになった。

その後、学生食堂で食事し、喫茶店でお茶を飲んだのち、近くにある園芸技術学校の敷地に建設中の温室を見に連れていってくれた。園芸技術学校の生徒の実習用と研究用の温室からなるこの温室の床面積は6000m<sup>2</sup>で、環境制御と管理は集中化されていた。各部分を丁寧に説明して回ってくれ、しばしば立ち止まって議論した。ニーセン教授は園芸作物の栽培にもかなり詳しい。ただし、最近はおちこち講義して回らなければならず、研究的仕事がなかなかできないと言っていた。彼は、国際園芸学会の幹部であり、私は青二才なのに、1日を割

いて、親切にしかも熱心に彼の仕事を紹介してくれたことが、とてもうれしかった。今日の見学はきっと将来大きな礎石となると思う。私自身の仕事の位置付け、世界の研究レベル、その人間関係、研究にかける情熱、等々。しかも、それが決して豊かな研究費や研究施設からばかり生まれているのではないことも理解した。夕方、彼は駅まで見送ってくれた。再会を約束して別れる。

## 2月4日（水）

### 園芸展示会見学

IMAGのファンミュアス(van Meurs)氏の運転する車にアドリー(Adrie van der Kieboam)とソビエト・レニングラードの温室研究者オーダチェンコ(Oadachenko)氏および私が同乗し、IACを8時半に出発し、ロッテルダム近郊のブライスバイク(Bleiswijk)のせり市場で開催されている園芸展示会を見に行った。この展示会はオランダの温室園芸の展示会としては最大規模のもので、約200社が参加し、2月3日から2月7日までの5日間開催される。展示場は三つある大きなせり市場の建物の一つ（面積2.2 ha）を使っている。昨年11月アールスメーアでみた展示会の規模を数倍大きくした感じである。全部熱心に見て回ったらとても1日では全部を見られないので、午前中にパンフレット・カタログをもらいながら2時間かけて全体を大急ぎで見て回り、午後は午前中見たものの中から、おもしろそうなものを説明係の人に色々たずねた。私は温室構造、換気装置、環境制御装置、放射暖房、移植機械等を中心に見て回った。昨年のアールスメーアの展示会で大体のことはのみこめていたので特に驚くことはなかった。それでも、これだけの規模の展示会を開くことができるオランダ園芸業界の底力におどろきを感じる。予想見学者数は4万人だそうだ。

環境の自動制御関係だけでも18社が参加し、そのうち私が見て回った中で少なくとも5社がミニコンピュータを使用した環境制御を実演していた。その中の2社はアールスメーアの展示会にも参加していた。私はアールスメーアで係員にかなりしつこく説明を求めたために、私の顔を覚えていた説明員に私が質問し始めたとき、「あまりくわしいことは聞かないでくれ」と逃げ腰になられてしまった。説明員があまり専門的なことを知らないのが残念である。

日本の商社員を何人か見かけた。外国からもこの展示会を見に来た人が数多くいるようで、英語、ロシア語、ドイツ語等々があちこちで飛び交っていた。オランダ温室園芸の目標は徹底的な省力化と自動化にあるようだ。機会があっ

たら一度くわしく書いてみたいが、どうもオランダの温室農家の体質は、日本のそれとは大分異なるようだ。夕方7時半にIACに戻る。

集めた資料からいくつかのデータを以下にメモする。

暖房に天然ガスを利用している温室農家は全体の75～85%。天然ガスはきわめて良質で、排気ガスにはイオウ、エチレンが少なく、CO<sub>2</sub>施用に適する。一温室企業当たりの平均温室所有面積は、オランダ全体で4,600m<sup>2</sup>、ウェストランド地方で7,500m<sup>2</sup>、フェンロー地方で3,500m<sup>2</sup>である。

園芸業関係の労働者は7万人で、そのうち6万人が常勤、1万人が季節労働者。そのうち温室野菜関係の労働者1万5千人。労働者の労賃30,000ギルダー／人／年(1,900労働時間)。主要温室野菜はトマト、キュウリ、レタス、ピクルス用キュウリ(Gherkin)、ピーマン。温室形態は間口3.2 m、軒高2.5 mのフェンロー型が主体だが、最近急速に間口6.4 m、または9.6 mのものがふえている。花き用の温室では間口8mのものがある。間口32mのフェンロー型温室のコストは32～38ギルダー／m<sup>2</sup>、間口6.4 mと9.6 mのものでは32～38ギルダー／m<sup>2</sup>、間口8mでは40～50ギルダー／m<sup>2</sup>。環境制御温室を含めれば、75～120ギルダー／m<sup>2</sup>。

全コストのうち、33%が建屋、22%が暖房、17%が附属建築物、14%が制御装置、8%が土地、5%が機械器具類。(以前書いたのと少し数字が異なるが)天然ガスは11～16セント／m<sup>3</sup>で、その他4,500ギルダー／年の基本料金を払う。コンピュータを利用したコントロールシステムでは換気窓の開閉を、外風速と外気温に関連させて操作するようにしているものが多い。

## 2月5日(木)

午後2時半から3時半まで、お茶の時間を利用して、CABOの前の池でアイススケートをした。氷の厚さは10 cmくらいである。スケート靴はヤンから借りた。数度ころんだ。

## 2月6日(金)

生タマゴをぶつけられる

昨日、昼食後、IACからCABOへ向かう途中、小事件に出会った。私がいつもの通りに自転車によってブルチェ(Buurtse)通りを行くと、ハーニエス(Harnjes)

通りとの交差点で、1人の少年が私の方へ駆け寄って来て、2mも離れていない距離から、いきなり私の顔に何かをおつけた。それは私のメガネの右側レンズにおつかった。雪のボールかと直感的に思った。とにかくメガネが曇って前が見えなくなったので、ブレーキをかけて自転車をと止めた。そして私のコートを見ると「生タマゴ」でベトリと汚れている。私の顔もタマゴの黄味で汚れている。

少し腹が立ったので、自転車をそこに置き、おつけられた場所に戻ると、少年が2人立っている。「なぜ、タマゴをおつけたのか」と聞くと、彼等は英語を話さないのでは何を言っているのか分からない。しかし、どうも、おつけたのは私達ではない、おつけた人はあちらに逃げたとお言っているらしい。一生懸命ある方向を指さしている。私の顔がタマゴで黄色くなっていたせいとか大人の通行人が2人寄ってきた。彼等にも英語が通じない。でも事情を少年2人からお聞いたらしく、私に警察に行くことをさかんに勧める。

通行人の1人が少年の1人にタマゴを投げた少年の住所氏名を聞き、それを紙に書いて私に渡してくれた。一寸奇妙に思ったのは、この少年2人はタマゴを投げた少年と友達関係にあり、いわば共犯なのに、通行人と一緒にさかんに私に警察に行くことを勧める。日本だったら「やくざ同志の義理人情」というやつで友達の名前を明かしたとらならないところだろう。

人が通るたびに英語が話せるかどうかを尋ねたが適当な人が来ない。別にタマゴを投げられただけで警察に行く気は毛頭なかったが、理由はどうしても知りたかった。「私と知っていてやったのか」「日本人あるいはアジア人と知っていてやったのか」、あるいは「まったく偶然に私を通りかかったのか」、そして特別な理由があるかどうかを知りたいのである。15分ほどオランダ語と英語のチャンポンでやってみたが、どうもよく分からない。そのうち、友達の一人が「遠くにタマゴを投げた人が見えた、木の蔭に隠れている」とお言うのでその方に近づくと、14~15才の少年が隠れていた。オドオドしている。そこからひっぱり出すとさかんに「アイ アム ソーリー (ごめんなさい)」をくりかえす。かさねて理由をたずねるが何を言っているのか分からない。さかんに「警察に行きます」とか「クリーニング代を払います」とか「コートを洗います」「ごめんなさい」とかをくりかえすだけである。

そこで、私の手帳とボールペンを取り出し、オランダ語でいいからタマゴを私に投げた理由を書けと迫ると何かを2行ばかり書いた。あとでヤンに意味を聞くと「ふざけてやった」とおいうことらしい。総合的に判断すると、「人種差別その他の特別な理由」はないようで、単なる不良少年あるいは悪童のいたずら



らしい。多少悪質ではあると思ったが、一応、相手が出て来て、あやまったし、住所氏名を確認してあるのでその場を引き上げることにした。

少年達と別れる前に、通じても通じなくても私の気持ちだけは伝えようと思ひ、英語で「私は君を警察に連れていくつもりもないし、クリーニング代を払わせるつもりもない。しかしそれは私が君の行為を許したことは意味しない。二度とするな。私は日本人の研究者だが、同時に空手の先生でもある。君をノックアウトさせることはまことに簡単だ。今度そういうことをやったら私は君にパンチをみまうであろう」と大きな声で言った。「空手の先生」の部分はすぐ理解できたらしく、びっくりした顔をしていた。一発パンチをくらわせるマネをしてハナ先で止めてやった。

その後、ヤンは「警察に行くこと」、少なくとも「せんとく代を請求すること」を勧めてくれたが、私は止めておいた。一つの小事件ではあったが、これをおおげさに警察ざたにしてみたり、せんとく代を払わせてみたところでつまらない。せつかくの私のオランダ友好感情に傷がつく。一つの経験としてのみ記憶したい。ヤンの話では、人に生タマゴを投げるケースはオランダではかなり珍しいと言っていた。

午後2時半から約1時間CABOの前庭の池でスケートをしているうちにすっかり気が晴れた。スケートをしている少年達は実に楽しそうに無邪気である。私があぶなっかしそうに滑っていると、オランダ語でさかんに話しかけてくる。どうも「ああしたらよい、こうしたらよい」と滑り方をコーチしてくれているらしい。色々な経験をするものだ。

今、夜の10時40分である。京大助教福井氏より電話がかかってきた。ウラの堀で山口夫妻らとスケートをしているから来ないかという。スケート靴はあるという。夜11時に外でスケートをするのも一つの経験である。今から行って来ます。

2月8日(日)

再び温室園芸展示会へ

先日の温室園芸展示会(Nederlandshe Tuinbow Vakbeurs, Horticultural Fair)で収集したパンフレット・カタログ類を一昨日整理しているとき、どうしても、もう一度確認したいこと、知りたいことが2、3出てきた。そこで、昨日午前11時にIACを出て、もう一度展示会を見に行った。最終日であったが相変わらず

人がいっぱいであった。

最初に、IMAGの展示場で、リーフティンク (Liefink) 氏にIMAGの仕事の概要を説明してもらった。省エネルギー型ボイラーの開発、ボイラーの燃焼ガスの一部をCO<sub>2</sub>施用に使うときの一酸化炭素(CO)濃度を測定する機器の検討(低濃度を計測できて、しかも安価なもの)、ガラス透過率が、乾いているときは低く、湿っているときには高くなるようにするための塗料の開発、フィルム等の長波放射射出率の測定器、空中スプレーの散水量の床面分布測定法、暖房用配管の省エネルギー的検討、地中加熱、電算機利用のデータ処理等を説明してもらった。

次にオランダにおける大手温室業者の一つフォスカンプ・フライランド (Voskamp & Vrijland) 社の展示場をたずねて、4月20日に同社を見学したい旨を申し入れると、すぐOKしてくれた。その後そこでしばらく日本やオランダの温室の一般的傾向について議論した。

同様の見学申し込みをプリンス(Prins N.V)社についても行った。同社は、本来、鉄材の大手会社だが、以前より温室建築を手がけている。4月22日に見学することになった。

その後夕刻まで、先日見落とした個所を中心に見て回った。途中、先週アールスメアの温室を案内してくれた渡辺氏とブラジルの日系2世ホシさんおよび他のブラジル人と会った。彼等もこの展示会に来たのは今日が初めてではないらしい。とにかく、年に1回の、世界最大の、温室に関するあらゆる資材の展示会である。

#### 夜のアムステルダム観光

展示会を見終わった後、日本人の坂本、小島両氏と落ち合ってアムステルダムに向かった。アムステルダム市内を観光バスで回るナイト・ツアーに参加するためである。これは1週間ほど前に3人で雑談しているときに、話が出たものである。いつもアムステルダムに行くときは美術館、博物館を回ったり、仕事だったりして本当の観光はあまりしていない。一度ゆっくり、アムステルダムでおいしい夕食でも摂りたいものだと言うことになったが、知らないレストランで高い金を取られてもつまらない。それに何処が良いかも分からない。いっそのこと、旅行業者の観光バスを利用したらということになった。金額は食事、飲み物その他一切をふくめて80ギルダーであった。

夜7時にアムステルダム駅前のビクトリアホテルのロビーで待っているとバスが来た。バスはいくつかのホテルを回って参加者をひろっていった。シーズン

はずれのせい、参加者は全部で7名であった。大きな観光バスにたった7名である。イギリスからアムステルダムのRAIの自動車ショーを見に来た夫婦、ナイジェリアからベルギーへ仕事に行く途中にアムステルダムで1泊するという黒人1人、パリに住んでいてアムステルダムへ旅行に来たフランス婦人1人、それに日本人3人である。

まず郊外のあまり大きくないレストランに連れていかれた。落ち着いた雰囲気のレストランで料理もよかった。見知らぬ人との食事だったが少人数だったのでわりあい楽しい食事ができた。

私にとっての収穫は久しぶりに「本物の英語」を聞くことができたことである。実は、最近、自分の英語がオランダに来て以来、ほとんど上達していないのに少々イライラしていた。私の英語がうまくならない理由は「本物の英語」を話す人と会話するチャンスがきわめて少ないからである。オランダに来て、本当の「英国人」あるいは「米国人」と話したのは、今日のを除けば12月15～19日のワークショップ（討論会）だけである。その他はオランダ英語、エジプト英語、インドネシア英語、日本英語など、および日本語で話をしているわけである。英語を母国語としない人々と話をしていて、お互いに理解し合えないときは、「私の英語が悪いのか」「相手の英語理解力が悪いのか」、あるいはその逆なのかははっきりしないので自分の英語を改善するのがむずかしい。つまり「お手本」がないのでどう直して良いのかわからないのである。すると、結局、「うまい、へたはともかく話が通じればそれでいいや」式のブローケン英語になってしまう。ところが、今日はひさしぶりに本当の英語を話す人と話ができ、  
「なるほどこれが本当の英語か、IACで皆が話している英語とは大部異なるな」という感じがした。

9時にそこのレストランを出て、町の中をバスで通り、アムステルダム駅前で、バスを降り、ガイドに引率されて、旧教会からニューマルクト広場にかけて10分ほど町の中を見て歩いた。これもナイトツアーの一部をなしている。その後、バーに入りビールを一杯のみ30分ほどした10時半頃、ナイトクラブに入った。その前にガイドに、クラブの中でのビール一杯分は80ギルダーの中に含まれているが、それ以上何かを飲みたい人は自分で料金を払うこと。ただし、シャンパン一本150ギルダー（1万5千円）だから気をつけるようにと言われた。クラブの中で、一般の客は、立派なテーブル付きのイスに座っているが、私達ツアーの人はそまつなイスに座らされた。これは仕方ないであろう。耳が割れそうなエレキギターの伴奏で、男の人が何かを大声で歌っている。しばらくすると私のとなりに女性が座った。どこから来たのかだの何だの話しかけて

くるので少し話をしていると、10分程したら、「何か飲みものとっても良いか」という。それきたである。「私は充分なお金を持っていないので、残念だが、何もあげられない」と答えた。しばらくすると、またたずねるので、坂本氏に相談したら、彼は「ビールなら自分が払っても良い」というのでその旨つたえると「シャンペンが良い」という。とんでもないので断ると、しばらくして席を立てて何処かに行ってしまった。日本でもこんなところには入ったことがないので、どう対応したらよいか困ったが、彼女はイギリス人だったので会話の練習には少し役立ったろう。

その他、手品、さいみん術、ダンスなどのショーがあり、12時少し前にそこを出て、次に、バーに30分程立ち寄り、このナイトツアーは終わりになった。まあ、これも一つの経験であろう。

それから坂本氏の運転する車でワーゲニンゲンのIACまで帰った。

## 2月11日 (水)

### ディクソホールン博士と会う

3週間程前に、英国の国立農業工学研究所(NIAE)のボウマン(G.E.Bowman)氏に、3月初旬に訪問したい旨を手紙で頼んでおいたが、返事が来ないので今朝電話をしてみた。英国への電話はととてもつながりにくく、時間をかなり費やした。やっと、ボウマン氏が電話に出たので、「手紙を受け取ったのか」と聞くと、「手紙は受け取ったが、私はもう温室気候の研究から離れてしまったので、君の手紙は科長のウインスピーア(Winspear)氏にあずけた。スケジュールはウインスピーア氏が決めてくれるだろうが、彼は現在病気で休んでいる。」という。「来週には彼は出てくるだろうからすぐ電話で返事をするよう伝える」という。仕方がない。待つほかなさそうだ。

午後8時に、ワーゲニンゲン農業大学・物理・気象学科 (Dept. of Physics & Meteorology) のディクスホールン(Dixhoorn)氏とIACのロビーで待ち合わせ、彼の研究室に案内してもらった。彼の研究室はIACから歩いて5分程の所にある。彼はボンド・グラフの手法を使った温室気象のシュミレーターを開発していて、それを実演してみせてくれた。コンピューターは米国DEC社のPDP 11 E10で、ディスク、カセットテープ、テープレコーダー、X-Yプロッター、ディスプレイ装置(カソードレイチューブ)、多点記録計等が周辺機器として使われている。彼はエンスケデ(Enschede)市に所在する、工科大学とワーゲニンゲン

農業大学の兼任教員であり、ワーゲニンゲンには水曜日と木曜日だけ来る。実演を見せてもらった後、ミニコンの使い方、温室の環境コントロールの考え方等について1時間ほどディスカッションした。彼がワーゲニンゲンに来たのは2年程前で、それから温室環境の研究を本格的にやり始めたらしく、まだ、これといった研究成果は上がっていないようだ。年齢は50才を越えているような気がする。しかし、電気工学者らしい良いセンスの持ち主なので、そのうち何かやり出すだろう。それに、若い同僚が2人いるということなので楽しみだ。

## 2月12日 (木)

### ユリアナ女王来る

今日はワーゲニンゲン農業大学の創立100年記念とかで、ワーゲニンゲンにオランダのユリアナ女王が訪問された。IACの建物にも2時間ほど滞在し、選ばれた6名の外国人留学生と会見された。もちろん、私は選ばれなかった。丁度、昼食時だったので、私も女王を見ることができた。日本のような厳重な警備体制は全くなく、女王は私の1メートル横を通っていかれた。66才だそうで、どこにでもみられるおばあちゃんという感じだった。

## 2月14日 (土)

### オランダのパーティーの雰囲気

昨夜は、ルデイ(Rudy Rabinge)の家で研究仲間のパーティーがあった。彼の家は改装祝いだそうである。行ってみると、たしかに、あちこち改装のあとがみられる。ティー・パーティーで、夜の8時頃から、夕食を済ませたあとで集まってくる。夕食も招待されたときには6時過ぎから集まる。少なくとも平均週に1回は、この種のパーティーに行くのもう大分なれた。

今日はその様子を少し記録しておきたい。まず、行くときの服装は、まったくの普段着である。50才をすぎた男でなければネクタイをしめていったら、必ず、ひやかされる。女性もほとんど普段着である。行くときに、花を一束持っていく人が何人かいるが、手ブラで行く人も多い。昨夜は私も手ブラだった。もう、日本から用意していったお土産は品切れだからである。

集まる時間はきわめていい加減で、昨夜、私は8時20分に行ったが、その前に

来ていたのは2人であった。9時頃に大体揃うという感じである。でも、フリッツ(Fritz)は今まで赤ん坊の面倒を見ていて、今、奥さんと交代してきたといって10時半頃来たし、ヤンの奥さんのトライニー(Trijnie)は今まで油絵を描いていたといって10時頃来た。

帰る時間もいい加減である。11時半頃から帰り始める人が出る。私は大体12時半から1時頃の間に戻るが、そのときはまだ半分以上は残っていることが多い。大体2時半頃まで続くようである。今日の参加者は15人位だったと思う。

どの家にも、必ずタタミ10~15枚分ほどの居間があり、そのどこかに勝手に腰をおろす。最近では床に腰をおろすのがはやり始めたとかで、4人程床に座りこんでいた。靴を脱いでいる人も2人程いる。

皆がそろうまでは、コーヒー、紅茶、ジュース等が配られるが、その後はワイン、ウイスキー、ビール、ジュース等自分の好きな物を好きなだけ飲むといった感じである。私のような下戸には、酒をむりして飲む必要がないので楽なものである。私はかなり時間をかけて、ワインをコップに1杯半位飲むようになりつつある。食べ物は、ビスケット、パン菓子、チーズ等が多く、昨日は、生ニンジンとリンゴと赤ビートを混ぜたサラダ、フルーツポンチ等が出た。ほとんどセルフサービスである。

皆が一つの話題で一緒に話すことは少ない。大体は2~4グループ位に分かれて勝手に話し、時々人が入れ替わる。私は最初、ドヨンとホニーと話していたが、そのうち、となりにドウィット氏が来て、「お前の仕事はうまくいっているか」と聞かれたので手短かに、私の仕事の進捗を報告して「大体私の予定通りに進んでいる」と言っておいた。最近やっと、温室内への光透過を計算するプログラムの改良が終わり、それをヤンの作った作物光合成のプログラムとつなぎはじめたところである。それが済んだらムース(Mous)が作成した、温室内の害虫であるダニの発生のシュミレーションプログラムとつなぐことになっている。少しでもよいから、何がしかの結果が得られると良いのだが。

その後、反対側のとなりに座ったフリッツの奥さんと話した。彼女はしばらく前に赤ん坊を生んだばかりだが、元気そうだ。産後10日間はお手伝いさんを頼んだがその後はすべて自分でやっているという。オランダの新生児の平均体重は3500gだと言っていた。こちら3児の父親なので、日本とオランダにおける育児の考え方の相違等について少し話した。3人の子供と女房と離れて1人でオランダに来ているのは少し不思議らしい。たしかにそうだ。「別にオランダの生活に少しも不満はないが、私の子供が私のことを忘れてしまうのではないか」というのが一番心配だ。事実、先日、こちらでとった写真を日本に送ったと

ころ、子供達が私の写真を見て、『これだあれ』と言ったらしい』と言うと同情してくれた。

### パーティーでの議論

その後私の近くで、ドワイト氏と若手達とが有機農業の是非について議論しはじめた。オランダ語で議論しているが、ヤンが時々英語に通訳してくれるのと、ときおり英語の単語が混るので大体の様子は分かる。ドワイト氏は有機農業には反対らしい。有機農業の方が収量は多いというデータがあるが、あれは何百も実験をして、そのうちの数回そういう結果が出ただけで、彼等はその数回だけを取り上げて、有機農業の有利性を説いているという。

次に、原子力発電が問題になった。ドワイト氏はここでも原子力発電に賛成である。特に、彼は、原子力発電による廃棄物の安全処理の研究にさえ反対する研究者に、はげしく反論していた。こういう時のドワイト氏はまことにジェスチャーに富んでいて、大声で怒鳴ったり、いきなり靴で床を踏みならしたり、手を振り上げたりである。そういえば、この家に着くなり、居間で数回ジャンプして、「本当にうまく改築できたんだらうな」と言って、確かめている風であった。ジャンプの好きな男である。

オランダ語で議論しているのに、私が時々ニヤニヤしたり、笑ったりしているのでドワイト氏は「お前はオランダ語が少し分かるようになったのか」と私に聞いた。「いや想像しているだけで、少しも分かっていない。ただ、私はオペラを見るのを楽しむような気持ちで、あなた方の話を楽しんでいるのだ。特に、あなたの話は、リズムとメロディーに富んでいて、このオランダ・オペラは実に楽しい」と言ってやったら、笑っていた。

少し固い話をしていたので、女性達はいつのまにか、皆、別の所にひとかたまりになって、別の話題で何か笑い合っていた。

その後ルディ、ドワイト氏の奥さん、ドヨング氏等と少し話した。ルディとは植物病理分野でのシュミレーションの話を、ドヨング氏とはコンピュータの話をした。

オランダ人の家を訪ねたら、部屋の置物を見るのも一つの楽しみだ。

今日まず目についたのは大きな「振り時計」である。結婚記念にもらったとかで、85年前のフランス革命の直後に作られた時代のものだそうだが、今でもとても正確だそうだ。この時計は「買った人が死ぬまで保証する」そうで、壊れたら店に持っていけばいつでもすぐ無料で修理してくれることになっているらしい。

その他、200年前に作られたオランダの地図、ルディがアフリカの象牙海岸で、自分で採集したという昆虫の標本、その時買った土着人の仮装面等々がカベに飾ってある。また部屋の中の人工照明でも育つような日陰植物がやたらとあちこちに置いてある。

2月15日（日）

#### オランダ人の外国語能力

時々IACに遊びにくるオランダ人カスパーズ(Kaspers)氏の家にベトナム人の「コウ」氏と、IACに居る日本人3人（坂本、小島、古在）が夕食に招待された。それほど親しい間柄であった訳ではないのでどうなることかと思ったが、行ってみると意外に楽しく、ゆかいな夜を過ごした。

カスパーズ氏は26才で、環境汚染に関するコンサルタント会社で働いていて、奥さんと2ヶ月になる子供がいる。たまたま、その家に遊びに来ていた奥さんの妹さん（ヤコミネ）とも一緒になった。フローニンヘンの大学の一年生で、ロシア語を専攻しているという。私達とは英語で話したが、ドイツ語の方が話しやすいという。とはいっても、その英語は私のそれよりずっと上手だ。ベトナム人とはフランス語で話している。19才の娘がドイツ語、フランス語、英語、オランダ語、ロシア語をたくみに話すというのは、オランダ人としてはそれほど珍しくないというのには驚いた。大学制度のこと、余暇の過ごし方、社会問題等について皆で12時過ぎまで話した。

2月21日（土）

#### 遠足で花の展示会へ

今朝は、IACの遠足（エクスカーション）で、朝8時から、バス2台を連ねてアムステルダムから北40kmのボーヘンカースペル (Bovenkarspel) に花の展示会 (Westfriesse Flora) を見に行った。その途中、アメルスフォールト (Amersfoort) 近くのスースダイク (Soesdijk) にあるオランダ王族の住居と、民族衣装で有名な小漁村フォーレンダム (Volendam) で小休止した。

今度の展示会では球根類（チューリップ、スイセン、シクラメン、ベコニア、ヒヤシンス、クロッカス等）および花木（ツツジ、ひめ桜等）が中心であ



る。例によって、園芸機械、施設等の展示もある。2月の初旬にブライスバイクでみた展示会を専門家向きとすれば、今回のは一般向きである。温室そのものの展示場も、展示面積の多くを小型の家庭用温室および器具類にさいている。規模も小さい。といっても日本でこれだけの展示会はどこにも見られない。家畜類の展示も少しあった。

展示場は人でごったがえし、大変な混雑である。私は2時間の見学時間のうち1時間半を機械類の見学に、30分を花の見学に当てた。もっと花を見たいのだがいつも時間が足りなくなってしまう。一度ゆっくり、花だけを見て回りたい。

ポーヘンカースペルの展示場近くのブロッカー (Blokker) で昼食を摂るために、1時間ほどの自由時間があつた。そこで、大急ぎで食事をして、残りの時間で、すぐ近くの温室を見て回つた。アールスメアやナールドバイクにあるような大きな温室地帯ではない。あちこちに古い温室、新しい温室が入り混じっている。私が見た温室ではフリージアおよびレタスを栽培していた。この地方の温室のほとんどは側壁が垂直ではなく、80度位に傾けて作つてある。一戸の栽培面積はそれほど大きくはないようだ。人が居れば色々聞きたい所だが、日曜日のためか人影がない。

近くに、建設中の骨組みだけの温室があつた。新しい温室はほとんど軒高が3mを越えているようだ。骨材を減らすために、針金をたくみに使い、強度を上げている。

バスはその後アムステルダムに戻り、美術館めぐりと買い物とボート乗りの3グループに分かれた。私は買い物グループに入り、1人で、ワテルロー広場の『のみの市 (がらくた品の野外市場)』に行き、1時間半ほど見て回り、役立たずの古物を少し買った。

バスは夕刻7時35分にIACに戻つた。すぐ夕食を摂り、寝た。12時半頃眼がさめて、1階のジュース自動販売機の所へ買いに行くと、夜中なのに、談話室に人がたくさんいる。聞くと、ウラのインターナショナル・クラブでカーニバル・パーティーをやつていて、その帰りだという。これから出かけるという人もいるので、誘われるままに一寸のぞきに行った。一応、ヒゲをつけたり、仮面をかぶつたりしている人もいるが、特に変わった風には見えない。先程のバス旅行で知り合った年配の人に、カーニバルとはこんなものかと聞くと、そうではないという。カーニバルはもともとローマン・カソリック系の強い地方で行われているもので、オランダでは南の地方に行かないと本当のカーニバルは見られないという。1時間程してIACに戻る。

2月22日（日）

ユトレヒトのデ・ハール城見学

昼過ぎより、坂本氏の車で、短期滞在の山野氏（川崎重工の造船技師）と私の3人でユトレヒト近郊の「デ・ハール城」を見に行った。天気が良く、気温も適度で、気持ちが良いドライブだ。ヒュウテン (Veuten) のインターチェンジで高速道路を下りて、お城に向かう。のどかな農村風景である。この辺りは小さな温室地帯を形成しており、道路沿いに温室が並んでいる。

途中で一寸車を止めてもらって、温室をのぞいてみた。6000m<sup>2</sup>ほどの電照設備を備えた温室すべてにポットマム用の菊の苗が植えてあった。フェンロー型の温室で60連棟位はあろう。車をいつも運転してくれる坂本氏は私を「温室キチガイ」と呼んでいるが、最近はずっかり協力的になってくれて、温室が見えようと「どこかで車を止めようか」と言ってくれるようになった。

「デ・ハール城」は思ったよりずっと立派なお城で、14世紀に建てられたものを、19世紀に修復したものという。代々の王様が収集した世界各地の美術品、調度品が多く展示しており、日本の徳川家の紋がついた「籠」が陳列されていた。

2時間ほどお城を見たのち、坂本、山野氏はノドが渴いたのでビールを飲みたいと言って近くのレストランに入った。私はその間を利用して、すぐ近くの温室をのぞきに行った。バラが主で、その他プリムラ、ペゴニアを栽培していた。古くからの温室農家らしく、30年以上前に建てたのではなかろうかと思われる、側壁が高さ1m程のレンガで囲まれた軒高2mそこそこの温室、木造の温室、フェンロー型温室、間口6.4mの温室等が並んで建てられており、温室構造の歴史を見せられたようなものである。帰路にも多くの温室を道路沿いに見た。日が暮れてきたので温室の中をのぞくのはあきらめたが、機会があったらまた来てみたい。

2月24日（火）

日本語のわかるオランダ人

夜9時過ぎに、次の日曜日のエクスカーションの参加費を払うためにIACの裏のインターナショナルクラブに出向いた。日曜日と月曜日以外は夜9時過ぎから

ここのバーが店開きする。バーテンダーは大体大学生のアルバイトのようである。今日のバーテンダーはMichiel van Milという人柄の良さそうな青年だった。私が日本から来たと言うと、彼は昨年7ヶ月間大阪の枚方に滞在していたという。大学の卒業前の実習として大阪で水の浄化に関する実習を受けたという。

滞在中、大阪府立大学を訪問し、工学部化学工学科の矢野教授と農学部造園学研究室の高橋教授に会って話をしたという。日本語もずい分よく知っている。私が自分の名前を漢字で書いてみせると「ああ古いという字に存在の在ですわね」といっていた。漢字も大分よく知っている。好青年で人なつこく、これならきっと日本人と楽しく過ごせたのではないかと感じた。時々思いがけない人と会うものだ。

## 2月25日（水）

### 引っ越しを手伝う

一昨日、ベトナム人コウ氏の引っ越しを手伝った。通常の下宿から学生寮に移るためである。彼は正式に言えば、学生寮には入れないが、「また貸し」で借りるのである。月100ギルダーだそう。学生寮は個室でIACの私の住んでいる部屋よりも広いし、設備も良いようだ。日本の学生寮とは比較にならないほど良い。

コウ氏はオランダ滞在中にベトナムで革命が起き、自国に帰れなくなってしまったという。現在、オランダではブラブラしている。1ヶ月程前、やっと、本国から「パスポート」を送ってきたと言って、とてもよろこんでいた。帰国できるのは夏ではないかという。

## 2月26日（木）

### ヤンの家で夕食

ヤンの家に夕食によばれた。マカロニや肉や野菜等といっしょに炒めたような、ちょうど日本のやきそばのようなものを食べた。彼の奥さんのトライニーは絵を描くのが好きで、家の中のそこいら中に彼女の描いた絵が掛けてある。なかなか上手である。3才になるエステー(Esther)という子がいて、7月にはもう1人生まれるという。

3月1日（月）

カーニバルで踊る

昨朝9時20分にワーゲニンゲンのインターナショナル・クラブをマイクロ・バスで出発し、オランダの最南部マーストリヒト(Maastricht)にカーニバルを見に行った。IACからの参加者は10人、その他オランダ人等が10人、総勢20名である。オランダでは最も規模の大きいカーニバルがここでされるといふ。

オランダ人は、バスに乗り込むと早速ビールを飲み出し、歌をうたっている。服装もカーニバル用だ。私はふつうの服装だったので、そのような人には三角帽子とレイ（紙の首飾り）がわたされ、おまけに、顔にマジックインキでいたずら書きされた。カーニバルに参加するにはこれが最低のエチケットだといふ。昼過ぎにマーストリヒトに到着した。仮装行列が始まるのは1時間後ということであった。バスを離れる前に、翌日の午前2時にバスに集合するように言われた。それまでは自由に行動せよとのことである。

すでに、市の中心街はカーニバル一色である。老若男女が参加するとはこのことを言うのであろう。まだ歩けないで親に抱かれている子供から、つえをついてやっと歩いているような年寄りの男女が皆それぞれ工夫を凝らした衣装をつけ、仮面をつけ、顔や手を赤、白、黒、銀等に塗りたくっている。市の広場でビールを飲み、中学生のような子供までがかなり酔っている。晴天なのでとも晴れやかで、ついカメラのシャッターを押してしまう。交通整理のおまわりさんまでが、酔ってフラフラしながら車を整理している。

まもなく、仮装行列が始まった。見物人も多くは仮装しているので仮装行列と一体となっている。私達のような見物人も何か仮装をしていないと場違いで恥ずかしいような感じである。出店で仮面やツケヒゲを買って間に合わせの仮装をしている見物人も多い。仮装行列は夕方まで続いた。夕方になって仮装行列が一応終わってからが大変だった。

皆が、街頭で、あるいはビアホールで、辺りかまわず踊り始めた。ビールのコップを片手に持ち、ガブガブ飲みながら、音楽に合わせて、合唱しながらのダンスである。動作はきわめて単純で、しばらく見ていればすぐ真似できる。「踊る宗教」のオドリのようなものだ。

日本のお祭りとは一番違うのは女性の積極さであろう。若い女性、年配の女性がビールをあおるだけあおってフラフラしながら奇声をあげて踊り狂っている。仮面をしているので誰だか分からないという気易さがある。とにかく、ポ

サッと立っていたら、たちまち誰かに抱きつかれ、手を取られ、顔に何かを塗られて踊りの輪の中に巻き入れられてしまうのである。

来る途中のバスの中でオランダ人が騒いでいたのが、その頃になってやっと理解できた。とにかく、身体を音楽に合わせて動かしていないと何をされるかわからないので、身体を動かしている。そのうち、もうどうでもよくなって踊りだす。日本の祭りからは一寸想像できない激しさである。8時頃には、もう飲み過ぎてダウンし、路ばたに寝ころがっている人があちこちに出始めた。まったくの初対面の人と1分後には10年来の知己のように抱き合い踊り合い、その輪がいくらでも広がってしまう。オランダ人の全く別の一面を知った思いである。

どうにも足が疲れて、2時間毎位に少し休憩したが、結局12時頃まで踊りの輪にいた。その後、疲れたので、バスに戻った。すでにバスに戻っていたのはIACからの参加者だけで、オランダ人は誰も戻っていなかった。しかし、バスの中は寒くて休むどころではないので、結局また、近くのピアホールまで行って2時まで待った。結局12時間以上踊りを見ていたか、踊りをしていたことになる。

昔見た映画「黒いオルフェ」でリオデジャネイロのカーニバルを見たことを思い出した。そのときは自分の世界とは関係ないという感じで見ていたが、その世界を一寸垣間みた思いである。IACに帰り着いたのは朝5時だった。3時間寝て8時半には起きて、今日1日通常通り働いた。英国行きが迫っているので、色々やる仕事があるのだ。

## 3月7日（日）

### 英国にわたる

4、5日前から再び寒くなり出し、今朝はとうとう小雪がちらつき出した。今日はロンドンに向けての出発の日である。5日前から風邪を引き、3日間ベッドの中にいた。初め、ロンドンへは船と汽車の旅を楽しむつもりだったが、風邪が完治していないので急きょ飛行機の旅に変更する。

アムステルダムーロンドン間は飛行機でわずか50分程の旅である。正午過ぎにスキポール空港を発ち、ロンドン・ヒースロー空港に着いたら、また正午過ぎであった。冬期は、ヨーロッパとイギリスには1時間の時差があるためである。ホテルはバッキンガムパレスとハイドパークが見渡せるパークレーンホテルを予約しておいた。ロンドンも寒く、ときおり小雪がちらつく曇天である。

今度はどちらの飛行場でも何もスラれなかったので第一関門は突破である。ただし、オランダ英語に慣れた耳には、本当の英語はかなりスピードがあり、聞き取りにくい。1週間のイギリス滞在中に少しでも本場の英語に慣れたい。空港からホテルにはバスと地下鉄で来た。早速名物2階バスと古くさい地下鉄のお世話になった。

荷物をホテルの部屋に置いて、早速外に出て、ハイドパークを少し散策するが、寒くて長くは外に居られない。風邪を引いていなければもっと活動したいところなのだが、完治するまでは自重である。帰りに近くのヒルトンホテルに寄り、軽食を摂る。ホテルに戻って少し休んだ。ホテル代節約のつもりでバス無しの部屋を頼んでおいたが、部屋が狭く、何より室温が低く、トイレが共同で不便なので、バストイレ付の部屋に変えてもらう。前に人から聞いていたが、イギリスのホテルの室温は確かに低いようで、シャツでは少し肌寒い。8時過ぎに夕食を摂りに再び外に出る。

ホテルに、国立農業工学研究所 (NIAE) の温室科長のウインスピーア (Winspear) 氏とエフォード (Efford) 園芸試験場のプリングル (Pringle) 氏から日程変更希望の手紙が私宛に届いており、明日はリーバリー (Lee Valley) 園芸試験場のアレン (Allen) 所長を訪ねることになった。

近くに適当なレストランがないので、夕食は地下鉄で2つ目の駅のピカデリー・サーカスまで行った。日本が種々の点で英国の真似をしているので、地下鉄に乗るにしても、町を歩くにしても、それ程勝手が異なることはなさそうだ。

3月8日 (月)

### 園芸試験場を訪ねる

朝10時10分過ぎにリバプール・ストリート駅からリーバリー園芸試験場のあるブロックスボーン (Bloxboorn) 駅に向かう。リバプール・ストリート駅から30分程のところである。リバプール・ストリート駅までは地下鉄で行った。行く前にアレン場長に電話しておいたので、駅にはチャペル嬢が迎えに出てくれ、試験場まで車で連れて行ってくれた。手紙はアレン場長に出しておいたが、実際の説明は誰か他の人がするものと思っていたのが、場長自ら温室を一つ一つ回って熱心に3時過ぎまで説明してくれたのには恐縮した。昼食は場長が近くのレストランに連れていってくれて、ごちそうしてくれた。

このリーバリー園芸試験場は研究員7人、研究補助員8人の小規模な試験場で、ガラス室1 ha、プラスチックハウス1 ha、計2 haの温室と約25 haの圃場を持っている。花、野菜計30種について各種試験を行って、マッシュルームにも力を相当入れている。

アレン場長はプラスチックハウスの普及に力を入れているようだ。この試験場でも何年もかけてパイプハウスの構造を改良している。塩化ビニルフィルムは汚れやすい点で劣り、ポリエチレンフィルムか酢酸系フィルムが良いとのことだった。省エネルギーのための二重フィルムハウスも作っていた。光強度依存室温制御（light dependent control、日射の強弱に合わせて温室気温の高低を変える制御）の実用化試験も長年続けているという。多くの資料をもらったので、詳細をここに記す必要はなさそうだ。写真をフィルム1本分撮った。

今日はときおり小雪のちらつく肌寒い日であった。まだ風邪が治りきらず、時々咳込む。4時過ぎには、リバプール駅に戻って来た。体調が良かったら、そのまま何処かへ回るところだが、自重してハイドパークまでまっすぐ戻る。その後、一寸グリーンパークを歩いて、その公園の入り口にあるウェリントン博物館に一寸立ち寄った。金持ちで家柄が良いとこんなものを集めるとい見本が並んでいた。ホテルで一休みし、資料を整理し終わったので、これからチェリングクロスあたりまで夕食を取りに行こうと思う。

3月9日（火）

### 温室作物研究所を訪ねる

今日は、イギリスの南岸リトルハンプトンの温室作物研究所を訪ねた。大変充実した1日だった。行きがけに、ホテル近くの全国農業者同盟の本部がある農業会館（Agricultural House）によって、2日に行われた園芸展示会のカタログをもらう予定でいたが、念のために行く前に電話すると、9時半にならないと人が来ないという。しばらく時間に余裕ができたので、近くのセントジェームス公園（St. James Park）を散策する。朝もやの中の美しい公園だ。通勤の男女がときどき散歩道を足ばやに通る。毎日この道を通って通勤できる人は幸福である。

ビクトリア駅まで地下鉄で行き、そこから10時2分発の列車に乗った。途中の田園風景は素晴らしかった。11時20分にアルンデル（Arundel）駅に着く。丘の頂上近くに古城と大きな教会のそびえる古い町で、美しいの一言に尽きる。

なだらかな起伏が何とも心をなごませる。心の落ち着く町である。駅には人が迎えに来てくれていた。研究所はここから車で十数分のところにある。

まず、園芸科長で研究副所長でもあるシェアード (G.F.Sheard) 氏に会い、来意を説明し、また私の研究のあらましを説明した。シェアード氏の下で研究している若き研究者ディーン (Deen) 氏が研究所の全般的な説明を各研究室、温室を回りながら、1時間半ほどかけて説明してくれた。若いだけあって、はっきりと意見を言う人でとてもおもしろかった。最近、この研究所というところすぐ話題になるクーパー (Cooper) 氏らによる NFT (nutrient film technique、水耕の一種、薄膜水耕法) のウラ話を大分してくれた。時間的余裕がなく、ゆっくり話がでなかつたのが残念である。

その後、このディーン氏とシェアード氏と私の3人で遅い昼食を摂った。この辺はイギリスの中では冬期もっとも晴天が多く、温暖な気候のために有名なりゾート地帯であり、退職者がたくさん住みついていて、イギリスの中で60才以上の人口比が最も高い (30%以上)。夏はレジャー客で混雑するそうである。その他、プラスチックハウスのことが話題になった。昨日会ったアレン氏はプラスチックハウスの推進者だったが、シェアード氏は反対論者だった。研究所のレストランで食事中、昨年末ワーゲニンゲンの討論会で一緒だった、生物計量科長のソーンリー (Thornley) 氏を見かけたので挨拶し、もしヒマがあったら30分でよいから、あなたの仕事を紹介して欲しいとお願いしたら2時30分までなら空いているというので、一寸予定を変更して、ソーンリー氏の部屋を訪ねた。

まず簡単にここでの彼の仕事の内容を紹介してもらった。生殖生長 (生長点のモデル化に重点が置かれている) のモデル化に興味をひかれた。彼は物理学の分野で研究業績のある人だが、この研究所では植物生理学者とよく協力し、物理学者にしては珍しく、作物学への応用性を考えて研究している得がたい人である。その後、コンピュータ・モデルの評価法、形態形成のモデル化等についてディスカッションした。世界的に名の知れた学者らしく、すぐれた洞察力を備え、しかも、控えめな典型的なイギリス紳士である。ある意味では、今日の訪問でもっとも楽しく、軽い興奮を覚えるような楽しい会話ができた。

帰り際、多くの別刷りをくれた。彼は、つい先日、植物生理学における数理モデル (Mathematical Models in Plant Physiology, 1976, Academic Press) という本を出版している。再会を約して、名残惜しかったが別れた。私の仕事にも大変興味を示してくれて、英語で論文を書いて欲しい、英語そのものについてはいくらでも見てやる、と言われた。



次にハンド (Hand) 氏とカルバート (Calvert) 氏に会って自然光グローキャビネットと光強度依存室温制御装置の説明を受けた。これらについては前に訪れた多くの日本人の紹介記事で大体知っていたし、彼等の論文を読んでいるので大体理解していた。

どこの研究所を訪ねても、沢山の日本人が見学に来ると言われる。会社関係の人が製品を売り込みにくるらしい。カルバート氏は、光強度依存室温制御装置の説明をしながら温度設定法の難しさを力説し、ほんの少しの温度設定の相違が収量に大きく影響することをデータで示し、コンピュータ導入の不利益を説いた。イギリスの研究者は一体に、温度の環境コントロールへのコンピュータの利用にはあまり関心がないようである。わずかに関心を示したのは、次に会った、計測・制御科長 (Instrumentation & Control Department) のランドール (Randall) 氏だけであった。計測・制御科は、他の研究部門で必要とされる新しい測定器、制御器の開発と保守を担当している。ランドール氏はとても弁の立つ人で、一気に彼らの仕事の内容を話しまくった。とても早口なので聞き取れないことが多々あった。

しかし、イギリスはやはり良い。イギリスでは私が人と話をして、話が通じないときは、私の聞き方、あるいは話し方が悪いことがはっきりしているのととても気が楽である。オランダでは逆の場合も多いにあり得るので、絶えず2つの場合を気にしながら話をしているので気が疲れる。このイギリスに半年も居れば私の英語ももう少しはましになるかも知れないのになーとつくづく感じる。オランダでは上達しようがない。

第二に、町を歩いているだけでも英語ばかりなのでとても気が楽である。オランダでは町のポスター、サイン類の99%はオランダ語で、何を書いてあるのか分からない。

ランドール氏はイギリスの温室農家の制御システムはほとんどがオランダ製で、電気部品はほとんどが日本製であることを嘆いていた。温室の環境調節装置を本格的に製品化しようとしているイギリスの会社は皆無だという。最後に日本の温室事情を簡単に私が紹介して彼に別れを告げた。帰りはシェアード氏が彼の車でアルンデル駅まで送ってくれた。

7時前にビクトリア駅に着く。ビクトリア駅からバッキンガム宮殿の横を通って、グリーンパーク (Green Park) を横切り、ホテルまで歩いて戻った。公園のドアは閉められていたが、塀が低かったので乗り越えて、誰もいないグリーンパークを散策しながら横切った。とても良い気持ちだった。

3月10日(水)

### 国立農業工学研究所を訪ねる

今朝も早めにホテルを出て、ハイドパークを横切って公園の向かい側のランカスター・ゲート駅まで歩いた。公園内のザ・サーペンティン(The Serpentine)という池に沿ってゆっくり歩くと、公園を横切るのに30分は必要だ。公園といっても広さ160 haで日本の日比谷公園の10倍ほどの広さである。公園内には馬道があり、馬に乗った老若男女が朝から散歩している。公園に沿った木々には何十種の小鳥がさえずっていて、朝から、大きな双眼鏡と観察ノート、カセット・テープ・レコーダーを抱えた人が何人か池のそばで熱心に鳥を見ている。私の足元には黒、および褐色のうさぎが行き来している。この公園は池をはさんでケンジントン公園(110 ha)と続き、自動車道をはさんでグリーンパーク(37 ha)とセントジェームス公園(21 ha)とつながっている。歩いているととにかく心がなごむ。

9時30分にセント・パンクラス駅に着き、9時45分発のベッドフォード(Bedford)駅行きの列車に乗った。駅で今日会うウインスピア氏に確認の電話をしたら、駅まで車で迎えを出すからとのことだった。ウインスピア氏は国立農業工学研究所(NIAE)の温室科長である。NIAEの本館は昔のケント侯の宮殿をそのまま使っており、金色に輝いている。昔のお城とその庭園がそのまま研究所の敷地になっている。庭園は夏は一般に公開されるとのことだ。ウインスピア氏の部屋はその宮殿の一室にあり、部屋の中に立派な「暖炉」が昔のまま残っていた。

手紙でウイービング(Weaving)氏にも会いたい旨、書いておいたのだが、彼は急な用事でロンドンに行ってしまったとのことである。代わりに、温室の構造力学を研究しているウェル(Well)氏が出て来て、3人でしばらくお互いの国の温室について情報を交換した。同じプラスチックハウスといっても、どうして、イギリスではポリエチレンフィルムを使い、日本では塩化ビニルフィルムを使うのが話題になった。ウインスピア氏は日本の農業気象学会で作成しつつある「温室設計基準」にとっても興味を示していた。お互いに資料の交換をしようことを約束する。

次にウインスピア氏と共に、ボウマン(G.E.Bowman)氏を訪ねた。彼とは前から文献の交換をしていたし、今回も前もって原稿を送って、批評をしてくれるよう頼んでおいた。早速私の原稿の批評をしてもらった。一つはガラスの偏

光についての問題だった。彼は物理屋なのでとても厳密だ。その後、3人で一緒に食事をする。食事後、ウインスピーア氏が庭内の昔の浴場、池、森、300年前オレンジの木を冬期の寒さから保護するためにケント侯が作ったという、屋根がガラスの建物 (Orangery) 等を案内してくれた後、熱収支研究のための温室、空気温室等を見せてもらった。どこの温室研究者もエネルギー節約問題には熱心ようだ。図書室、会議室、ホール等も一寸見たが、宮殿の居間、応接室等を使っているので美しいの一言に尽きる。

その後、また、ポウマン氏のところに戻り、彼の自作のゴニオフォトメーター、水分計、放射温度計、シリコン日射計等について、実演してもらいながら、詳しい説明を受け、ディスカッションをした。

最後にスミス (Smith) 氏を訪ね、マイクロプロセッサの温度環境管理への応用研究について30分程説明を受けた。現在は、光量従属室温制御装置を1枚の電気基板上に作ることが一応の目標ということだった。短い時間だったがなかなか愉快な話ができ。本当のところ、2,3日は滞在して、もう少しゆっくり話をし、また温室の機械化部門も訪ねたかったところだが仕方がない。またの機会を待つしかなさそう。

### 3月11日 (木)

#### 大英博物館を訪ねる

昨日アシュダウン (Ashdown) 氏から伝言があつて、今日午前中の、ライミントン (Lymington) 付近の農家の温室見学が取り止めになった。彼に急用ができたためである。イギリスの商業温室を見る唯一のチャンスだったのに、これが中止になったらイギリスに来て実際の温室を見ないで帰ってしまうことになり、何とも残念至極だが先方の都合とあつては仕方がない。諦めることにした。

気を取り直して、今朝はまず一番にナイトブリッジ (Knights Bridge) にある全国農業組合の農業会館を訪ねて、そこで、今年の2月にヨークシャーで開催された園芸会議・展示会 (Horticulture Conference and Exhibition) のカタログを入手した。これは年1回開催されるイギリス最大の温室関係の会議と展示会であり、イギリスの園芸動向を知るためには是非必要なのでわざわざ出向いて入手した。その足で今度はホルボーン (Holborn) に行き、政府関係の出版物ばかりを扱っている本屋 (Government Bookshop) で、農林漁業省が出版した温室の設計基準資料を入手した。

その後すぐ近くの大英博物館に足を急いだ。確かに世界最大の博物館の名に恥じない素晴らしい美術品の行列である。ギリシャ、ローマ時代の彫刻、工芸品は息を呑むような美しさで、何時間でもその前に立っていたいような気持ちである。とても半日で見回れる規模ではないので、東洋美術、古文書類は見るのを割愛して、ここでしか見られそうもないものに的をしぼってみた。それにしても迫力のある美術館である。

#### エフォード園芸試験場を訪ねる

正午まで博物館に居て、その後ウオータールー(Waterloo)駅に急ぎ、12時46分発の汽車に飛び乗ってエフォード園芸試験場へ向かった。この試験場はイギリスの南岸ブロッケンハースト(Brockenharst)近くのライミントンにある。駅にはシムズ(T.Sims)氏が車で迎えに来てくれていた。彼は若い研究者で、ハーネット(Harnett)氏がこの試験場を去ったあとを受け継いで頑張っている元気の良い若者である。昨日ウインスピア氏が「エフォード園芸試験場にはシムズという若い人が、日本から来た温室の光環境の専門家に対して、多くの質問を作って待ちかまえているよ」と言っていた。

彼は、車に乗るなり、いきなり仕事の話をもくしたてて来た。かなり話すことを考えて整理していたようで理路整然と、手短かに要領よく話してくれた。私の仕事にとっても関心を持っていてくれて細かいところまで質問してきた。試験場に着くなり、温室に連れて行かれて、また、要領よく彼等の研究を手短かに説明してくれて、意見を求めてきた。温室の建設方位でなく、作物の作付方位がまず問題になった。彼は単棟、連棟の南北、東西方位の温室内に南北方向に作物を植え付けている。次に、温室内日射測定における日射計の置く位置について議論した。大分議論したが彼は私の意見を理解してくれた。次いで、試験場内の温室類全体を見て回りながら、プラスチックフィルムの新製品、材質等について議論した。

私は所長のプリングル氏宛に見学申込みの手紙を出しておいたので、所長に挨拶したいと言ったら、時間ももったいない、その分だけ私と議論したいと言う。所長には後で良く説明しておくからと言うので、結局所長には挨拶しないまま、議論を続け、その後シムズ氏に駅まで車で送ってもらった。

彼はこの試験場に来る前、農林省の仕事で6年間アフリカに居たという。そのうちは非日本に行きたいと言っていた。再会を希望して5時に別れる。短い時間だったが密度の濃い議論で多くのものを学んだ。

ロイヤル・フェスティバル・ホールでオーケストラを聴く

7時すぎにロンドン、ウォータールー駅に戻り、駅で食事をした後、駅のすぐ近くのロイヤル・フェスティバル・ホールに向かった。8時からロイヤル・フィルハーモニー・オーケストラの演奏でベートーベンの交響曲第3番（エロイカ）とエグモントを聞くためである。日本ではロイヤル・フィルを聞く機会がなかなかないのでこの際にとまって切符を買っておいたのである。実はロンドンに来てすぐ行きたかったのだが（ロンドン・フィルの良いプログラムがあった）、インフルエンザの治りかけで咳が残っており、行きにくかったのである。前に、演奏会で咳を我慢するのに苦労した経験があったので。

演奏は素晴らしく、久しぶりに、我を忘れた。そして、我を忘れて夢中で拍手した。それに、思いがけず、ロンドンの紳士とイブニングドレスで装ったロンドンの貴婦人を拝見する機会を得た。

演奏は10時に終わり、ホテルに戻ったのは10時半であった。エレベーターのところで日本人に声をかけられ、30分ほど苦労話を聞かされた。何かのプロペラ会社の課長さんとかで、英語で大分苦労しているらしい。

## 3月12日（金）

ロンドンの国立美術館に行く

本日は、ケンブリッジ大学建築学科の大学院生ランドール・トーマス (Randall Thomas) 氏と大学で合う予定にしていた。彼とは2年程前から研究面で何回か手紙を通じて議論している間柄で、今回のロンドン訪問の、楽しみの一つであった。ところが、NIAEのウインスペア氏が病気だったために、今回のイギリス訪問を出発直前に1週間延期したので、彼と会えなくなってしまった。出発前にオランダから彼のところへ手紙を出して、パークレーンホテルに電話をかけてくれるよう頼んでおいたが、連絡がとれないまま、今日になってしまった。彼との議論を大いに楽しみにしていたが、止むを得ない。本当は、手紙では書ききれなかった部分を、時間をかけて彼とゆっくり話し合いたかったが……。

そこで予定を変更して、国立美術館 (National Gallery) を訪れることにした。この美術館は10時閉館なので、その前に少し観光をしようと思い、8時前にホテルを出た。まず、地下鉄でタワーヒルまで行き、ロンドン塔とロンドン橋を見た。テムズ河畔にどっしり構えたロンドン塔はなかなかのものだ。次に、地下鉄で、ウェストミンスター寺院に行った。まだ観光シーズン前の、しかも平

日の午前中とあって、観光客の姿はほとんどなく、荘厳な雰囲気をつたえた建物内部に、格調高いステンドグラスからもれ入る光を楽しむことができた。この建物は議事堂に隣り合っている。

そこからトラファルガー通りまで歩き、ちょうど開館と同時に国立美術館に入ることができた。聞きしにまさる美術館である。ミケランジェロ、ファンダイク、ルーベンス、レンブラント等もさることながら、フランス近代の巨匠ルノアール、モネ、マネ、ピサロ、ドガ、セザンヌ等には圧倒された。ゴッホの作品も数点あった。芸術にはまったく関係のない、むしろ無関心な、ど素人の私にも、これだけの作品を見せられるとなにか芸術的興奮をおぼえる。と同時に、自分が芸術家でないことを神に感謝したい気がする。私がどんな努力をしようが彼等の足もとにおよぶような仕事は、金輪際できっこないのだ。

昨日、大英博物館でも感じたことだが、「芸術に進歩があるのか」ということをつい考えてしまう。「芸術」は時代と共に進歩しているかもしれない。しかし、昨日見た、ローマ彫刻、エジプト時代の遺物、彫刻類を生み出した芸術心、創作精神の結晶を、現代のそれと比較できるだろうか。現代に生きる芸術家の苦しみを垣間見る気がする。この美術館でも多くの画学生が古今の名作を前にキャンバスを広げ、けん命に、一心不乱に模写をしている。彼等は、過去を模写し、過去をのり越え、新しい芸術を切り開こうとしているのであろう。しかし、それにしてもなんと困難なことか。

疲れて、モネの作品の前の椅子に腰をかけ、忙然と彼の「水蓮」をながめつつ、昨日見た、エジプトの大彫刻に思いを馳せているうちに、いつかだれかに聞いた「ルーブル美術館」のことを突然思い出した。ルーブル美術館に行けば印象派の絵画とローマ・エジプトの彫刻をもっと見られる!! 時計を見ると、もうとっくに昼をすぎている。

### 思いつきでパリに飛ぶ

本当は明日と明後日ロンドンに滞在し、そのままアムステルダムに帰る予定だったが、今日トーマスに会えなかったので予定が1日短縮された。今から、パリに行こう。そしてルーブル美術館に行こう。そう思うと矢も楯もたまらなくなった。あと2日ロンドンの観光をしたって、どうということはない。大きな古い建物を見て回るだけのことだ。それならいっそのことパリへ。

国立美術館を出て、すぐ近くの英国航空代理店にとびこみ、夕方の便とパリのホテルを予約した後、ホテルに戻り、急いで荷物をまとめ、地下鉄でバスターミナル (West End Terminal) まで行き、そこからエアポートバスでヒース

ロー空港へ向った。ロンドン市内には地下鉄網が張りめぐらされていて、何処に行くのにも地下鉄が便利で安い。少々古くて汚いがそれさえガマンすれば時間的にも経済的にも一番である。それにしても有意義なロンドン訪問であった。

### 英国での成果に満足

仕事の面でも実に収穫が大きかった。多くの研究者と温室研究の方向について話し合えた。それに、私の研究が、日本よりもむしろ、冬季の日照が非常に弱いヨーロッパで強く関心をもたれている点にも気が付いた。今まではあまりそういうことを考えずに、私は日本の温室農家のために仕事をしているつもりだったので、私の研究を英語で発表しようという強い動機が起きなかった。しかし、今回の旅行で、欧州で私の研究にこれだけ強い関心もたれるのであれば、私の努力を日本ばかりでなくヨーロッパの温室農家にもほんの少しでも役立たせたいという気になり始めた。イギリスの実際の温室をじっくり見る事ができなかったのは誠に残念至極であるし、トーマス氏と会えなかったのも残念だが、次の機会を待つことにしよう。「その代りに大英博物館と国立美術館に行けたのではないか、そして今、ルーブルへと近づいているのだ」と自分に言い聞かせた。

### 予備知識ゼロのパリ

パリに寄る予定はまったくなかったのも、予備知識ゼロである。パリの地図1枚も持っていない。空港がどの辺にあり、空港バスがどの辺まで市内に乗り入れ、先程予約したホテルがどの辺にあり、そこからルーブル美術館までどのくらい距離があるのかまったく見当がつかない。とにかく飛行機に乗ったら夕暮時にシャルル・ドゴール空港に着いた。その売店でパリの地図を買おうとしたら適当なものもなく、空港内をあちこち探し回って、やっと案内所で地下鉄の路線案内図（ハガキ大の大きさ）を入手し、係の人にその地図上に、空港バスの到着所と私の泊まるホテルの大体の場所に「印」を付けてもらって、空港バスに飛び乗った。

空港バスは東駅 (Gare de l'est) という所に行くはずであった。フランス語はまったく知らないので地名を発音するのも困る。私が英語流に発音したのではまったく通じない。バスに乗って、運転手に聞いたが要領を得ない。そこで、紙切れに地名を書いて後ろに座った女の人に尋ねると、やはり要領を得ない。その場所に行くのか行かないのかははっきり分からないのだ。その人は片コトの英語を話したので、ゆっくり時間をかけて聞いて、やっと大体理解できた。こ

のバスは東駅には確かに行くが、各駅停車でしかも少し回り道をする。東駅に行く直通急行バスが他にあるということらしい。バスはもう動いているし、今からどうしようもないのでそのままバスに座って、東駅に到着するのを待った。

今回のパリ訪問で心配なのはお金である。急に思い立ったので余分なお金がない。景気良くお金を使うことは出来ない。東駅から私のホテルのあるLiegeまでは地下鉄路線図を見ると2回乗り変えないとたどり着けない。しかも駅からホテルまでの道順がよく分からない。そこで地下鉄で Orepá という所まで行き、そこからタクシーに乗った。ホテルは100フランも払ったにしては小さな安ホテルといった感じだ。まだ食事をしていなかったの、食事をしに外出することにした。その前に顔を洗ってヒゲを剃りたかったが、先程の東駅（この駅はヨーロッパ急行の主要駅らしい）でカメラ以外の荷物を全部預けてしまったので、洗面具がない。そのまま食事に行き、食事後、町をブラブラして、ホテルに戻る。

## 3月13日（土）

### ルーブル美術館で感動する

ホテルの人に、ルーブル美術館は9時開館だと聞いたので、その少し前に到着するようにホテルを出て、美術館に行くと、実際は9時45分開館だった。1時間ほど余裕が出来たので、美術館中庭の彫刻群および隣合せのコンコルド広場を散策した。開館と同時に入り、まっすぐローマ彫刻の部屋に向った。

ルーブル美術館を一通り見回するには3日間は必要と聞いていたので、最初から全部見回るのはあきらめて、見たいところだけをゆっくりと見回ることにした。実物の質感と実在感には本当に圧倒される。それに一つの彫刻を前から見て、下から見て、横から見て、後ろから見て、遠くはなれて見て、果ては手で触れるということは本当に幸福である。時代を超越して伝わってくる古代の息吹きが言い知れぬ感動を伝えてくる。

次いでエジプト彫刻および遺物の部屋に行った。スフィンクスの手触りをたんのうし、ミイラを入れる棺の美しさに見とれているうちに、生まれて始めて、何か芸術的感動、芸術的絶頂感、芸術的興奮とも言うべき、何かどうしようもない、どうして良いか分からない深い深い燃え上りを覚えた。後でつくづく感じたのだが、もし私が15年前の最も多感な時代にこれらを見たら、私の人生は変わってしまったであろう。それと同時に、15年前にこれを見ないで良かった



た、今これを知って良かったという安ど感をつくづく感じた。才能のない人間が芸術的創作を人生の目標にすることはほど苦しいことはないであろうから。

それにしても、芸術の歴史とは一体何であろう！一介の平凡なエンジニアには理解すべくもない。興奮のあまり、何か疲れを覚えて、一度外に出て食事をする。フランス式にゆっくりと時間をかけてエスカルゴ（カタツムリ）を賞味した。なかなかの美味である。

### 印象派絵画に酔う

食事後、印象派絵画を見ようと思って探したがどこにあるか分からない。誰に聞いてもフランス語で要領を得ない。仕方なく、イスに腰かけて地図を広げていた日本人にたずねた。印象派絵画は、コンコルド広場をはさんでルーブル美術館と向い合せの美術館に、まとめて展示してあると聞いていたのだが、その場所を探しあぐねたのである。その人は丁度そこを見終って来たとかで、すぐ教えてくれた。そして、そこを見終ったら、その後ろにある美術館も訪ねるように勧めてくれた。そこにはモネの「水蓮」があるというのだ。

印象派絵画のコレクションは想像を絶するほど素晴らしかった。ロンドンの国立美術館にも相当あったが、ここにはセザンヌ、マネ、モネ、ドガ、ルノアール、ピサロの絵が各何十点も所狭しと並んでいて、いずれもが世界的名画である。実物の迫力が人の理性を失わせる程に迫ってくる。ゴーギャンもゴッホもシニャックもセゴンザックも「これでもか、これでもか」「これはどうだ」「こいつはどうだ」といって人の心に迫ってくる。モネの「水蓮」の前ではとうとう椅子に座って1時間を過ごしてしまった。色の微妙さ、あたたかさ、空気の動きまでが描き出されている。

とうとう閉館時刻が来てしまった。ピカソもミレーも見ることではできなかったが、もともと全部を1日で見ることは無理なのだ。これで我慢することにしよう。これだけでもパリに来た価値は十分にあるのだ。

### 疲労するが満足する

疲れ切って美術館を出ると、美術館前に2階建ての観光バスが止まっている。居合わせたガイドに聞くと、これは市内観光バスで、今から出発するという。今から申し込めると言うのでそのままバスに乗り込んだ。この芸術的感動と疲れを夕暮れのパリの町並みを見ながら癒すのもまた良かろうと考えたからだ。

バスは夕暮れのパリを、ノートルダム寺院、セーヌ川沿い、バスチーユ、カルチェ・ラタン、エッフェル塔、凱旋門、エリゼ宮、モンマルトルの丘、オペラ

座と回った。各場所でバスは停止するが降車することはないので3時間程で回り終り、暗くなってコンコルド広場に戻った。これで、かけ足ではあるがパリ市内見物もできた。

そこから地下鉄で東駅に行き、昨日預けた荷物を取り戻し、そこからホテルに戻った。予約していたホテルは満員で、すぐ近くのホテルを紹介してくれた。そちらは宿泊料60フランと安かったが、トイレが共同で床もみしみし音がする古ホテルだった。遅い夕食を取りにホテルを出て町に出る。パリの最後の夕食はオニオンスープ、ムール貝の煮込み、食用ガエルの唐揚げおよびサラダを注文した。食用ガエルは6匹も出されて閉口して少し残したところ、ウェイトレスに、これはうまいのだから全部食べろと言われて困った。結局、全部食べた。

できたらパリに1週間は滞在したいところだが無理な注文だ。またの機会にしよう。ホテルに戻ってベッドに入り、この1週間を振り返った。忘れられぬ1週間である。仕事の面でも、観光の面でも得る所は大だった。特に思い切ってパリに来てよかった。私のように、自分の目で見ないと物事を信用できない人間には、今やっと、パリが芸術の都、文化の中心であるという人々の評価に首肯できるようになった。町並みにしてもしかりである。身近な話、お土産物店に入っても、小さな土産物がとても上品で、あかぬけしている。これに比べるとアムステルダムのお土産物店に並んでいる品物は実にみずほらしい。ただし、良い物はきわめて値段が高い。パリ訪問を急に思い立ち、金銭的に余裕がない私には残念であった。

パリーアムステルダム間は特急列車で5時間余りなので、身体に自信があれば当然列車で帰るところだが、この1週間、連日朝から晩まで動きづめで、相当疲れているので思い切って飛行機で帰ることにした。お金を節約して身体でもこわして寝込んでしまったら取り返しがつかない。ホテルで予約を頼むと朝10時40分の便しかないという。もう少し遅い午後の便で帰りたいところだが仕方がない。

3月14日（日）

ブルタニューの森を散策する

朝7時に起き、空港バスの出発点Porte Maillotに向った。本当は8時半頃ホテルを出れば良かったのだが、Porte Maillotの近くのブルタニューの森を散策した

かったので、早目に出たのである。ブルタニューの森は素晴らしかった。ロンドンの公園も良かったが、ブルタニューのそれはまさに「森」であり、「森林公園」である。細い曲がりくねった散歩道が果てしなく続き、木々がうっそうとしている。5月の若葉はどんなに美しかろう。朝早くなので、人影はほとんどない。ときおり、犬を連れて散歩する人を見かけるだけである。ゆっくりと小道を歩き、仕事のことを考える。

今回のイギリスの温室研究者との話しを通じて、やっと今、オランダでの仕事の位置づけとまとめ方の方向が分りかけて来た。残りあと1ヶ月半、出来るかどうか分らないが全力を尽したい。日本に、大阪に、堺に、これだけの森林公園があったなら、もっと思慮に満ちた奥深い仕事出来るのではないかと思う。去りがたい気持ちを押さえて空港バスに乗り、シャルル・ドゴール空港へ向う。

3月17日(水)

ドワイト氏の指導を受ける

午後、私の部屋で仕事をしていると、ドワイト氏がふらりと部屋に入って来て、「何か新しい結果が出たか？」と言う。彼は、片手を上に上げて、「オー！」と言ってふらりと入ってくる。ちょうど、最近得られた結果をグラフに描いたところだったので、机の上にそれを並べてほしいの説明をした。どういう訳か、彼はとてものみ込みが早く、私がちょっと話し出すと、すぐ「わかった。それではこの点はどうか。」と言って、どんどん話しを進める。私自身、最近、得られた結果をどうグラフに表わしたら良いのかに頭を悩ませているのだが、彼も同じことを考えているらしく、「このグラフの表わし方はおもしろくない。結果が一目で分らないではないか。こういう温室をこういう方位に建てれば、これだけ得するということが誰にでも一目で分るようなグラフの表わし方を考えろ。」と言う。確かにその通りで、先日ヤンともだいぶ議論したのだが、なかなかうまく方法がない。こうすれば良からうということは分かるのだが、それは時間がかかりすぎる。私のオランダ滞在はあと1ヶ月半だし、ヤンも他の仕事を一杯かかえて忙しい。何とか手持ちのデータをうまく使って表わしたいのだが、データが足りない。ジレンマでどうも気が晴れない。あと、4、5ヶ月の時間をくれればもう少し上手なまとめ方が出来るのだが、そんなことは言っていない。とにかく、色々な方法を試しながら、一方で理論的に自分自身に問い詰めていく他なからう。あと一歩のところまで足踏

みしている。どんな仕事でもこれは同じだろう。今が一番の山だ。しかし、それにしてもドワイト氏はどうしてあんなに理解力があるのだろうか。

3月18日（木）

#### 討論会を組織する

今朝は朝8時半から12時40分まで討論会をした。出席者はドワイト氏、ヤン、ディクソホールン (Dixhoorn) 氏、ボット (Bot) 氏、ダンロップ (Dunlop) 氏それに私である。ボット氏とダンロップ氏はディクソホールン氏の下で働いている若手研究者である。この討論会は私が計画、立案したものである。以前、IACの食堂でディクソホールン氏と昼飯を一緒に食べ、それ以来、彼とは何度か話し合い、私の研究を紹介したり、彼の研究室を訪ねたりという仲になっていることは書いたと思う。彼は毎週、水曜日と木曜日にワーゲニンゲンに来て、IACの食堂で昼飯を食べる。

彼はもともと電気工学者なので、話していると、コントロールそのものに関心があり、温室は単なるその対象でしかなく、作物および温室そのものに対する関心が乏しい。それにコンピュータを使うこと、ボンドグラフという数学手法を使うことに興味があり、現実的な問題意識、現場的発想が少ない。しかし、電気屋だけに、数多くのテクニックを知っていて、また基礎知識が豊富なために、一度うまく問題をつかめば洗練された仕事をする可能性を多分に秘めている。現在はまだ問題をつかみきれず、方向を定めかねている状態だ。

他方、ドワイト氏は周知の通り世界的大学で、その洞察力、実績は群を抜いて立派なのだが、私の感じでは、自分の研究を実際の農業に役立てようとする考えは少ない。ただし、彼は自分の研究を他の研究分野、他の研究者に役立てることは常に考えていて、その意味での彼の業績ははかり知れない。ところが、彼は、実際の農作業に役立てようとするような仕事に対しては、「それは単なる技術の問題で、科学の問題ではない。私は科学者だ。」とって多少軽視する傾向がある。ヤンも同様な傾向を持っている。そこで、私はディクソホールン氏と知り合ったときから、彼とドワイト氏を会わせて、お互いの長所、短所を議論させ、それに私が参加させてもらうことは、私にとってもまことに意義深いのではないかと思っていた。彼等は同じワーゲニンゲンに居て、似たようなテーマを研究しながら、お互いに名前は聞いたことがあるが面識はないという。

そこで私はまずヤンとドワイト氏に「ディクソホールン氏と会って話したら、彼はあなたがたの仕事をととても高く評価して、一度会いたいと言っていた」と伝えた。他方、ディクソホールン氏には「あなたの仕事をドワイト氏とヤンに紹介したら、とても興味をもって、もっと詳しく知りたいと言っていた」と伝えた。最初はお互いにそれほど乗り気ではなかったようだが、私が毎週同じ事を言っているうちにやっとディクソホールン氏がその気になり、ドワイト氏に電話をし、今日の会合がもたれた。オランダ人同士の出会いを日本人が取り持つのも変な話だが、要は、お互いに少しでも良い仕事をし、少しでも自分の研究を人に評価してもらいたい、少しでも新しい考え方、知識を得たいという人達の集まりであるから、国籍は関係ない。

この会合は、まず、ディクソホールン氏が自分達の研究を簡単に紹介することから始まった。彼等の仕事は彼等のグループが開発した会話型シミュレーション言語とボンドグラフ法を用いて、温室内気候のシミュレーションを行うことであった。ディクソホールン氏が説明している間、ドワイト氏は頭をかいたり、パイプそうじをしたり、外を眺めたり、さっぱりまじめに聞いている風がない。ところがときどきピシャリと大事な質問をする。

#### ドワイト氏が目の色を変える

話しが終り、コンピュータ室に行き、今述べた仕事のディクソホールン氏による実演が始まるとドワイト氏とヤンの目の色が変わってきた。簡単な指令をコンピュータに与えるだけで、X-Yプロッターとブラウン管にたちどころに、温室内における種々の環境のグラフが描き上げられた。これを見て、「これは面白い、これなら我々の研究にも使えるぞ、おい、ヤン、発芽の問題と、形態発生の問題は、これで簡単にいけるのではないか」とドワイト氏とヤンが話している。

実演が終って、また、部屋に戻り、温室研究の方向についての議論が始まった。まず、ドワイト氏が例の早口でまくしたて始めた。彼は温室環境のコントロール（最適化）を次のように定義した。「水ストレスを一定限度以下に保ち、発育速度をある範囲内に保つという制約条件の下に純光合成速度（生長速度）を最大に保つ」そして、そのためには、これこれのモデル化が必要で、特に発育速度を予測するために形態学的研究が必須であることを強調した。

そこで私は、コントロールの立場から次の三つの問題を提起した。

1. たとえ良い作物生長モデルができて、それによって最適環境条件が一意的に決められる訳ではない。一般に生長速度を最大にする組合せは複数ある。

2. たとえ作物にとっての最適環境条件が決められたとしても、その最適環境条件を達成する工学的手法は複数あり、そのどれを選ぶかは、工学的、熱学的、経済学的視点によってのみ決められる。

3. いかなる場合にも適用できるような汎用作物成長モデルを作成することは不可能であり、モデルは適応的性格をもっていなければならない。しかも、実際の温室のコントロールに大規模なモデルを使用する訳にはいかないので、かなり単純化したものでなければならないから、コントロールシステムがフィードバックループを含んでいることが、モデルの不完全性を補完するためにも不可欠である。

その後しばらく私の提起した三つの問題について議論が噴出した。もうケンケンガクガクで、他人がしゃべっているのにもかかわらずに大声で自分の意見を言い出す人がいる。

私の感じでは、ドワイト氏は作物の生長モデルを作ることに興味の中心があり、それをコントロールに使うことを口では考えているというが、実際はどうもそうではないような気がした。そこで、私は、特に3番目の問題についてドワイト氏の考えをしつこく問いただした。最初彼はモデルが良いものであれば、フィードバックループを含む必要もないし、適応的である必要もないと言っていたが話しを続けているうちに私の考え方を認めてくれた。このときばかりは私の英語表現力が十分でないのにイライラした。もう少し何とかうまく説明できないのか。日本語ならもう少し理づめの議論ができるのだがとくやしかった。でもとても実のある議論で大いに学ぶところがあった。ドワイト氏の考え方を確かめただけでも大きな収穫である。

議論が終ってお互いにまた別の機会にもう一度議論しよう、今度はヤンが彼の仕事を紹介するところから議論を始めよう、ということになった。その後、ディクソホールン氏とIACで昼飯を一緒に食べた時、彼は「こんな素晴らしい議論はめったにない。私の研究方向についてドワイト氏から実に多くのことを学んだ。あなたの仲介の労に感謝する」と言われた。「それは私のよろこびとするところだ。私も議論を多いに楽しんだ」と答えた。

#### 研究とは何かがやっと分かりかける

32才にもなって実に恥ずかしい話だが、最近、研究とは何なのかがおぼろげながら少し分かりかけてきたような気がする。このところ、ここでの、私の仕事のまとめ方に随分頭を悩ませており、こんなに苦しんだのは久しぶりのことである。従来、私はスタート時には悩むがまとめる時期には余り悩まずにいい

加減にまとめてしまう傾向があったようだ。

今度は、ドワイト氏とヤンが私の進捗をチェックする立場にあり、私が「こうまとめよう」と思うと、「いや、それはいかん」と反対され、随分考えさせられた。そして、どうしたら自分の得た結果を他の人に分かりやすく表現できるか、役立ち得る結果としてまとめられるかということを考えた。これはドワイト氏のおかげだと思う。

こんな訳で、ここでの仕事は私のオランダ滞在中にはまとめられそうもなくなってしまったけれども、ここで得た経験は大きいような気がする。それにヤンとの討論も私の考えを整理、発展させるのに随分と役立った。

3月24日（水）

#### 温室設計の相談にのる

となり町アーネムの生態学研究所のモーク氏が温室の設計図をもって私とヤンを訪ねてきた。昨日、電話でルディ氏に、ある人が温室のことで私を今日訪ねるから相談にのるよう頼まれていたのである。

彼は早速大きな設計図を広げて説明し始めた。今度新たに温室を建てるのだが、その温室を研究棟の周囲のどの辺に建てれば日影にならなくてすむかという問題である。南側に建てれば勿論よいのであるが敷地の都合でそうはいかないらしい。話しを聞いていると、最初ドワイト氏の所へ相談にいったらしい。そしたら、ドワイト氏は「この位置では天空光の減少が大きすぎるから建物からもっと離せ」と言ったがどんなものかと言われた。そこで簡単な計算をして天空光の減少は、問題にするほど大きくないことを示してあげた。

次いで直射光の減少（影）の問題を検討した。モーク氏は一応冬至における太陽高度と方位の計算をして影の位置を求めていたが、どこで間違えたのか数字が大巾に間違っていた。そこで、季節毎の太陽高度と方位のグラフを渡し、これを元にもう一度検討するようにお願いした。

3月30日（日）

#### アルバダ夫妻に干拓地帯を案内される

朝7時半からアルバダ夫妻にオランダ西部のジールランド（Zeeland、ロッテル

ダム南側)にドライブに連れていったもらった。先週は夕食にも招かれたし、アルバダ夫妻には何かと親切にしてもらって恐縮している。

週末はヨットのペンキ塗りで忙しいとかで、ウィークデーのドライブとなった。アルバダ一家の趣味はヨットと「鳥の観察」である。長さ10m以上のエンジン付きのヨットを持っていて、夏にはヨットであちらこちらに行くらしい。冬は修理やペンキ塗りで忙しいらしい。奥さんも息子のピーターとしょっちゅう部品を修理したり、磨いたりしている。ピーターは電気、機械に詳しく、電気系統の修理、溶接等は玄人はだしである。彼は現在、兵役を終えて、ユトレヒトで齒の技工士の訓練を受けながら働いている。

朝はまずロッテルダムに向い、そこから南下して、干拓によって出来た島々を訪ねて歩いた。各島々は橋か堤防でつながれている。この辺りの島々の、干拓の歴史は、アルバダ氏の説明によると、14～15世紀に始まり、今でも干拓事業は続けられているという気の長い仕事である。どの島でも海面の下で生活している訳であるから、洪水による悲惨な被害の歴史もまた多い。アルバダ氏は干拓についてとても詳しく、今日のドライブは観光としても勉強としてもとても楽しかった。

途中、何度も温室を見かけ、一寸車を止めてもらって見たくなかったことが何度もあったが、はしたないので我慢した。その代り、今日は、アルバダ夫妻の「鳥の観察」の趣味に、ゆっくりとつきあった。夫妻は、湿地、林、海岸等で鳥を見つけると、車をそっと止めて、倍率の大きな双眼鏡で鳥を観察してはニコニコしている。野鳥にとっても詳しく、あの鳥の名前はこうで、飛び方はどうで、鳴き声はどうで、食べ物はどうだとこと細かに説明してくれる。夫妻で鳥の鳴き声を真似して喜んだりもしている。IMAGのアドリーも野鳥の観察が趣味だ。このような趣味をもっているオランダ人は多いようだ。本屋にも立派な鳥の図鑑がたくさん並んでいる。実際、私たちが日常見ることができる鳥の種類が実に多く、きれいな鳥も多い。私がいる研究所の前の池でさえ多くの鳥が集まって来て、コーヒータイムの時に、話を中断して、皆で鳥を見ていることがある。

まず、Goeree島の西端、ウーストダイク (Oostdijk) で一休止して、砂丘にのぼり、海岸で遊んだ。夏のシーズンにはこの辺りの人出はすごいらしい。今日は、広い砂丘に私達3人だけである。久しぶりに海を見て心がなごむ。変化に富んだ砂丘のうねりが心地よい。しばらく無心に海辺を歩き、子供たちのお土産にと思って貝ガラを拾うが、特にきれいな貝ガラは見当たらない。聞くと、この海岸には、昔、町があったのだが海水に浸食されて、年々海岸線が後退し、



今はなくなってしまったということで、あちこちに、レンガ、カワラなどの残ガイが見られる。歴史の重みをヒシヒシと感ずる一瞬である。実際、こんなに広大な土地を干拓によって作り上げてしまう国民がいるとは信じがたい。更に、その土地を守り、しかし、それでも時には自然の偉大な力に抗しきれず、干拓地を海に返さざるを得ないというドラマは私の想像を超えるところにある。

このような古い歴史をもつ干拓地であるから町の歴史もまた古く、Zierikzee、Middelburg等には、4～5世紀前に建てられたレンガ作りの家がまだずいぶん見られた。古い町に住む人の人情もまた厚く、人なつこく、素朴である。ここまできると、さすがに、日本人は珍しいらしい。

昼食はシオウエン (Schouwven) 島の西端にある小さな港の横のレストランでとった。ヨットの話は大分聞いた。日本では、ヨットは金持ちだけの趣味のような気がするが、こちらではかなり普通の趣味のようである（とはいえ、お金はかかるらしい）。最近、ドイツ人、ベルギー人がこの辺りにやってきて、ヨットを乗り回し、混雑して困ると嘆いていた。

Middelburgでは町の中を1時間半ほど散策した。昔の城下町で落ち着いたたたずまいである。ウィークデーの午後であるし、観光シーズンでもないし、人出が少なくゆったりした気分で楽しめる。アルバダ夫妻の場所の選択と説明は実に当を得ていて色々参考になる。祖国オランダに深い愛着を持った人である。農技研の堀江氏もアルバダ氏とここへドライブに来たらしい。帰途、Gorinchemのレストランで夕食をし、8時前にIACに戻る。

#### あと1ヶ月のオランダ滞在

最近の仕事のまとめ方で頭を悩ましていたところなので、干拓地ドライブはよい気分転換になった。明後日、協同研究者のヤンがモスクワに行き、4月16日まで帰ってこないの、その前にまとめ方だけでも決めておきたいと思ったがとうとう間に合わなかった。今は残り1ヶ月をどう過ごそうかと頭を悩ましている。研究をもう少し進めたいのだが、そうするとまとめるのは日本に帰ってからということになってしまうし、まだ他に訪ねてみたい国もあるし、やりたいことが多過ぎる。あつという間に5ヶ月間過ぎてしまった。

今まで余り考えなかったが、最近つくづく「日本および日本人」ということを考える。海外に出た日本人は誰でも多かれ少なかれ感ずることであろう。また改めて書いてみたいが、結論的には、仕事に関しては「日本独自の仕事をしなければいけない。けっして真似ではいけない。しかし、それは結果的に世界に通用するものが望ましい」ということである。

オランダに来てみて、日本の施設園芸はヨーロッパから実に多くのものを学んで、あるいは真似していることがはっきりした。もうそろそろ、日本独自のものが欲しい。

## 4月13日（火）

立花先生を迎えにスキポール空港まで電車で行く。夕食はホニーの家に招かれる。

## 4月14日（水）

### 日本人訪問者への批判

朝から立花先生とIMAGへ行く。副所長のハーミング氏と制御科長のムルダー(Moulder)氏に挨拶した後、ストファー氏に彼等の仕事を見せてもらう。私はもう三度目の訪問なので、黙っていた。午後は、まずランガース(Langers)氏にコンピュータコントロールの話しを聞く。役立つような話は聞けなかったが、米国DEC社のPDP11というミニ・コンピュータで実際の温室のコントロールをしていた。

午後3時半より、構造科(Structures Department)のスペック(J.C.Spek)氏に会う。開口一番まずこう言われた。「最近2年間に日本人の団体が2回来て、私の話を聞いて帰った。私は彼等にオランダにおける温室構造の基準化に関する資料をすべて渡すと共に、口頭でも詳細な説明を長時間にわたって加えた。そのことについてはあなたがたも当然知っていると思うがあなた方はその他に何を知りたいのか。知りたい点だけを答えるから具体的な質問をしてくれ」という。一見して、仕事ができるが口もうるさいという感じの人で、やりこめられた。

日本人が度々IMAGを訪ずれ、語学のハンデもあって何も分からずに帰ったり、また、持ち帰った資料をろくに利用もせず放り出しておくのに、いささか腹を立てているようだ。そう言われれば一言もない。スペック氏は温室構造力学の専門家で、私は構造力学については全くの素人であるが、立花先生が会いたいと言うので一緒に会ったという感じなので私は質問ができずに困った。何とか話しているうちにスペック氏も色々説明してくれるようになり、1970年

より作業開始して、1976年に施行予定の温室構造設計基準法の原案を見せてくれて、計算式と係数を教えてくれた。その式中の安全係数は住居に対しては1.5を使うが温室に対しては1.2を使うといていた。そして、日本では設計用の風速最大値をいくらに取っているかを質問されたので、覚えていないと答えると、では帰国後手紙で知らせてくれと言われた。

次いでフェンロータイプの温室構造の特徴に話が及び、フェンロー温室はポータル (portal) 構造をしているので丈夫なこと、とい (gutter) が構造材として重要な役割をしていること、弾性率が小さいアルミは構造材としては使わず、常にフレーム (grazing bars) として使うのみであることなどを説明してくれた。そして標準的なフェンロータイプの仕様を教えてくれた。最後の方ではスペック氏は上機嫌になり、和気あいあいのうちに別れることが出来た。

4月15日 (木)

#### オランダの温室構造

朝8時30分にIMAGに行き、またスペック氏に会う。今回は実際の温室を見て歩きながら昨日話題になった点を具体的に指し示しながら説明してくれた。やはり専門家について温室をみると1人で見るのとは理解度が異なる。オランダの温室は、トラスを上手に使って、構造的強度を増しているのが良く分かった。

オランダの園芸用のガラスはほとんどが73 cm×165 cmの大きさに規格化されていて、価格は6ギルダー/m<sup>2</sup>である。通常20枚1セットで売られ、バラ売りはしないという。大量に買えば割り引きがある。住居用ガラス板はどんな大きさでも買えるが15ギルダー/m<sup>2</sup>である。日本とは大分事情が異なる。

午後はCABOで私の仕事の後始末をした。最近はとても忙しく、睡眠時間が少ないので少し疲れた。最近朝6時頃から活動し始め、ベッドに入るのは夜12時～2時頃になることが多い。

4月16日 (金)

#### 1人でロッテルダム観光

今日からイースター (復活祭) が始まり4連休である。日本の、5月のゴールデンウィークのような感じで、多くの人は旅行に出掛ける。IACの住人も1週間

程前から「イースターにはどこに行くか？」とお互いに聞くのが挨拶のようになっていた。カナダ人のドボワ (deBoare) やユーゴスラビア人の「大目玉」が一緒に旅行しようとしてくれていたが結局、私は気ままな一人旅をすることにした。最初はドイツに行く予定にしていたが、未だオランダで見残している所があるので先にそちらを回ることにした。

朝7時半にIACを出て、1週間オランダ国内のどの鉄道も自由に乗れる周遊券 (58ギルダー) を買い、ロッテルダムに向った。ロッテルダムまではネパールから来ている2人連れと一緒にだった。この人達の顔立ちは日本人そっくりである。彼等にそういって、彼等も日本人はネパール人に良く似ている、きっと祖先が同じなんだろうと言っていた。

ロッテルダムの駅で降り、市電でヨーロマスト (東京タワーのようなもの) まで行き、高さ180mの展望台にのぼった。ロッテルダム港が一望のもとに見渡せる。次いで、スピドー社の遊覧船に乗り、ロッテルダム港を1時間15分かかって一周した。

今回の観光旅行では、観光バスとタクシーには乗らないことにしている。最近オランダ国内の様子は大体分かっているし、観光バスに乗るとどうしても通り一遍になってしまうからである。

#### ボーイマンズ美術館に満足する

昼飯は簡単に済ませて、午後からは、市内のボーイマンズ美術館 (Boymans van Beaminngen) へ行った。入ってみてその立派さにびっくりした。この美術館にはレンブラント、ゴッホの作品が数点あると聞いていたので1時間程立ち寄りと思って気軽に入ったのだが、ルーベンス、モネ、シーアック、ゴーギャン、ドガ、ピカソ、ダリ等の絵がところ狭しと並んでいる。特にルーベンスの小品が数多くあり、魅せられた。日本ではもとより、オランダでもそれほど名を聞かない美術館だが、日本でこれだけのコレクションを持っている美術館は残念ながら無い。それに何より一番よいのは、見物人がほとんどいないこと、どんな名作、貴重な絵画でもガラス越しに見る必要がないことである。彫刻は手の感触も楽しめる。気に入った絵は心ゆくまでゆっくり1人で鑑賞できる。

#### デルフトを訪ねる

予定時間を大分オーバーしてしまったが、満足してこの美術館を出て、ロッテルダム駅に戻り、そこから電車で15分ほどのデルフトに向かい、夕刻前に着く。そのまま歩いて新教会のあるマルクト広場に向かう。美しい教会である。

その向かいにある市庁舎は17世紀に建てられたものとかで一見に値する。マルクト広場のお土産屋でデルフト焼（デルフトブルー）を見ているうちに暗くなってきたので、近くのVVV（フィーフィーフィー、観光案内所）でホテルを紹介してもらい、町はずれのユリアナホテルに宿をとる。小さなホテルで、バス無しのシングルルームで25ギルダーの宿泊料。

デルフトの町は陶器の町として知られているが、それ以上に町の中を縦横に走る細い運河と古い町並みが実に調和した美しい町である。アムステルダムの町を歩くと、観光シーズン前の今でも、日本人をよく見かけるが、今日はロッテルダムでもデルフトでも日本人を1人も見かけなかった。ボーイマンス美術館といい、デルフトの町並みといい、まさに観光客が訪れるのに絶好な場所であるような気がするのだが、アムステルダムから一寸離れているせいだろうか。

最近、これだけの運河と干拓地を何世紀もかかって作り上げたオランダ人に一つの感慨を感じる。決して上品なところのないオランダ人であるが、苦勞を表に出さずに、家庭を大事にする点は長所といってよいだろう。あるポーランド人に言わせると、オランダ文化は農奴の文化であり、泥くさくてかなわないそうだが、それもまた真実である。

イースターの第1日、足で歩いたロッテルダムとデルフトにまずは満足である。

## 4月17日（土）

### スヘゲニンゲンとマドローダムで遊ぶ

朝8時にホテルを出て、ハーグに向かう。本当はハーグに行く前に、デルフトでデルフト焼の工場見学をしたかったのだが、見学者が10人以上集まらなると見学させられないというので、諦めざるを得なかった。

ハーグ駅から市電の9番に乗り、スヘゲニンゲンに向かう。ここの夏は海水浴客、日光浴客で賑わうリゾートタウンらしいが、まだ春先だし、しかもあいにくの濃い霧で、海岸には人影もまばらである。ミルク色の霧の中を歩きながら、夏には見られるであろう水着姿の日光浴客をまぶたに思い浮かべたり、遠く日本に思いをはせたり、土産物屋をのぞいたり、1時間ほどぶらつく。

ハーグに来た目的はマウリッツハイス(Mauritshuis)美術館を訪れることなのだが、まだ開館時間の11時に間があるので、近くのマドローダムに立ち寄る。マドローダムにはオランダ各地の名所や建物が2万m<sup>2</sup>の敷地に25分の1の大きさで作られたミニチュアタウンがあって、お子様用だが、大人でもけっこう楽しめ

るほど精巧に出来ていて、風車、電車、船、車等は皆動くようになっている。家族連れで来たい所である。

#### マウリッツハイス美術館で楽しむ

11時過ぎにマウリッツハイス美術館に着く。小規模な美術館だがその内容の豊富さに驚かされる。レンブラントの作品が数多いし、ルーベンスも何点がある。ルーベンスの描いた婦人の肖像画2点は、彼の他の作品とは少し作風が違っていて新たな発見である。ルーベンスの作品には見るたびに引き付けられる。彼の純粋なひたむきな作風、態度、何よりも美しい心、子どものような無垢な心、作品の中に描かれる美しい目、それに何よりもダイナミックな画面……決して単なる宗教画家ではない。

今日の収穫はフェルメールの作品を見たことである。デルフト風景、手紙を書く女は良い。婦人の像 (Head of a girl) の前では足が釘付けになった。作品の展示数が少ないので1時間ほどで一通り見終わった後、一度外に出て軽い食事をしてから、また入館して、ルーベンス、フェルメールを1時間ほどかけて見直し、2時過ぎに外に出る。

#### テイラー博物館でミケランジェロの作品を見る

市電でハーグ駅に戻り、今度は電車で30分ほど北のハーレムに向かう。ハーレム駅近くのテイラー博物館を訪ねるためである。この博物館には化石、鉱石、昔の機械等の他にミケランジェロ、ラファエロ、レンブラント等のデッサンのコレクションがある。数は全部で数十点と少ないが、いずれも一見の価値のある一級品揃いである。あまり知られていないせいか、私が行ったときには私の他に孫らしい子供を連れのおじいさんだけしかいなかった。しばらくするとその2人もいなくなり、博物館の中は私だけになってしまった。しんと静まり返った展示室で、しばしミケランジェロのデッサンと向かい合う。ど素人の私には、もとより作品の良し悪しなどは分らないし、ただ眺めているだけであるが、何か芸術というもののこわさを垣間見た思いがする。

ミケランジェロのデッサンといっても、それはほんの下書きで、彼はそれを描くのに何分もかからなかったろう。それが400年間の生命を持っている。そして才能のない人が5千時間かけてひとつの作品を作り上げても、1年以内に忘れられてしまうことが多かるう。

今日の予定はこれで終りのつもりだったが、ハーレムの駅に戻るとキューケンホフ行きのバスが待っていたので、飛び乗ってしまった。もう4時を過ぎてお

り、これからチューリップ見物するにはちょっと遅すぎるかもしれないと思ったが、最近日は長くなり、7時半頃まで暗くならないので、少しくらいは花を見られるだろうと思ってバスに飛び乗ってしまったのだ。

#### キューケンホフの庭園で花を楽しむ

一人旅は話し相手がいなくてつまらない面もあるが、こうやって自分の好きなものを好きなだけ見てまわり、思いつくままに気軽に予定を変更できる点は長所である。

キューケンホフはハーレムとライデンの中間に位置し、世界的に有名な球根の産地である。キューケンホフの一面が大きな庭園になっており、色とりどりの球根作物が咲いている。その公園へ行く途中の道の両側にある畑にヒヤシンス、スイセン、クロッカス等が見渡す限り色とりどりに咲き乱れている。チューリップの開花最盛期には少し時期が早くて、チューリップは早生品種しか開花していないのが少し残念である。5時前から6時までキューケンホフ公園の中を散策する。シャクナゲの植え込みがかなりあり、満開のものもあった。園内は相当広いのにかなりの人混みである。世界各国からの旅行者らしく、フランス語、英語、スペイン語、イタリア語が飛び交っている。イースター祭で、ことさらなのであろう。

昨日、今日と強行軍だったので、少し疲れた。予定では、今晚はハーレムに宿を取り、明日アルクマールから締切大堤防を渡ってワーゲニンゲンに帰るつもりだったが、予定を変更して今晚ワーゲニンゲンに帰ることにした。来週20日（火）から3日間、今度は仕事で研究所、会社、温室等を回ることになっているので、その日までに疲れを取り除くため、明日は休養が必要であると判断したからである。美術館回りやチューリップの花見等はあくまで趣味であり、仕事ではない。オランダ最後の温室見学をするのに、疲れてぼんやりしてしまっではもったいない。気ままな1泊旅行だったが、結構楽しめた。夜10時過ぎにIACに戻る。今日は17日、あと2週間で帰国である。残り少ないオランダ生活を有意義に過ごしたい。

4月18日（日）

#### オランダ人は春の到来を楽しむ

午前中、休息する。午後から、山口一家に誘われるまま、郊外へ花見に行く。

ワール川、ライン川沿いは日光浴やキャンプをする人で賑わっている。風のない、おだやかな日なので、多くの人は水着姿で寝転んで日光浴をしている。春を楽しんでいるようだ。

## 4月19日（月）

### 思いつきでドイツに行く

イースター祭の最終日である。昨日は早めに寝てゆっくり休んだので、今朝起きるとすっかり疲れが取れていた。朝食を摂りながら、急にドイツへ日帰りで行くことを思いつき、すぐ出かけた。

アーネムから電車に乗り、デュッセルドルフに正午に着く。そこで降りて昼食を摂り、ちょっと町をぶらついた後、また電車に乗り、ケルンに向かう。車窓から見える春景色はこの上なく平和である。遅い春であるが、その代わり、春は一度にどっと押し寄せてくる。モクレン、レンギョウ、サクラ、アンズ、シャクナゲ、チューリップ、スイセンが同時に満開で、世界が一度に華やいに見える。イースターとはキリストの復活を祝うというよりは、この春を楽しむための休日と解釈した方がよさそうにさえ思える。

2時前にケルンに着く。駅前をブラブラした後、ライン川沿いに出て岸辺を散策する。昨日と同じく、川沿いには水着で日光浴する人があちこちにいる。半年間にわたった冬が今終り、春の到来を全身で受け止めているのだろう。岸辺から種々の遊覧船が出ているので、そのうちのひとつ、1時間で付近を一回りする船に乗り込んだ。川では、はや水上スキーに興じる人、モーターボートで水しぶきを上げている人、みな水着である。対岸には花が咲き、小鳥が鳴いている。

私は10日後には日本へ帰国する。この6ヶ月間にいろいろ経験したことをひとつひとつ思い浮かべながら、春のその風を顔に受ける。隣りに座った人がさかんにドイツ語でなにやら話しかけてくるが、チンプンカンプンで、ただニコニコ笑うしか手がない。ドイツではドイツ語しか通じない。駅の案内係でもドイツ語しか話さない。こちらが英語で聞くと、なにやらドイツ語で答える。何か単語の一つでも聞き取れたら、それについてまた英語で聞く。すると向こうはまたドイツ語で答える。それを3、4回繰り返しているという訳か、大体は話しが通じるようだ。最後はにっこりわらって「なんだかさっぱりわからない。」と日本語で言って別れる。すると向こうはお礼を言われたのかと思って、つられてニコツとしている。夜8時少し前にIACに戻る。



4月20日(火)

### 温室会社を訪ねる

朝7時にIACを出て、オランダ最大の温室会社の一つであるフォスカンプ社(Voskamp en Vrijland)のあるS-Gravenzandeに向かう。S-Gravenzandeはナールドバイク(Naaldwijk)の隣町にあたり、デルフトから車で20分位かかる。

10時に会社に着いた。

出迎えてくれたのは、2月にブライスバイク(Bleiswijk)での園芸展示会でいろいろと説明してくれた輸出部のコルテカース(Kortekaas)氏である。まず応接室で会社案内のパンフレットを見ながら会社の概要を説明してもらった。温室会社といっても日本のそれより規模が大きく、会社内部に設計、換気、かん水、制御パネル等の各部を持ち、各部に10人程の設計技師をかかえている。売り上げの40%以上は輸出による。イギリス、アイルランド、フランス、ドイツに支店を持ち、アメリカ、カナダ、ベルギー、チリ、コロンビア、ギリシャ、イスラエル、イタリア、日本等に代理店を持っている。会社は創立25、6年で、もともとは住居用の家を建てる建築会社だった。戦後しばらくして温室建設を手がけはじめ、今は温室および温室に関連するシステムを売っている。関連システムとしてはボイラー、暖房設備、かん水設備、換気システム、真空凍結設備などを手がけている。

フォスカンプ社の温室の構造的な特徴などを聞いた後に、同じ敷地内に有る工場を見てまわった。鉄骨のプレス加工、穴あけ、アルミの裁断、加工、トラス構造の電気溶接、アルミフレームの組み立て、コントロールパネルの製作、かん水チューブの裁断、換気装置の部品、C型鉄骨<sup>とい</sup>、樋の成形まで会社でやっている。

大きな工場内で、労働者が、流れ作業的に忙しく仕事をしている。私達のように温室を眺めているのは楽だが、騒音の中で温室を作る側の人の苦労は大変だ。今はボイラーの組み立てを自社でやっているが、これは経済的に引き合わないで、今後は他社のボイラーを使うそうだ。骨材どうしの接続金具も作っていた。木材のフレームも作っていた。会社としては木材は経済的にも引き合わないで使いたくないが、農家が妻壁や側壁には木材を使うことを希望するので、仕方なく使っているが、おそらく農家の懐古趣味なのだろうと言っていた。場所によって、写真を撮るのを禁じられたのが残念だった。

オランダの温室会社はお互いの競争が厳しく、経済性の向上、強度の改良に

少しでも後れを取ると、たちどころに倒産すると言われている。この会社の温室構造には、少ない部材でいかに強度を増すか、作業性を増すかというところに種々の工夫が見られる。それに、やはり、多くの開発部員をかかえているのは強みだ。このような温室会社は日本には存在しない。オランダにいてもなかなか見るチャンスがないので、今日の訪問は有益だった。

### 温室地帯を散歩する

昼まで見学した後、「明日はナールドバイクの試験場を訪ねるので、近くのホテルを紹介してくれ」と頼んだら、車でホテルまで送ってくれたが、そこはあいにく満室だった。そこで、隣町のポエルダイク(Poeldijk)のホテル・フェルバーハ(Verburgh)に連れていってくれた。ポエルダイクは人口数千の小さな町で、町の中心以外は四周見渡す限り温室が続いている。ホテルのレストランで昼食をとった後、午後は予定を組んでいなかったのので、カメラをぶらさげて、近くの温室を見て回った。古くからの温室地帯らしく、建てられてから2、30年は経ているような木造温室から、最新式の鉄骨アルミ温室までが、ずらりと並んでいる。

温室建築の歴史を写真に残すつもりで、手当たり次第にシャッターを押した。私は写真を撮るのが下手なので「下手な鉄砲も数撃ちゃ当たる」式に撮りまくった。いろいろ観察してみると換気窓の構造などに歴史的な発展があり、興味深い。

オランダでも片田舎のここまでくると、日本人(外国人)を見かけるのが珍しいらしく、私が通ると、人が振り返ったり、子供たちが近付いてきて話し掛けてくる。温室の写真を撮っていると、中から人が出て来て、中に入って写せと手招きで入るように勧めてくれる。皆ひとなつこく親切そうな感じであるが、この辺まで来ると、英語を話す人はほとんどいないので、会話は身振り手振りである。道で行き交う人も必ず挨拶を送ってくる。こちらもバカの一つ覚えのオランダ語で「ダーハ(こんにちわ)」と答える。午後4時ごろ一度ホテルに戻って10分程休憩した後、今度は、先程見た所の反対側の温室を6時半頃まで見て回った。今日の午後は5時間ほど歩きづめで温室を見たことになる。

温室地帯はだいたい交通の不便なヘンビな所に有るので、車を持っていないと見学には不都合なことが多い。しかし、今日は車を使わずに自分の足だけで温室見学をする長所を最大限に生かせたと思う。車を使っていたら、今日みたいな微に入り細にわたるような温室見学はとても出来ないだろう。今日は晴天で暖かかったので、ちょうど、昆虫や植物が好きな人が野原をピクニック気分

で歩きながら写真を撮るような感じで、温室を見て回れた。足は疲れ、土踏まずの部分が痛むが、心地よい疲れである。

オランダでは髪も身体もよごれにくい？

帰りに床屋に寄った。これでオランダの床屋は二度目である。私は日本では少なくとも月に一度は床屋に行き、普通の人よりも短めに髪を刈っている。髪の手入れはしたことがないが、風呂に入る毎に頭を洗うので、短くないと不便だからである。少し毛が伸びてくると気になる。ところがオランダに来てからは、髪の毛がいくら伸びてもさほど気にならない。第一の理由は髪の毛が汚れないからだと思う。ほこりが立つということがほとんどないし、汗ばむことがあまりなく、湿度が低いせいも、汚れが少なく、髪の毛を洗う頻度はオランダに来てからずっと少なくなった。ヨーロッパの男性が髪の毛を伸ばしたり、ひげを伸ばすのはそれが理由のひとつにあるのではないかと思う。私の観察ではオランダ人男性の約3分の1弱がひげを伸ばしている。

下着やワイシャツを着替える頻度も少なくなった。以前、コーヒータイムの時、私が「日本では、夏には、多くの人が下着やワイシャツを毎日取り替える。」と話したら、おどろいた風だった。オランダ人は下着（シャツ）をつけずに、いきなり色物の木綿か毛のシャツを着て、しかも1週間くらい同じものを着ている人が多い。女性でもそんな人が割と多いようだ。

4月21日（水）

温室野菜試験場のコンピュータ温室を見る

朝6時に目覚める。昨日とは打って変わって曇天で肌寒い。昨日もらったパンフレットにしばらく目を通した後に、朝食をとる。食後1時間ほど、また近くの温室を見て回る。温室の写真を撮っていたら、その主人が出て来て、中に入って写真を撮ってよいから入れと言ってくれた。オランダ語と英語とドイツ語をミックスしながら彼が話してくれたところによると、彼は2.5haの温室を、常時4人で、収穫時には2~3人の臨時雇いを入れて管理しているという。テッポウユリとカーネーションとストレリチアを栽培していて、ストレリチアは卸値で一花2ギルダーで売れると言う。彼の奥さんは子供がいるので温室では働かない。これは他の所でも聞いたが、経営者の奥さんは温室内では働かないのが普通だ。日曜日は誰も働かないという。

9時半にナールドバイクの温室野菜試験場のストライボッシュ氏が私達をホテルに迎えに来てくれた。彼は温室内の湿度制御法であるストライボッシュ法の開発者として、日本の私達の仲間では名の知れた人である。

試験場に着くとすぐファンデフォーレン (Van de Vooren) 氏に紹介された。彼はコンピュータ制御科 (Computer Control Department) の科長だ。まだ34才とかで、ワーゲニンゲン農業大学の園芸学科で植物生理学分野の統計解析で学位を取り、その後、1年半兵役を務めた後、この試験場に来たという。若くして重要ポストに抜てきされた人だけあって、活動的な自信家タイプで、彼等の仕事をまず概括的に説明してくれた。Computer Control Departmentは約3人の研究者、3人のプログラマー、2人の栽培担当者、その他数人の研究協力者及び会社のサービスがあるそうである。

ここでは一区画56m<sup>2</sup>の温室24区画が個々にコンピュータ・コントロール出来て、各区画毎に栽培試験が行えるようになっている。コンピュータはシーメンス社のプロセスコンピュータ330で記憶容量は56キロワード、演算は16ビット、入力チャンネルは760点で、昨年5月から本格的な栽培試験が始まったという。全工事費は約4億円で、そのうちの6千万円がコンピュータ買価だという。

当面は各種の環境条件下における栽培試験の統計解析を行なうということで、研究方向として目新しいことは聞けなかったが、システムそのものはシーメンスの助力を大分受けているようで、スマートにまとまっていた。

コンピュータ周辺装置としては、コンソール・タイプライター、カラー・ディスプレイ、マグネット・テープ、ディスク、紙テープ・パンチャー、リーダー等がある。

当然、話はコンピュータの使用法になったが、彼はまだはっきりした方向を決めかねているようで、シミュレーションにも使いたいし、自分の専門である作物生理の統計解析、その他栽培試験一般のデータ処理にも使いたいとのことであった。まだ若いし、1年前にシステムが動き出したばかりだから当然かもしれない。私の考えを述べると興味を持ってくれて、私が今月末に帰国すると言うと残念がっていた。以前にCPO研究所のシャラ (Challa) 氏から私のことを聞いて、一度ゆっくり話したいと思っていたのに、と言っていた。私も願ってもないところだがもう予定が詰まっていて、1日は割けない。それにしても、私と同年代の研究者が10人以上の部下と年間4億円の予算を使うとは恐れ入った。しかし、この研究所の予算の30% (以前は50%) は農家が出資しているので実用的な研究成果を出すことが至上命令なので、苦労が多いと思う。

その後、温室とコンピュータールームに連れていってくれて、実物を見ながら説

明してくれた。まだコンピュータの能力の10%も使っていないような感じだが、現時点では当然だろう。制御環境要素は温度、湿度、CO<sub>2</sub>濃度、土壤温度、土壤水分等である。最近、光合成速度も試験的に測定しはじめたという。システム全体を記述した文献(Noth. J. Agric. Sci. 1975, 238-247)をもらった。

昼食の時間に、彼とストライボッシュ氏と私達で近くのレストランに食事に行った。ファンデフォーレン氏は、時間的余裕があったらハーグにあるシーメンス社およびライデンにあるインダル(Indal)社を訪れるとよいといっていた。きっと有意義なディスカッションが出来るという。

#### ストライボッシュ氏の顔色が変わる

私が、ストライボッシュ氏の名は日本ではとても有名である、温室研究者は誰でも知っている、三原義秋教授の温室気候のテキストにも詳しく説明されているという、とても喜んでいた。「ところが、ある人達はストライボッシュ法とデルタエックス・コントロール法を混同しているようだ。」と言うと、ちょっと顔色が変わり、詳しく説明しはじめた。「本質的には、両者は余り変わらないが、発表したのは私の方が先で、彼(ハイナ氏)は私の方法を真似しただけだ。それに湿度を測る彼の方法は実際的でない。第一、彼は彼自身の発想がないから、現在、研究方向を見失って何をしたら良いか分っていない。」となかなか手厳しく批判していた。「その点、私のストライボッシュ法は、現在、ファンデフォーレン氏がコンピュータを使って発展的に継承してくれている。」とのことだった。湿度をコントロールの指標にするのは測定精度の面と、植物と空気との湿度に関する相互作用の面で好ましくないと言う。2人とも、是非日本を訪れて日本の温室研究者と会い、温室を見たいと言っていた。ファンデフォーレン氏は日本の誰かから招待状をもらいたいと言っていた。

#### 温室コンピュータ・メーカーを訪ねる

食事後、ファンデフォーレン氏とは再会を約して別れた。ストライボッシュ氏が私達の次の訪問先である、ホヘンドールン社(Hoogendoorn社)へ車で連れていってくれた。ホヘンドールン社は温室環境制御のためのコンピュータコントロールシステムを、ハードウェアとソフトウェアを一式にして売っている所で、業界の第一である。

この種の会社として、当初、ファンデルバーグ社(VAN DER BURG社)を訪問する予定だったが、いろいろな人の意見を聞くと、どうもホヘンドールン社の方が訪問先として良さそうなので、急きょこちらに変更したのである。この会社

は、当初は温室環境制御のためのアナログ・コントローラーを販売していて、今でもそれを売っているのだが、最近の大規模温室の環境をコントロールするのにアナログ式はコストが高すぎて、ミニコンピュータを使う方が安価なので、コンピュータを使ってダイレクト・デジタル・コントロールをしているのだという。

会社に着いてみて驚いた。ボロの木造3階建てで、3階は柔道、空手の道場に貸しているという。壊れそうな階段を上って2階に案内され、デフェッフエ(de Veffe)氏に紹介された。彼はソフトウェア開発の責任者だが、まだ若く、ワーゲニンゲン農業大学の園芸学科卒業だという。

まず全体的なプログラムの説明を受ける。実演しながら説明してくれた。温室農家の人はプログラムやコンピュータのことを全く知らなくても(ちょうど、テレビの構造を知らなくてもテレビを見ることが出来るように)、操作出来るようになっている。農家の人はテレタイプに打ち出される「気温の設定値は?」「灌水の時間間隔は?」というような質問に、数字で答えればよいようになっている。それも一度答えれば、あとは変更を必要とするまで打ち直す必要はないし、間違えておかしな数字(たとえば気温の設定値として40℃)を打つと、コンピュータが「この数字に間違いはないか?」とメッセージを送ってくる。論理的な間違い(たとえば暖房パイプの最高温度を60℃、最低温度を70℃に設定する)をしても、「最低温度より最高温度が低いとは?」とメッセージを送ってくる。

コンピュータはフィリップス社のP852を使用し、コアメモリーは8キロワードだという。一概には言えないが、温室規模が1ha前後以上ならコンピュータを使った方が長期的に見れば安価であるといっていた。しかし、ミニコンピュータでなければだめで、マイクロコンピュータでは制限が多すぎて使いものにならないといっていた。

この会社はすでに30台のコンピュータを温室農家に売っている。その他ファンデルバーク社が1台、インダル社(INDAL社)が1台売っており、現在32台が商業温室の環境コントロールに働いているという。その他、2社が現在ソフトウェアを開発中らしい。

この会社の実績が飛び抜けて高いのは、この会社がアナログ・コントローラーを温室に使っていた経験が長いので、そのノウハウに詳しいからだという。大きなコンピュータ会社やソフトウェア会社は温室環境管理の経験が無いために、環境管理装置の設置、管理、その他のノウハウが無く困っているという。

## 農家のコンピュータ温室を見学する

実際に農家の温室で動いているコンピュータを是非見たいと言うと、近くのシヨプレイデン(Schiopluiden)にあるファンルイベン(Van Ruyven)氏の温室に連れていってくれた。この温室の総面積は1.2 haで、労働力は4人でトマト(品種: Sonatoとde Ruiten)を栽培している。

まず驚き、かつ、「これだ!」と感心したのが、コンピュータが置いてある一室である。作業場の6~7m<sup>2</sup>の一角を汚いドアで仕切った狭い所にある、1.5m×1m×0.6m位の鉄製の箱の上にテレタイプがポンと置いてある。コンピュータ本体と入出力装置はその鉄箱の中である。これがコンピュータだと言われなければ、誰も気付かないであろう。普通見られるようなコントロールパネルは無く、記録はテレタイプ紙に打ち出されるのみである。

第二に感心したのは、そこの主人が、今までトマトの選別をしていた汚れた手で、まるでテレビのスイッチを入れるような気軽さで、テレタイプのボタンを押し、何でもなく、説明してくれる。気分ったところがないし、特別の事をしているという気配はない。ふつうの人が電話をかけたり、電気掃除機を使うときの表情と同じである。これこそ私が「そうあるべきだ」と思い続けてきたことである。トマトとクワを握っているその同じ手でコンピュータをいじっている。

「コンピュータを買ってどうだ、もうかったか?」とデフェッフェ氏に聞くと、「さあね、まだ分らんね、それより、このトマトの味はどうだ?意見を聞かせてくれ。」ときた。このトマトの70%は西ドイツに輸出されるという。このトマトの味に彼は非常に満足しているらしい。

このコンピュータシステムはソフトウェアを含めて(制御機器を除く)約600万円だという。なぜそんなに安く作れるのかと尋ねると、第一に、アナログ入力、デジタル出力装置の徹底的な簡素化にあるという。通常のアナログ入力装置はいろいろな使途の可能性を考えて、複雑な回路を採用しているが、この会社では、環境コントロールに最低限必要な回路だけの独自のアナログ入力装置を開発し、大幅にコストを下げたという。一般に、アナログ入力の点数が多くなると、その価格はコンピュータ本体の価格より高くなるから、この工夫は有効である。

第二に、ソフトウェア(プログラム)はどの温室農家にも共通なので、2台目からはプログラム開発費がかからず、売れば売れるほどコストは下がっていく。プログラムはコンピュータシステムと一式にして売り、プログラムだけでは売らない。プログラムは、機械語(バイナリープログラム)に直して、他の

人には理解出来ないようにした後、コンピュータの記憶装置に記憶させた形で売るといふ。

こんな事故はまだ実際には起っていないが、例えば、コンピュータが故障してもう一度プログラムをコンピュータに記憶させねばならないときは、どうせ会社の人が現地に行かねばならないのだから、農家にプログラムを紙テープ等の記憶媒体でわたしておいても無駄だといふ。

私が、このコンピュータを環境コントロールだけでなく、例えば、収穫期の運搬、選果、包装、会計等にも共用出来ないかと聞くと、それは私達も最初から考えて用意はしている。ただ、まだ農家側からの需要が出ていないから実現していないだけだといふ。

この会社のプログラム開発の基本方針は「環境コントロールの設定値及びその変更は100%農家の責任で行ない、それに関しては会社は一切関知しない。ただし、論理的、常識的におかしな設定値を農家が与えた場合は、コンピュータが警告を与える。そして、設定値の与え方は、農家が希望する範囲内で、最大限にきめこまかく与えられるようにし、しかもそれを最も簡単に出来るようにプログラムを工夫する。与えられた設定値を確実に遂行、達成するのは100%会社の責任で行なう。異常が起きたときの警報は出すが、アナログバックアップ装置はつけない。アナログコントローラーは高価だし、デジタル装置の信頼性は年毎に高まっているということである。アナログコントローラーを売っていた会社の人が言うのだから、これは本当かもしれない。

ホヘンドールン社の建物の1階は組立工場になっていて、7~8人が配線作業をしているような小規模な会社なので、小回りのきく仕事出来る。しかも温室の中で汗をかきながら仕事をすることによって、農家の心の奥まで入り込めるのかもしれない。

4月22日 (木)

アールスメアーの花き試験場へ

朝9時過ぎにアールスメアー(Aalsmeer)の花き試験場 (Proefstation voor de Blomistery)を訪ねる。この訪問の約束はIMAGのムルダー氏を介してお願いした。私達を迎えてくれたマールセン(Maarssen)氏は事務部の渉外係のようで、「試験場内を順次連れて回るが、技術的なことは分らないから聞かないでくれ。」といふ。大変感じの良い青年だったが、質問出来ないのには一寸困っ



た。これだったら、この訪問も私が直接約束を取るのだったと思ったが、今となっては仕方がない。気を取り直して、「とにかく順次案内して下さい。」と頼んだ。。

ここには前にも一度訪ねて、その時は専門家に案内してもらっているので大体は分っている。その時はまだ鉄骨の組み立てが始まったばかりだったコンピュータ温室の、その後の進展具合を確かめるのが今回の私の訪問の目的であった。そこで、コンピュータ温室を充分みたいので、まずそこへ連れて行って下さいと頼む。まだ工事中で、70%の仕上がり具合だった。鉄骨アルミ構造は完成し、ガラスがはめてあり、多くの人が内装工事に汗を流していた。

環境制御装置にいろいろな仕掛けがあるようだが、質問に答えてくれる人がいないので、自分で眺めたり、さすったりしたもの、分らない点が多々出てくる。一切の配管は床下にあり、水、暖房用温水、土壤消毒用蒸気、炭酸ガス施肥、測定等のパイプが床下に一列に並んでいる。暖房用パイプは移動可能の、吊り下げ式である。一部、日長制御室がある。

全体的な印象としては、ナールドバイクの野菜試験場のコンピュータ制御温室を一回り小さくした感じである。1時間ほど眺めていたが、やはり細かい点までは分らないまま、この温室に別れを告げた。その後、順次他の温室、設備等を見て回り、写真を撮った後、正午前に試験場を出る。

見学旅行最後の場所としてはものたりないが、これはこちらの責任なので仕方がない。1時間半ほどかけて、歩いて町の中心まで、温室を眺めながら戻る。アールスメアにはこれでもう4回来たことになり、町の地理もだいたい覚えてしまった。

## 4月23日(金)

研究成果をドウイット先生に報告する

朝8時にワーゲニンゲンの研究所(CABO)の自室に着く。今日は朝8時半より、私とヤンがドウイット教授に、私がオランダ滞在中にした仕事の報告をすることになっている。

残念ながら、こちらでの仕事をオランダ滞在中に論文にまとめるまでには至らなかった。こちらで作った計算機プログラムの使用説明書の原稿を書き、論文に載せられるような図の鉛筆書きの下書きを書き、それに簡単な注釈を付けたところで時間切れである。ただ、今回のこちらでの仕事は以前の私のした仕

事と関連があるので、それについての論文を2編ほど、夜、暇なときにこつこつ書き上げたものがある。

そこでそれら原稿2編と、プログラム、図、下書き原稿等に目を通しながらドワイト教授の到着を待つ。彼は8時半少し前にやってきた。こちらの教授は朝来るのが早い。アルバダ氏は朝7時半から8時くらいの間には研究所にやってくる。

まず私が図を示しながらドワイト教授にオランダで得た研究成果を30分程かけて説明する。私達は温室内作物の純光合成量を計算するための計算機モデルを作り、その具体的計算例として、温室の建設方位と屋根傾斜角を変えた時、温室内光合成量がどの程度変わるかを計算したのである。

私の説明が終ると、彼はまず「ところで、最終的結論として、建設方位によって温室内の作物の成長が異なるとするのかね?」と聞いてきたので、「両者には冬期には10%の差があるので、異なるというてよいと思う。」と答えた。

すると、彼は「その結論の出し方は間違っている。作物成長は温室の建設方位によってそれ程影響されないと結論するのが、本当ではないか?」と言う。

#### ドワイト先生に反論する

ここでひとしきり議論が行なわれる。彼は例によって早口で筋道だって議論を進めてくるが今回だけは私も負けてはいられない。半年間の研究をどうまとめるかが問題となっているのだから。しかし彼の言うことには筋が通っており、私も首肯出来る点があるので、私は一步後ろに退くことにした。

「分かりました。私はあなたの結論に賛成します。結論には賛成しますが、その結論をどう引き出すかについて私の考えがありますので聞いて下さい。」といった。

「温室の方位、構造に作物成長が影響されるかどうかについては、過去に、数多くの理論的、実験的研究があります。そしてそれらの結論はお互いに矛盾しあっているのが実情です。ところが今回私達が得た結果は、それらの長年の議論に終止符を打てるだけの内容があるような気がします。というのは、私達が得た結果から【なぜゼトマトでは方位の影響が現れず、レタスでは現れるのか】【なぜ理論的推測と栽培実験の結果が異なるのか】【なぜ温室内の光環境の測定結果が人によって異なるのか】等の各研究者間の矛盾を、かなり説明出来るからです。」と言って具体的に例を上げて説明した。

## ヤンとの討論

この時、ヤンのところに電話が掛かってきてヤンが中座した。するとドワイト氏は一寸話題を代えて、「お前はヤンと沢山ディスカッションしたか？ あいつはお前の良いパートナーになれたか？」と尋ねてきた。

そこで私は、素直に「今回のオランダ滞在で最も有意義だったものの一つはヤンとのディスカッションである。彼とのディスカッションは実に楽しく、かつ有意義だった。」と答えた。するとドワイト氏は「そうか、実は彼は私の実に良いディスカッションの相手であり、良きパートナーなのだ。彼とのディスカッションで私は実に刺激を受ける。」と言う。

そこへ、ヤンが戻って来ると、ドワイト氏はヤンに向かってこう言った。「どうだ、ヤン、今思いついたのだが、お前達のこの研究成果をシミュレーション・モノグラフ（双書）の1冊として本にして出版してみないか、どう思う？」

そこでひとしきりヤンとドワイト氏がそのことについて話していた。ヤンは「こんな研究を本にしても特殊すぎて買ってくれる人が余りいないだろう。それに、量的にも少なくとも1冊の本になるかどうかは疑わしい。」と言う。ドワイト氏は「シミュレーションモノグラフは双書だから各本の内容とは関係なく、そのシリーズ全てを買い集める図書館や愛好家が沢山いるよ。世の中にはそういうマニアがいるものだ。」と言って笑った。

「それに本の厚さはプードック出版社との初期の契約で、50ページ以上にまとまったら1冊にして良いことになっているのだ。」と言う。

## 研究成果の出版を勧められる

しばらく彼等で話しをしていた後、最後に私の意見を求めてきた。全く突然そんなことを聞かれても私にはどう答えていいかわからない。とにかく「そう言ってくれるのはまことにありがたい。しかし今私の最終意見を言うわけにはいかない。日本に帰って相談しなければならぬ。」と言った。ドワイト氏が私達のオランダでの仕事を1冊の本にしたらどうかと勧めてくれるのはまことに嬉しい。英語で本を書けるチャンスなどめったにない。それ以上にそのように私達の仕事を評価してくれたのが嬉しい。

他方、どちらにしても私のオランダでの仕事は論文の形でいずれ発表せねばならないのだが、論文ならばタイプライタ用紙20~30枚で済むものを、本となれば厚さの薄い本でも100ページは書かねばならないだろう。日本に帰ってそんな時間が取れるだろうか。日本に帰れば色々な仕事が私を待っているだろう

し、オランダと異なって日本は週6日制だし、夕方5時に帰宅するわけにもいかない。家に帰っても子供が寝るまでは仕事をするわけにはいかない。半年間も家を空けたのだから、しばらくは日曜日に大学に行って仕事をするようなことをせず、子供達と遊んでやりたい。

私がいまいな返事をしたのでドワイト氏は私の気持ちを計りかねている。欧米人が最も不可思議に思う日本人の態度だろう。そこで私はかさねて「私としては嬉しい話だが十分な時間が取れるかどうか分からない。」と言うと、「それではこうしろ。お前はここでの仕事をどうせ論文にまとめるつもりだろう。それにここで書いた二つの論文を合わせたら1冊の本になる量がある。あとはハサミで切り貼りしろ。最終原稿はヤンと私が作ろう。」

### ドワイト教授の集中力と真価

ドワイト教授の表情がすこしづつ変わってくる。何かを考えはじめているのであろう。「まず、本を書くときの一般的な注意をしよう。本は読みやすくなければいけない。特に本の前半では細かいことに触れてはいけない。話の本流と支流をはっきり分けねばならない。支流は大きすぎたはいけない。お前の仕事は少し細かいところまで進みすぎている。それらを捨てて、本流をもっと大事にしろ。

そうこうしているうちに、「よし、目次と大体的内容はお前の帰国前、すなわち、今作ってしまおう。ちょっと紙切れをもってきてくれ」という。こうなると、もうお手上げである。

ヤンと私は顔を見合せた。ドワイト氏はなにやらぶつぶつ言いながら、紙に何かを書きつけている。目次を作っているらしいのだが、字が達筆なのか下手なのか私には全く読めない。しばらく書いては、ウームといいながら、大きな×印をつけて、もう1枚紙をくれと行って、新たな紙にまた書き始める。私はとなりでかきこまって紙を1枚づつわたすだけである。

こういう時のドワイト氏の集中力には想像を絶するものがある。他人には何を考えているのか全くわからない。彼の頭脳の中では脳神経がフル回転しているのだろう。窓のすぐ外で土木工事がはじまり機械の騒音が一段とうるさくなった。「ものを考えるには一寸音がうるさすぎるな」と言って廊下をへだてたとなりの部屋に移った。私達もついて行く。

しばらくして、やっと書き終わったらしく、「これでどうだ」と言って紙切れを1枚ポンと渡された。何を書いてあるのかまったく読めない。何かが十数行書いてある。ヤンが「あとでタイプライタで打ち直して君にわたすから」と言ってそ

の紙はヤンがうけとった。「この目次どうりに書けば、お前のいうように温室の方位と構造に関する光の問題には研究に終止符がうたれるからな」と言い残して彼は部屋から出て行ってしまった。

ドワイト教授に研究のまとめ方を教わる

何という洞察力、構成力、理解力だろう。全くいやになってしまう。私はもう10年間も温室のことで仕事をしており、彼は温室のことなどほとんど知らないはずなのに、私より温室をよく理解してしまい、本の目次を作ってしまうなんて。後でヤンにタイプしてもらったドワイト氏の目次をみると、まことに簡単な要点だけの配列なのだが、実にうなずける構成である。今回のオランダ滞在でドワイト氏からは多くのものを学んだが、「研究のまとめ方」についてもそのうちの一つである。

今考えてみると、私は温室を愛し、温室農業を愛してはいたが、それは盲目的、ミクロ的であったような気がする。巨視的に一度温室から遠くはなれて大きな愛で包み、小さなことは思い切って切り離す度量がなかった。そのため細かい所まで目が届いたが、そのために愛は偏愛的になり、温室の一面しかみていなかった。それは見方を変えれば自己愛ともとれる。自分の得た研究結果を拡大解釈し、余りにも意義づけに腐心してきた。

今回のドワイト氏のまとめ方は、「今回私達の得た結果からは、特に有意義な結論を引き出すことは出来なかったが、それはこれこれの理由による。過去、この問題に関して、ある人はそれを過大評価し、ある人はそれを過小評価して来たが、それはこれこれの理由による。したがってこの問題に関する各研究者間の矛盾は、このように解決され、終止符が打たれた。」

4月24日(土)

ドイツへの日帰り旅行を思いつく

朝7時半にIACを出て、エデ・ワーゲニンゲン(Ede-Wageningen) 駅 8時11分 発ミュンヘン行きの列車に乗り、ドイツライン川沿いのローレライ見物に行く。当初、この旅行はアーネム、デュッセルドルフ、ケルン、ボン、コブレンツの順序で列車を乗り継いで行き、ライン川でもっとも景色が良く、ローレライで有名なコブレンツ-マインツ間は遊覧船で上るつもりだった。しかし、明日はワーゲニンゲンの日本人グループが私のためにさよならパーティーとし

てオッテルローの森林公園に皆で行くというので、急遽日帰り旅行に変更した。列車はボンからマインツまで、ほぼライン川に平行して走るの、船と列車の違いは、移り変わる景色の早さの違いだけである。

ケルンまでは先週行ったので、それまでは列車の中で書き物をし、外は余り見なかった。コブレンツを過ぎた頃、食堂車に行き、食事をとりながら景色を眺める。ライン川で作られた峡谷、その上にそびえたつお城等が目を楽しませる。あいにくの小雨で、遠くの景色はかすんでいる。

満開のナシの花を見ながら、この6ヶ月間に経験したことをひとつひとつ思い出していく。昨日のドワイト氏の話で興奮したためか、昨夜は夜中に目が覚めてしまった。

マインツには12時28分に着き、すぐ12時52分のケルン行きの列車で戻る。もっとゆっくりしたいのだが、今日は是非帰途にフェンローに寄りたいためである。

#### フェンロー温室発祥の地を訪ねる

フェンロー(Venlo)とはオランダの中東部のドイツ国境に接した町で、ドイツのデュッセルドルフに近い。フェンローは、この日記の中でもしばしば述べたように、フェンロー型温室の発祥の地でもある。

昔、フェンローは主要な温室地帯だった。現在はアールスメア、ナールドバイク等の温室地帯に押されて、温室面積は減少し、昔日の面影はないという。私がフェンローを訪ねてみたいと思うのは単なる好奇心である。行ってみたいところでどうということはないだろう。これは、例えば、ゲーテ研究者がゲーテの生家を訪ねたりする心境と同じであろう。

5時過ぎにフェンローの駅に着く。時間がないので駅前からタクシーでフェルデン(Velden)に向う。フェンロー郊外のフェルデンに温室が沢山有ると聞いていたからである。車で数分の距離だった。温室が沢山有りそうな所で車を停めてもらった。新しい温室と古い温室が半々くらいに並んでいる。今日の目標は古い温室を見ることである。

#### 感動で胸が高鳴る

新しい温室には目もくれずに足早に古そうな温室に近づく。レタスが植えてあった。その構造を見て、あっと驚いた。まさに、夢にまで見たフェンロー温室の原型である。この温室の基本構造は鉄骨であるが、その他の構造材は木造である。現在の近代的フェンロー温室の基本構造は鉄骨で、その他はアルミである。つまり、木造の部分がそのままアルミに変っただけで、その他はほぼ同じ

である。樋はやはり丈夫な巾の広い鉄骨を使い、構造力学的にも重要な意味を持たせてある。フェンロータイプとは、外観や連棟や屋根傾斜角に特徴が有るのではなく、基本構造に特徴が有るのだ。感動で胸が高鳴る。

誰もいなかったがそっと中に入って見る。外からでは換気窓がどういう仕掛けで開くのかよく分らなかったからである。換気窓につながる鎖をそっと外してみても驚いた。普通の換気窓は開けるときに力を必要とし、閉めるときは自重がかかるので余力を必要としないのだが、ここの換気窓は仕掛けが逆になり、開けるときには力が要らなくなっている。「開く」といっても換気窓が持ち上がるのではなく、下がってくるのである。曇り空で、もう6時を過ぎようとしている。うまく写真が撮れるようにと念じながらシャッターを押す。

考古学者が高松塚古墳を見つけたときの興奮！ではないだろうが、何か訳の分らぬ興奮が胸を走る。何度も換気窓を開閉してみる。今、私はフェンロー温室発祥の地に立っているのだ。

次いで近くの別の温室に行ってみる。温室の前で馬の足を丁寧に洗っている親子に温室を見せて欲しいと頼む。子供の方は20歳前後だが英語を良く話す。今日のはじめて会った英語を話す人である。ここの温室はやはりフェンロータイプだが基本構造を含めすべて木造である。しかし、基本構造はフェンロータイプそのもので、やたらと太い柱が使っている。換気窓は自動開閉になっている。この温室は14年前に建てたそうである。今年中にこの温室はとりこわして新しいのに建てかえるといっていた。

彼は私がなぜ日本からこんな片田舎まで温室を見に来たのか不思議に思ったらしく、その理由を問うて来たので「フェンロー型温室の原型を見に来たのだ」と答えた。それでも彼にはその理由が良く分らないらしく、「私達の新しい温室も見てくれといって、となりにある真新しい、フェンロー温室、ボイラー室、自動制御盤などを見せてくれる。私の方は新しい温室は今までも見ているので、今日は古いフェンロー温室を1分でも長く見たいので、もう一度、「私は古い温室だけを見に来たのだ」といって古い温室の方へ行く。

オランダもここまで来ると外国人、特に日本人はめずらしいのだろう。近くで遊んでいた子供たちが集まって来て、私をめずらしそうにみている。持ち合わせていた日本の1円玉と10円玉を皆に1枚づつあげる。

お礼を言って別れ、更にもう一つの古そうな温室を訪ねた。この温室は現在ではもう使用しておらず、ところどころガラスが割れたり、木がくさったりしている。中に入って写真をとる。これもフェンロー型である。大きな満足感と疲労感が一度にどっと出る。疲れた。大きな道に出てバスを待たせたが中々来ない

ので1時間かけて駅まで歩いて帰る。途中、古物屋でおみやげにとても良いものを見つけたのだが、残念ながら6時閉店でドアが閉まっている。疲れはてて11時にワーゲニンゲンにたどりつく。

#### 強行スケジュールに疲れ果てる

最近10日間程、すいみん時間は4~5時間だし、早朝から夜遅くまで活動しているので疲れがたまっただろう。数日前から時々心臓がギューと痛みだすことがある。実のところ、3月のロンドンとパリへの旅行の後、私の肉体はかなり過酷な目に会わされてきた。風邪を引いたまま、まだ寒いヨーロッパを8日間歩き回ったため、風邪をこじらせてしまい、その後2週間程の間に、2日間ほど食物を何もとれなかったことが2回あった。頭痛と吐き気と熱でベッドから動けず、せめて水だけでも飲まなければと思って、無理してベッドから起きると、吐いてしまう。吐くといっても胃袋の中に食物はいっていないから出てくるのは黄色い胃液である。胃液だけならまだよいのだが、その中に血のかたまりが10数個混っているのが気になった。

咳がどうしても止まらず、一寸冷たい空気を吸ったり、他人のタバコの煙を吸ってしまうと、もうどうにもならない程咳こんでしまう。恐らく気管支炎が悪化したのだろう。ひょっとすると、こじらせて、肺炎か肋膜炎か結核にでもなりかけているのかなとも思った。身体もだるい。痰はみな血痰である。半年か一年オランダで入院することになるかなーと思いこまざるを得ないような状態に何度かあった。

#### オランダの開業医

医者に二度治療を受けに行った。オランダの医者は中々見識があつておもしろい。2日間食物をとれずに3日目にどうやらやっとベッドから起き上がれるようになったとき、このままでは衰弱してしまうからと思って、医者に行った。ふつうに歩けば10分で着く医院に、フラフラしながら40~50分かけてやっとたどりつき、診てもらった。問診をされた後、1分程聴診器をあてられた結果、「異常音は聞こえない、風邪がひどくなっただけだ、早く帰ってベッドで4~5日寝ていろ。1週間もすれば良くなる」といって、処方箋を書いてもらえず、すすぐ帰らざるを得なかった。日本だったら、食物もとれず、吐気、熱、血痰、頭痛、ひどい咳となったら、血沈速度、血圧位は計り、場合によってはレントゲン撮影もするだろう。そして注射の1本は打ってくれるだろう。結局、何も薬をもらえずがっかりして帰った。



二度目に行ったときは、私がとにかく何か薬が欲しいから処方箋を書いてくれと頑強に頼んだら、書いてくれたが、それをもって薬局に行くと、薬局でくれたのは「甘くてとろりとした水あめ」のようなもので、これは何のくすりだと聞くと「ノド」のくすりだという。日本の「浅田あめ」を液状にしたようなもので、くすりと呼べない代物である。

医者に言われた通りにベッドでおとなしく寝ていれば良いのだが、仕事をしなければならないし、帰国の日がせまってくるので、外出したい気持が先に出て、一寸良くなりかけるとすぐ起きて色々動き回り、すぐまたダメになってしまう。

とうとう観念して4月8日～4月11日の4日間おとなしくベッドで寝て、残り3週間の身体コンディションをととのえることにした。4月10日にはアムステルダムに本拠地をおく世界的オーケストラ楽団コンサートヘボアの演奏するバッハの「Mattheus Passion」を聴きに行き、11日にはオランダの古都ライデンを訪れる予定だったのだが、涙をのんで中止した。この二つの予定を中止したのはいまだに残念至極である。

異国で病気になるのは、実につらい、貴重な体験であろう。基本的には、私がオランダの冬を甘く見たのが原因であろう。時にはあたたかくなるが、天気が変わりやすく、4月に入っても、朝方は0℃以下になることがたびたびあった。外の空気はつめたく、風は強い。私が11月にこちらに来たときはもうすでに冬であったから今年は半年間近く冬を過したことになる。それで気管支がまいつてしまったのだろう。

最初に医者に行ったとき、私が「ノドが痛い」と訴えると医者は「お前はタバコを吸わんだらう」「タバコを吸わんやつはノドが弱いんだ」といった。まるでタバコを吸うことを勧める口ぶりである。でも確かに、風邪を引くとノドをやられるようになったのは私がタバコを吸うのをやめた2年前以後である。

今はとにかく何とか日本にたどりつくまで自分の身体がまいらないように気を付けなければならない。もう一度フェンローに行って温室を見たい気持は山々なのだがやめておこう。

4月25日（日）

日本人によるお別れピクニック

私が近々帰国するというので、ワーゲニンゲンに住む日本人が私のためにお

別れピクニックを企画してくれた。場所は車で30分程の所に有るオッテルロー国立森林公園である。クレラーミュージーラー美術館はこの公園の中にある。

参加者は14人（成人男子6人、成人女子3人、子供5人）で、現在イギリス旅行中の松浦氏を除く全員である。ワーゲニンゲンのアパートに住んでいる3家族が日本のお弁当を用意してくれた。外で食事するには一寸寒かったが午後からは次第に暖かくなった。

思えば、夢のような6ヶ月であった。この記録ではワーゲニンゲンの日本人のことをあまり書かなかったが、それは日本人との付き合いがなかったことを意味するのではない。しばしば皆で集まっては飲み、かつ食いながら談笑し、愉快的時を過した。ただその時は日本式で楽しんだので、わざわざ記録するには及ばなかっただけである。京都大学助教授の福井氏は皆に、ワーゲニンゲンの村長と呼ばれていた。しばしば、福井氏その他の家に呼ばれて夕食やお茶をご馳走になった。私が風邪をこじらせて2日間何も食べていないと聞きつけて「おかゆ」を作ってくれたのは山口夫妻である。小島、坂本両氏とはよくIACの9階のバーに行った。坂本氏の車で日帰りでドライブを楽しんだことも数回ある。

仕事上の専門がまったく異なる人々と話すのはとても楽しく、人生を豊かにしてくれる。集まっては、日本について、オランダについて、ヨーロッパについて議論し、また生活情報の交換もした。

皆の好意に感謝しながら、日本風の巻き、おむすびをたらふく食べて、だだっぴろい森林公園内を散策し、最後の見納めに、美術館内のゴッホの絵を見て回る。特に絵が好きだったわけではない。ど素人の私が数多くの本当の良い絵を見ることが出来たのは、まことに幸いであった。

## 4月28日（水）

### オランダ人によるお別れパーティー

夜、ホニーの家で、ドワイト氏のグループが集まって、私のさよならパーティーをやってくれた。ドワイト夫妻、アルバダ夫妻、ルディー夫妻、サベリス夫妻、ヤン、ホニー、フリッツ、ドヨンたちが集まってくれた。皆、なにかと私に気を使ってくれた人達である。

宴たけなわの11時頃、ドワイト氏が代表して、私の子供達と妻の為に、と言って、オランダの子供用の歌のレコード、パズル、オランダ紹介の本をプレゼントしてくれて、別れの言葉を述べてくれた。

その中でドワイト氏は「私は初めて君と会い、10分程話したとき、君とヤンがコンビを組めば実に良い話し相手になり、しかも良い仕事が出来てであろう事を確信したので、多少無理を通してもらって君とヤンを結び付けたのだ。外国で研究するには良き研究協力者を持つことが、良い仕事をするための必須条件であるからだ。そして結果は私の期待していたようになった。私は若い研究者が調子良く仕事を進めているときには何も言わずに、困っているときだけ助言することになっているが、今回は助言する必要をあまり感じなかった。それに君の英文原稿を読ませてもらったが、君の英文は実に明瞭で分かりやすい。おそらく日本語でも正確な文章を書いているのだろう。出来る限り早く、シミュレーション双書原稿を書いて、私とヤンのところへ送って欲しい。シミュレーション双書の1冊として君達の仕事は立派に出版する価値がある。最後に、君は家族を日本においてひとりでオランダに半年間生活し、君自身も、又君の家族もきっと寂しい思いをしたことがあったろう。帰国後はこの私達のささやかなプレゼントを活用して、妻と子供達と、努めて一家団らんの時間を持って欲しい。次回オランダに来るときは、家族と来るように。」と言った。

お別れの挨拶であるから、ほめられるばかりで恐縮したが、素直に喜ばせてもらった。

4月29日(木)

#### アルバダ家によるお別れパーティー

昼食をアルバダ氏の家に招かれた。アルバダ夫妻には最初から最後まで親切にしてもらった。ワーゲニンゲンでの最後の食事である。やはり別れはつらいものだ。日本に帰りたいたいという気持と、別れを惜しむ気持は矛盾せずに同時に存在するものらしい。

オランダでの生活を私がいかに楽しんだかを話し、アルバダ夫妻は、彼等が日本で会った人々のことを思い出しながら、皆によろしくと言う。

#### ドワイト氏の受賞祝賀パーティー

昨日、所長のハーストラ氏に別れの挨拶をしに行った。その時、「もう帰るのか？この前来たばかりだと思ったのに！ところで、明日は何時にワーゲニンゲンを発つのかね？もし3時半過ぎまでワーゲニンゲンに居るなら、明日特別なパーティーがあるので一寸出席していかないかね？」とハーストラ氏は言っ

た。「明日は夕方までにスキポール空港まで行けばよいので、時間的余裕はありますが、いったい何のパーティーなのですか？」と聞くと、

「明日はCABOの職員全員が集まってパーティーをするのだが、まだ誰にもどういう目的でパーティーを開くのかを言っていないのだ。職員には、とにかく用があるから3時半に集会室に集まれ、としか知らせていないのだよ。」と言って、要領の得ない答えである。

しばらく口をもごもごさせていた後、「よし、君だけには秘密を漏らすか、決して誰にも他言しないでくれ。これは私しか知らないことなのだ。」と、3回も繰り返して言うてから、次のようなパーティーの目的を教えてくれた。

「実は、明日はユリアナ女王の誕生日の前日で、毎年その日には、功績のあった人に勲章が贈られるのだ。そして今年はCABOのドワイト氏が叙勲されるので明日そのパーティーがある。勲章の授与パーティーはとても珍しいし、それに外国人である君が出席するのは面白いと思うがね。」と言う。

そこで言われるままにパーティーに出席してみた。開会の挨拶は所長のハーストラ氏がした。オランダ語なので何を言っているのかは分からないが、皆を10～20秒おきにげらげら笑わせている。日本だったら大真面目にほめたたえただけだろう。とにかくドワイト氏は農学研究者として世界的な科学者であると同時に、社会問題、政治問題にも造詣が深く、その活躍は顕著であるということらしい。実際、ドワイト氏のエネルギー問題、労働問題、農業人口論等に関する論議は傾聴に値する。

次いで、奥さんを連れてやってきたドワイト氏が挨拶に立った。ハーストラ氏におとらず皆を笑わせている。後でフリッツに聞いたところ、話しの要旨は「勲章の話は初めて聞いたときは、すぐさま辞退しようと思った。そんなものは欲しくなかったし、必要ないと思ったからだ。しかし、考えてみると、私が勲章を辞退したとして、その辞退した話を私が一生他言しないでいられるかが心配だった。私はきっと10年以内にその話を他人に漏らしてしまう。人間はそういう話に死ぬまで口をつぐむのは難しいものだ。しかし、それが出来なければ、本当に辞退したことにはならないだろう。それで、もらうことにした。」ということ話を話したらしい。正式な授与式は午前中にハーグで済ませてきたらしい。

私はカメラを持ち合わせていたので、フラッシュをたきながら写真を撮っていると、ハーストラ氏がやってきて、「ドワイト氏の背広の胸に勲章を付けさせたいのだが、どうしても付けたがらない。君が、写真を撮って日本で見せたいと言えば承知するかもしれないから、一寸頼んでみてくれ。」と言うので

ドワイト氏に尋ねてみると、頭を掻きながら、「君に頼まれたとなると断るわけにいかないだろう。これは例外的行動だ。」と言いながら、胸に勲章を付けた。なかなか立派な勲章である。次いでに奥さんと並んでもらって、パチリとシャッターを押した。うまく写っているとよいが。

#### アルバダ氏との別れ

5時半頃、アルバダ氏の車でエデ・ワーゲニンゲンの駅まで送ってもらう。ワーゲニンゲンの景色もこれで最後かと思うと万感が胸に込み上げてくる。アルバダ氏に何かお礼を言いたいと思うのだが、なかなか声にならない。車が駅に近づく頃、やっと心が落ち着き、改めてお礼を述べる。

アルバダ氏は、「ドワイト氏から聞いたのだけど、君とヤンとの仕事が1冊の本になるらしいね。これで私は君の世話をした甲斐があったよ。」とつぶやいていた。私の方はまだ100%心の踏ん切りが付けられずにいるので、うまく返事が出来ない。しかし、本当に有意義な半年間だった。何とか有終の美を飾りたい気持ちも強い。駅のプラットホームで固い握手を交わし、再会を約束して別れる。

4月30日（金）

#### ドイツのハノーバー工科大学を訪問する

朝10時にハノーバーに到着。ハノーバー工科大学園芸学部のザベルティッツ(Zabeltitz)教授を訪ねる。彼は、現在のドイツ温室環境工学研究分野で指導的立場にある。この学科から温室環境に関する研究で博士号を取得した人が数多く出ている。工科大学にある学科らしく、研究は実証的、実験的にまず進め、その後、理論面を固めていくという方法を取っている。そして、ドイツ人らしく、綿密、克明な段階式発展法を取る。

私にとっては不幸なことに、彼等の仕事のほとんどはドイツ語で発表されているために、文献だけでは十分な理解が出来ない。そこで日本に帰る前に是非一度訪ねて、実験設備を自分の目で確かめたいと思っていたのである。研究の範囲は幅広く、暖房、換気、光、微気候、ガラス強度など、全般的にやっている。

ザベルティッツ氏はまだ若い教授であった。活動家、実験家らしく、会ったとたんには挨拶抜きで、いきなり仕事のことを話しはじめた。概要を聞き終った

ところで、氏は誰かに呼び出された。

その間、若い研究者エルスナー (Elsner) 氏が私を外に連れ出して温室を見学させてくれた。実際に研究にタッチしている人らしく、説明は細かく、実験装置を詳細に説明してくれる。現在、彼は暖房方式の違いによる温室作物群落内の微気候を詳細に測定していた。水分収支に特に注意しているという。この測定が終わったら、群落微気候のモデルを理論的に考察するつもりだと言っていた。案内の途中で、エルスナー氏は「この学科では、助手は6年間働くと必ず何処か他へ出て行かねばならない規則があって、研究がまとまった頃は研究条件のひどく悪い、地方の試験場か民間会社に行かねばならないのが残念だ」と言っていた。

それ程広くない敷地内にある実験測定装置を見て回るのに、3時間を費やしてしまった。見せてもらうというより、途中で立ち止まってはエルスナー氏と話し込んでいた時間の方が長い。日本の温室に多いに興味を持っていて、また知識も持っていた。途中からザベルティッツ氏も加わり、2人で説明してくれる。次いでザベルティッツ氏の部屋に戻り、彼等の得た最新のデータを交えながら2人で説明を続けてくれた。

温室研究が盛んな国と言えば、オランダ、ドイツ、ベルギー、イギリス、日本等だが温室成果の多くはそれぞれの自国語で書かれているので相互理解が容易ではない。各研究者は英語文献を読めるが、それ以外の外国語が読めない場合が多いからだ。ただし、英語に加えて、オランダ人はドイツ語とフランス語を解し、ベルギー人はオランダ語とフランス語を解す人が多い。今回のハノーバー訪問で、ドイツ温室研究の現状を垣間見ることが出来た。文献をいくつかもらったので、帰国後ゆっくり検討してみたい。

### 私の性格と外国生活

昨日から変なことを考え始めた。私は小さい時から、火事、けんか、台風などが好きで、それらが身近に起こると落ち着いていられず、血が騒ぐ。野次馬根性だろう。どういう訳か生き生きしてしまうのだ。昔からこの私の性格はあまりほめられたものではなく、自分でも感心しないでいた。ところが、どうもこの半年間、オランダで生き生きと生活出来たのは、この野次馬根性のお蔭ではないかと思われるふしもある。毎日毎日、火事やけんかや台風を見歩いていたようなものである。1分先、1時間先に何が起こるか分らないという未知な世界に血が騒いだのかもかもしれない。

明日は帰国である。少し、疲れている。日本に帰った時、オランダ生活の疲

れで立ち上がれなくなるようなことのないように祈る。

## 〈著者紹介〉

古在豊樹（こざい とよき）

専門分野：植物環境工学、園芸環境学

1943年9月生まれ

1967年3月 千葉大学園芸学部園芸学科卒業

1972年3月 農学博士（東京大学）の学位授与  
東京大学大学院農学系研究科博士課程修了

1973年3月 大阪府立大学助手 農学部

1975年11月～1976年5月オランダ・生物・化学研究所留学

1977年3月 千葉大学助教授 園芸学部

1982年5月 日本農業気象学会賞受賞

1990年4月 千葉大学教授 園芸学部、現在に至る

1991年9月 日本植物工場学会学術賞受賞

1992年7月 日本生物環境調節学会学術賞受賞

1997年4月 日本農学賞受賞

1999年4月 千葉大学園芸学部長

## オランダ留学便り

1999年5月15日 第1刷発行

著 者 古在豊樹

発行人 廣田 喬

発行所 ライフリサーチプレス

〒156-0053東京都世田谷区桜2-19-32

電話・編集部03(3706)0919

© Toyoki Kozai 1999, Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします



ISBN4-906472-40-0 C0095 ¥1000 E

発行 ライフリサーチプレス

定価 本体 1000 円 (税別)